
あるいはこんな異世界で

aoha

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あるいはこんな異世界で

【Nコード】

N6096J

【作者名】

a o h a

【あらすじ】

現実世界から逃げ出した先は異世界。
アルバイトから一転国王陛下。
今日から僕はこの世界で生きていく。

この物語はライトでコメディを主体とした読み物ではありません。
極めて現実的な内容となっておりますので、ご了承ください。

プロローグ（前書き）

「小説家になろう」を読み荒らしていたら急に書きたくなったモノです。

突発的、衝動的に書き始めたのでいつ止まるかは気分次第！

プロローグ

異世界召喚。

漫画や小説ではメジャーな一ジャンルとして確立されているそんな現象に立ち会う機会ってのは、決して多くはないと思う。

それは現世界との隔絶を意味するから。

家族。友人。恋人。

地球。社会。家庭。

それらからの断絶を意味する。

たった一人、異世界への旅。

帰還の見込みは無い、片道旅行。

それは、現世での死とほぼ同義。

そんな愚かしい世界に飛び込んでいける馬鹿は、そんなに多くはない。

余程の豪気者か。

馬鹿馬鹿しいまでの正義の味方。

そして、逃亡者。

僕は、ただ逃げ出したいだけの逃亡者だった。

* * *

大学を卒業はしたものの、就職に失敗。そこからは分かりやすい下り坂が待っていた。

折りしも、空前の大不況。新卒者ですら就職が困難なご時世に就職浪人の僕が就職なんぞできるわけもなかった。一日の大半をアルバイトに費やし、なんとか毎日を生きている。そんな状況。覇気や生気なんてのは失われて久しい。特に落ち込みの酷いときに思い出すのは、いつかに出会った少女。

「国を救ってくださいる方を探しています」

そんなことを真剣な表情で語って見せた少女。

高校三年の頃だったか。受験勉強で鬱屈していた僕にそんな風に声をかけてきたのは。

なんの新興宗教だ、とそんな感想を抱いたのが最初だった。でも、それでも気分転換くらいにはなるかと思って色々聞いた。……紅白袴の改造巫女衣装のコスプレ姿の胡散臭い女ではあったけれど、日本人離れした容姿と風貌は見ていただけで眼福モノだったから、というのが一番の理由だった。

彼女の口から語られたのは異世界召喚モノのテンプレート（お決まり）。

曰く、彼女の王国は代々国王を異世界から召喚して、その知識と教養をもって発展してきたのだという。そして王が亡くなり、次代の探しているのだという。もちろん、魔法で。

高校生だった僕は、気晴らしとばかりに色々なことを聞いた。

地理。政治。社会体制。思いつく限りのことを聞いた。

それが真実かどうかはどうでもよかった。それが彼女の想像の産物であっても、聞くだけの価値があった。真実、納得させられるだけの重みがあった。

「私の国を、救ってはくださいませんか」

僕は、その求めに応えることは無かった。

巻き込まれる形での召喚ならば、散々わめき散らした後にでも最善の方法を模索するくらいのこととはしたかもしれない。しかし、選択肢が与えられているのであればそんな誘いには応じられるはずも無い。

勉強漬けの毎日は確かに苦しいが、無事に合格すればめくるめくキヤンパスライフが待っている。そんな不確定な世界に、命の遣り取

りをしなければならぬような世界に自分から飛び込んでいくような真似ができるはずもなかった。その時の僕には。それから十年。

楽観的な希望など全く失ってしまった僕の前に、そいつは再び現れた。

全く変わらない容姿とは裏腹に、すっかりとくたびれてしまった表情。彼女もまた、失意のうちにこの年月を過ごしてきたのだろう。後姿が、それを雄弁に物語ってた。

「やあ」

彼女は緩慢な動きで振り返り、力のない瞳が僕を見据える。十年前はあんなに輝いていたのに。

「ああ、いつかの」

彼女もまた、覚えていた。

「国王様は見つかったかい？」

「いえ、誰も」

彼女はゆるゆると首を振った。

「それじゃあ、立候補してもいいかな」

「…何にです？」

「貴女の国への亡命者として」

「待遇は厳しいですよ」

「構わない。少なくとも、この世界よりは有意義だろう」

ブローグ（後書き）

誤字・脱字などありましたらご一報いただけるとありがたいです。

一話 孤立

異世界とやらにやってきてすでに三年がたった。

状況はなにも改善されていない。

むしろ悪化の一途をたどっている。

国民の弾圧。

過度の重税。

政治・経済の硬直化。

さらにそれらに伴った治安の悪化。

権力機構の腐敗は極限に達していた。

そういつた事情は召喚の巫女　ラフィリアから聞いていたけれど、貴族たちはそれをおくびにも出さない。

「陛下の御威光は国の隅々にまでいきわたり、平民は皆陛下を尊敬しております」

彼らが決まって口にする言葉だ。

惜しめない賞賛と美辞麗句ばかりが並べ立てられる。

何もしてないのにどうやったら国民が尊敬などするというのか。

もし、それが本当だというのなら王であれば誰でも良いのだろう。ただの記号だけの存在だ。などと皮肉ばかりが思い浮かぶ。

…第二次世界大戦中の天皇陛下もこんな感じだったのだろうか。元の世界にいた頃は思いもしなかったことばかり考えてしまう。

しかし、そんな耳に心地よい言葉が嘘だと僕は知っている。ラフィリアが教えてくれた。

けれど僕は何も知らない風を装い、素直に騙された振りをしている。こんなことをしている間にも、本来守るべき国民は苦しんでいる。それでも、なにもできなかった。

まだ。
今は

* * *

グラーフ王国。

それが僕の治めるべき国の名前だった。

決して大きな国ではないながらも、広い海岸線を有した国境でもある巨大な山脈が鉱物資源と豊かな水をもたらす。地理的にはかなり恵まれた国だといえる。海流の影響である程度の四季もある美しい国だ。

そのような豊かな条件を兼ね備えている割りに今まで他国の侵略を受けたことが無い。というのも、豊かな実りをもたらす海流は急で、海底の地形から酷く潮が読み難いことから一国を襲うほどの海軍を投入できないこと。そして陸路は巨大な山脈が行軍を阻むかのように聳え立ち、大規模な行軍を極めて困難にしていることがその理由だ。更に、国境山脈は神代の時代から生き続けるエンシエントドラゴンの縄張りであり、そこを軍団が通るのは困難だとされている。縄張りをあらされて怒らないほど、エンシエントドラゴンは大人しくはない。

そんな事情があつて、グラーフ王国は腐りに腐り、乱れに乱れているにも関わらず、他国からの侵略を受けずにいる。本来なら国の腐敗は他国の侵略を許すきっかけとなるために、自浄作用が働く。ある程度の不正はあるにしてもあからさまにはならない。

しかし、この国は違う。

海と山に守られ、かつ豊かであるために本来は自戒し国をより発展させるべく働く貴族たちが私利私欲に走り、富と権勢の我欲を満たすために暴走を始める。そして、そういう奴等は悉くがその富を手放すまいとして結託する。法を歪め、金に飽かせて道理を捻じ曲げる。…そしてそれを止める術は民にはない。国の腐敗は政官財が

結託して完成する。

僕が召喚されたのは、そんな国だった。

一見、大切にされているようで毛ほども価値を見出されていない。あるとすれば召喚王としての未知の知識による新たな権勢。召喚された僕が持ち込んだトランクケースを見る目は暗い情熱を宿した目だった。…なんにしても、欲の塊でしかない。

味方は全く居なかった。

宰相も近衛の騎士団長も、宮廷魔術師も。全てが金で地位を買ったよくなやつらばかり。唯一、国王不在の間閑職として干されていた侍従長くらいのものであった。その彼にしても、権限の大部分を削ぎ取られ今は居ない国王の身边のお世話とこれまた誰もいない後宮の管理を行うのみで全く政治に関わることは無かった。悪いことはこれで終わらない。召喚して早々に巫女ラフィリアとは引き離され、後の報告によれば召喚の術による無理が祟り間もなく死亡したという。十中八九、殺されたのだろう。虚偽か真実かを確かめる術は僕にはないけれど。とりあえず、僕としては一番信頼できるはずの人を、何かが始まる前に失ったらしい。それともこれは警告か。”我々の利益を損なうような真似をするならばお前もこうだ”ということか。

元居た世界も地獄なら、逃げ出した先の世界も地獄で当然。

でも、抗う術はある。お飾りでも王は王だ。

社会の部品から、社会の意思を操作しうる立場。

状況は正に最悪。

国の傾きを直すどころか、改革の基盤を作ることからはじめなければならぬ。

それよりも先に、快適な生活環境からだろうか。

「まあ、精々引つ掻き回してやるぞ」

一話 孤立（後書き）

主人公の名前を出し損ねてタイミングを見失った（笑）

二話 これから？（前書き）

早くも評価をいただきました。ありがとうございます。

二話 これから？

お飾りの王様のやることは少ない。

好んで読んだ異世界召喚モノの主人公たちは揃って山のような書類と格闘して睡眠不足に悩んでいたものだが、僕には縁の無い話のようだ。なんといっても、政治に関わるようなことが一切無い。数日に一度、ご機嫌伺いか定期報告のようなものを聞かされるだけ。頭を突っ込もうと思えばきつと難しくないのであるが、それは命懸けになるだろう。腐った貴族連中というのは自分の利益を損ないそんな存在には敏感だ。過敏とすら言える。 漫画や小説などの貴族像からの推測だけだ。

しかし、概ね正解のようだ。施策の報告に来たナントカ伯爵に少し変更してみてもどうかと提案したときの目がそう物語っていた。僕にあるのは召喚王という立場だけ。古くからある血筋でも、救世の勇者でもない。首を挿げ替えることくらい、なんてことはない。いくらでも替えの利く道具ではない。雁字搦めのお人形。マリオネット

もし、国民が一斉蜂起すれば、全ての元凶という事実をでっち上げてスケープゴートにされるのはほぼ確実というオマケつきだ。有難すぎて涙が出る。

だが、今は耐える時だ。

力を蓄えて、念入りに下準備をすることだ。

マッチ一本でも大火事を起こすことは出来る。でも、そんな偶然を期待するのは愚かなことだ。大火事にしたければ空気の乾燥した日を季節を選び、油を撒く。そうすれば確実。そのための、準備。

トランクケース一杯に持ち込んだ宝物が役に立つ日は遠そうだ。こちらの世界に来てから一度も開けることなく、居室のベッド下に放置されている。上手く事が運んで、傀儡から実質の王として立つときが来たならばそれは確かな繁栄を約束してくれるだろう。物語の中の主人公たちが持っているような、身体強化や底なしの魔力は僕

には無いけれど、ついでに人望も信頼できる仲間もいないけれど、僕の手の届くありったけのものをトランクケースに詰め込んだつもりだ。

当面、僕に出来ることは勉強と訓練の二つだけ。というよりも、最重要。

この国の文字を覚え、言葉を覚え、習慣を覚えなければならない。特に言葉は重要だ。

様々な特典がないのはまあ構わないにしても、整合性保持のための言語調和　異世界に居るはずなのに、言葉は不思議と通じる

がないために、大変に不便だ。そのあたりのことは、皆心得ているようですぐに翻訳魔術を掛けてはくれたのだが…これまた効果時間というものがあって度々掛けなおしてもらわなければならないという面倒っぷり。しかも、この魔術。なかなか高等な魔術らしく、かけてくれた魔術師は結構辛そうにしていた。さすがに、何度も何度も掛けなおしてばかりもいられないと、古代の遺跡から発掘された意思疎通のマジックアイテムが献上されることになった。憎たらしいとばかり思っていた貴族たちだが、このときばかりは心から感謝したものだ。

これで言葉の問題は解決…と思っていたのだが。

「なりませんぞ、陛下」

勉強部屋（本来は執務室だが）に戻るなり、老侍従長にたしなめられた。

「ストラト」

「陛下のお言葉が不自由な間はそれでもよろしい。ですが、この先外国へ訪れることもありましょう。一国の主ともあるうお方が、翻訳魔術に頼っているようでは示しがつきませんぞ」

ストラト侍従長の言は至極真つ当。反論の余地は全く無い。

なので、当面は語学を中心に学ぶことになった。といっても、机にかじりついて文法がどうの、というのではない。意思疎通のマジックアイテムを外して話し、つけては意味を確認する。全く以って非論理的！と叫びを上げそうになるが、確かに一番早く身につくかもしれない。実践英会話、といったところ。

このストラト侍従長。

髪はすっかり真っ白で薄くなりはじめた老境の男性だが、背筋はピョンと伸び、眼光にも全く衰えが感じられない完璧な紳士っぷりである。初めて顔を合わせたときはすっかり耄碌ジジイだったのだが

みるみる力を取り戻し今ではこの通り。人間は環境の申し子、とはよく言ったものだ。少しでもだらけた発言をしようものなら生活指導が入る、スーパー侍従長である。更にスパルタ教師の称号もオマケで献上する。

さつき、語学を中心に勉強を…と言ったけれど。実践会話形式でやる、と言ったけれど。

会話の内容は断じて世間話ではない。その内容すら勉強だ。その知識の広いこと広いこと。古典文学？の類から地理から法律から。なんでもござれの生き字引。

なんでも王の身边のお世話は警護も兼ねるよう侍従長自身、高位の魔術師であるらしい。知識の門番たる魔術師が一般人。しかもこの世界の人間に知識で負けるはずも無いが、あまりにも万能すぎる。

「お褒めに預かるようなことではございません。いつか王になられる方のため、知識を蓄えただけに過ぎませぬ」

とはストラトの談。

侍従の鏡といえよう。

二話 これから？（後書き）

… 会話が少ない（笑）

そして登場人物がやっと三人です。

三話 これから？

剣、というやつは意外と重い。

言うまでも無く、鎧はもっと重い。

標準的な長剣で約2.5kg。

漫画やゲームによく登場する板金鎧 プレートアーマーになつてくると身動きが取れなくなるほどの重量になる。約30kgといったところか。もっとあるかもしれない。しかし、そんな重い鎧を着て戦うのは騎馬兵であり、鎧姿が制服であるような騎士たちも普段はもっと軽装であるという。それでも、20kg近いそうだが。

さて。

どうしてこんな話をするのか、というと『今の僕にできること
その式 - 訓練 -』の実行のため、身体に見合った装備一式を選んでもらっているのだ。が、これがなかなかうまくいかない。

「……………」

「……………すまんなあ」

前者の沈黙は近衛騎士団の副長、ヴェルド・ブランデン卿のもの。後者は僕。

僕に見合う武器が見つからないのも当然といえば当然だ。なにせ、筋力が違う。科学技術が発展していく中で、人類は色々なものを衰退させていったが、その中で真っ先に失われたのが筋力だろう。力仕事を機械に任せられるようになって生活強度が下がっていけば当然筋力も落ちる、ということ。

はっきり言って、僕の筋力は城で働くメイドさんにすら劣る。

つまり、重たくて振れません。持てません。ということなのだ。情けなさ過ぎて申し訳ない。

「……フム」

「……」

豊かな黒髪に武人らしい立派な体軀を供えたベテラン騎士。

それがヴェルド・ブランデン卿のイメージだ。紹介してくれたストラトの話では、無口で無愛想ながら信頼できる人物であり、近衛は実質彼が統率している、とのこと。「まあ、陛下はまだなにもしておりませんから忠誠なんてものはありませんがな。はっはっは」という余計な一言がついたが。

そのヴェルド卿は顎に手を当てて考え込んでいる。僕はそれを黙って見ている。

「陛下。いくつか質問を許していただけますか？」

「許す」

「武具の使用目的は訓練でございますか？」

「いかにも」

…ストラトと対応が違うって？ 偉そうだった？ 僕も正にそう思う。しかし、必要なことなのだとストラトは言った。なにがどう必要なのかはいまいち理解できてないが、変に丁寧に応じると臣下を増長させることになるらしい。誠実さが美德とされるのは理解ある臣下に対してのみだ、ということなのだろう。なので精々、横柄な態度を心がけている。…子供が背伸びしてるようにしか見えな

いのだろっけど。

「では、剣に關しましては後ほどお持ちいたします。とりあえず、鎧を何とかいたしましょう」

城の武器庫にはかなりの量の武具が備蓄されている。僕にはよく分からないが、多分高級品ばかりなのだろう。店の刻印らしきものがちらほら見て取れるが、あまり種類は多くない。多分、王城御用達とかそんな店の商品なのだろう。

（実はこんなところまで、カルテル組んで利益を巻き上げたりはしてないだろうな）

そんな邪推ばかりが働く。

「陛下」

「なんだ？」

「こちらを」

ずっと差し出されるのは、鎖帷子？

小さな金属製のリングをいくつも繋ぎ合わせて貫頭衣状にしたもの。リングメイルアーマーとかチェインアーマーとかいう類のやつだ。手にとって見ればズシリと重い。

「普段から身につけるようになさってください。まずは身体をお鍛えになるべきです」

「…どれくらいの重さ？」

「15kgほどでしょうか」

重い。

外国人らしく、大柄で立派な体躯が標準のこの世界で僕は小柄な人間になる。前の世界では標準的な部類だったけれど、日本人はそもそも小柄だ。そのことも鑑みての選別なのだろうけど

「我々は筋力トレーニングを普段から行いますし、それが仕事です。ですが、閣下には他にもなさねばならぬことがありのご様子。さすれば、日常生活で負荷に慣れていただくのが肝要かと」

：「どうやら氣遣われていたらしい。言われて見れば、鎖帷子を構成している小さな鉄環は細かくしなやかだ。擦れ合う音もさほど気にならない手の込んだ一品。」

それに、だ。ただ僕の武器を選ぶだけならば誰かに任せても良かったはずだ。果たさなければならぬ仕事も多く抱えているはずなのに、そんなことをおくびにも出さずに僕に付き合ってくれていたのだ。

「ヴェルト・ブランデン卿」

「はっ」

「感謝する」

「勿体無いお言葉」

状況は相変わらず最悪。

それでも、希望の芽というのはそこらに意外とあるものらしい。

腐敗しきつているとはいえ、国が一応形をなしているということ
はそれを支えている人間が居るから。貴族でもブランドン卿のよう
な人物もいることがわかった。腐敗貴族連中が強固だと思っ
ている搾取構造を泥濘に沈めてやるのは大変な困難が付き纏う
だろうが、点在している反発心を集めればやれるかもしれない。

これからやることは勉強と訓練。そして新たな人材集め。

…しかし、数を集めるとすれば腐敗貴族どもも察するだろう。そ
れをどう隠すかも重要になってくる…。

問題は山積みだった。

三話 これから？（後書き）

なかなか話が進みません（笑）

異世界召喚系の物語を書いてらっしゃる方々を尊敬します。

四話 ある朝のこと

「陛下。お世継ぎなどはどうお考えで？」

「いらない」

「でしょうな」

…なんの話かというのと、結婚やら見合いやらの話があるらしい。

「ゴード伯、ツエヴェル伯などの筆頭貴族を中心として婚姻の申し入れがありますな」

「適当に言葉を見繕って断っておけ。面倒くさい」

そんな下らない政略結婚がどうか、かなりどうでもいい。

それよりも考えるべきことは、引き込んだ仲間をどうやって隠匿するかだ。仲間を増やす前に、造反の画策を見破られない方法を確認しておくかなければ、どこから情報が漏れるか分かったものではない。

それに、どうやって引き込むかも問題だ。最悪、僕と会合をしたというだけで抹殺されかねない。つまり、容易に他人に接触できないということ。

昨日武器選びをしてくれたヴェルトも、早速監視というかお目付け役がついたそうだ。

「まあ、ヴェルトなら問題ありませんまい。もとより無口な男。話しておらぬことを聞き出すことはできません」

だからご安心なさいませ、とストラト。

…まあ、近衛の副長になるまでが平坦な道であったはずも無い。自衛手段くらいは持っているだろう。僕のような世間知らず（少なくともこの世界では）ではないのだから。

「それに、悪巧みも結構ですがまずはある程度の教養を身につけていただきますぞ」

「それは望むところなんだがな、ストラト」

「なにか問題が？」

「起き抜けの主君にいきなり世継ぎがどうのと下らん話を聞かせて皮肉は止せ」

どうせ起こされるならマッチョ風味執事っぽいストラト侍従長より、美人専属メイドの方が良い。なんて思うのは不見識なのだろうか。

だって、異世界だし。ファンタジーで王様なんだし。他の異世界に行った主人公みたいな役得があってもいいと思うのだ。

「陛下。お気持ちは察しますが、若くて美人で護衛までこなす完璧なメイドなど夢想の中にしかおりませぬぞ」

「ですよねー」

冷静に指摘するストラト。全く以ってその通り。経験豊富で主の心の機微に敏感で忠誠心あふれるメイドなんてそこそこにお年を召したメイドさんばかりだ。それにしても初めからそうであったわけ

ではなく、幼い頃からずっと一人の主君に仕えてきたからこそ、そのような気配りができるのであって、最初から万能なんてチートメイドはこの世にはいない。その点、ストラトは忠誠心という一点を除けば最高レベルの侍従だ。忠誠心を除けば、つてのは見て分かるものでなし、感じ取るには過ぎた時間が足りない、とそういうこと。

「お褒めに預かり、光栄の極み」

つて、待て。オイ。

「読んだ？」

「私は高位の魔術師ではありませんが、読心術というものは未だかつて発見されたことの無い魔術です。古代魔法文明にはそういった類の魔術もあつたようですが、禁忌術扱いでしたのもう残っておりません」

「つまり？」

「陛下が身につけておいでの意思疎通のマジックアイテムが原因ですよ」

首から下げているペンダントを見る。

古代魔法文明時代の遺跡から発掘されたアイテムである。

「意思疎通ペンダント。主に、意思疎通が困難な相手 古代魔法

テレパス

時代ではペットの躰などに使われていたものです。身につけた者が思ったことを伝えたい相手に伝達するのがそのアイテムの効果です。翻訳魔術とは異なります」

つまりはなにか。僕の思考は駄々漏れだった、ということか。

「」明察です

心中で呟いた言葉に返事があつたことからそれがわかる。

「なるほどね

「考え事をなさるときは、お外しになりますよう」

「そうする。感謝するぞストラト」

「それと、陛下」

「ん？」

「メイドが必要でしたら、いつでもお申し付けください。新人ということになりましたが、手配いたします」

手配、つてのも嫌な言い方だが 確かに心許せる世話人が欲しい所だ。

ストラトは良い侍従だが、侍従長であり忙しくなることもある。補佐すべき王が現れた以上、これまでのようにぼんやりしているわけにもいかないだろう。ともなれば、話し相手としても身の回りの世話を任せる人が欲しい。だが

「なんで新人？」

「誰の息がかかっていると知らない人物のほうがよろしいか？」

「是非新人さんで。新人万歳」

「ご希望の特徴などはございますか？」

…なんかいかげわしい臭いのする話になってきたけど、まあ、これは一種の特権だろう。

しかし、さつきストラトが言ったように腐敗貴族どもに脅されたりして情報を流されたり、果ては殺されかけるのも勘弁願いたいところ。個人的な希望を言えばキリはないけど、もっと他のことを優先しよう。…とても惜しいことだが。

「天涯孤独」

脅される心配の無いものを選ぶ。それが正解だろう。

「他は問わない」

情報は、身近なところから漏れるものだから。

「承知いたしました」

……王様って、辛い職業だなあ。

四話 ある朝のこと（後書き）

ご意見・ご感想、お待ちしております。

五話 一時間目 宗教学

ファンタジー世界のご多分に漏れず、グラーフ王国でもしっかりと宗教という概念が存在していた。

とはいっても、キリスト教やイスラム教、仏教のような類のものではなく、この異世界全体で信仰されている広範なもので、教義というよりはモラルを高める道德教育っぽいものらしい。

義神、愛神、智神。

約束を守り礼儀を大切に、規律を重んじる義神。

あらゆることを愛と寛容を以って慈愛を説く愛神。

教養を身につけ己を律し、凜とした気品を身につけることを説く智神。

この三神が主な信仰の対象であるらしい。

「これは、本当に宗教か？」

少なくとも、僕からすればこんなものは宗教でもなんでもない。

宗教というのは本来多様なはずの価値観の統一のための道具、というのが僕の考えだ。敬虔なキリスト教徒などに言えば殺されかねない暴言だが、宗教観念の薄い日本人なのでそのあたりは御寛恕願うことにする。

だが、厳然たる事実として宗教は国の運営にとっても便利な道具であったのも確かなのだ。思想・思考誘導の道具として、である。異なった価値観を徹底的に廃絶させるのにも便利だ。異端扱いすれば、それだけで自動的に外敵を排除できる。

「ええ。己の良心に反することなく生きることこそが、三神の願いである。」

寛大すぎる上にゆる過ぎる。うっかり入信して信者になってしまいたくなる。…もちろん皮肉だが。

「もちろん、このような緩やかな信仰が根付いているのはグラーフ王国だけです」

なぜかおわかりで？ とストラトが目で問いかけてくる。

「地理上の問題？」

「そうです。他国から攻められない代わりに交易などもほとんどない閉鎖的な国ですから」

人々は純朴で三神の教えに忠実に慎ましやかに生活していたらしい。

先代国王が存命で、腐敗貴族連中が暴走を始めるまでは。

「それに、未だに国家が転覆していないのは三神の教えと教会の慈善活動のお蔭でしょう」

政治色の薄い、国民の間でこそ真に頼られているのが教会なのだという。

身近な相談業務から、冠婚葬祭。町内会の意見のまとめ役まで、あらゆる市民生活の要。

その他にも孤児院の運営、貧困民の救済、学童教育などの福祉業務も引き受けているというのだから、その偉大さが窺える。

「純朴：にも程があるな」

眩しいくらいに純粹だ。

「意外とそうでもないかもしれませんが、貴族に比べれば毛ほどのものでもありませんな」

「なに、教会が健全に機能しているのならそれは喜ばしいことだよ。政教商での癒着が普通だと思っていたから」

改善点が減って助かる、というものだ。

「で、やっぱり神官っているの？」

「ええ。おりますとも。」

三神の声を聞いたもの、そしてその御力を借りた神聖魔法を扱うことの出来るものが神官です」

「神の声？」

「然様です。ですが、どのようなものは存じません。神官ではございせんので」

…どこかで聞いた話だ。

魔術師。神官、とくれば

「もしかして、精霊使いなんてのもいたりするの？」

「もちろん居りますとも。魔法は三系統ありましてな。」

私のような魔術師が使う古代語魔法。三神の神官が使う神聖魔法。

そして精霊使いが使う精霊魔法があります」

よくよくどこかで聞いた話だ。

「この分だと、エルフとかもいたりする？」

「御慧眼ですな。特に我が国は多様な種族が暮らしております」

「やっぱり……」

「国境山脈の麓ふもとの森にエルフの里。

国境山脈の切り立った崖にはフェザーフォルクの集落。

海岸沿いには人魚族の棲家。

ドワーフなどは人々と同じように街中で暮らしておるものも多く
おります」

想像以上の大所帯だ。

「そんなに色々な種族が居て喧嘩にならないのか？」

肌の色が違うだけ、たったそれだけの理由で差別が起こる。ま
してや種族が違っては

「なりません。彼らは迫害の果てに、この国に辿り着き受け入れら
れたのです」

グラーフ国民すげえ。とてつもないお人よし国民。

「集落への交易もありますし、街に出てきて暮らすものもおります」

本当に、豊かな国なのだろう。グラフ王国は。

他国で迫害されていた難民を受け入れることができる、というのは国が、そして人々が豊かな証拠だ。

「その全てが、とは申しませんが三神の教えによるところが大きいでしょうな」

「自由に身動きできるようになったら、是非とも話を聞かせて欲しいものだな」

「そうなさると良いでしょう」

少しばかり毒気が強すぎますからなあ、陛下は。なんてストラトは笑う。

「いんてんこよ」

全く。容赦の無い臣下である。

五話 一時間目 宗教学（後書き）

本当に、書かなくてはならないことが多いっ！

六話 二時間目 民俗学（前書き）

なんか、説明口調の授業が続きます（笑）

六話 二時間目 民俗学

「さて、先ほど異種族の話が出ましたので、そのことについて少しお話ししましょうか」

「あー、それはいいや。僕の世界にも、伝説とかにはよく登場する種族だし」

「ほほう。そうなのですか？」

「多分、大体は同じだと思うよ。だから、特性なんかよりは種族間の関係とか、歴史の方が知りたいな」

エルフは長耳。フェザーフォルクは有翼人。人魚族はそのまんま。確か、男のマーマンと女のマーメイドがいたはず。ドワーフは…もはや語るまい。

ふむ。とストラトはひとつ頷いて口を開いた。

「では、まず短いところから参りましょうか。

まずは、ドワーフです。彼らには迫害された歴史はありません。ずんぐりむっくりの姿からは想像できないほどに器用で、金属加工の技に優れておりますので、どの国でも友好的に迎えられております。我が国でも同様。ほとんどが元からこの地域で暮らしていたものたちばかりです」

「やっぱり、武器とか防具は人間よりいいものを作ったりするのか

？」

「ええ。寿命も我々の二から三倍ありますからな。技術では敵いません。ただし、偏屈者が多いですからな、気に入らんものは絶対に作りません」

…やっぱり、ドワーフが頑固者なのは全世界共通なのだろうか。

「次に、エルフですが、地域によっては迫害の対象になったり、住処の森が開発されたり、ですな。もつとも、動物ではありませんからエルフたちは抵抗しました。それが一層迫害を過熱させる要因にもなったのでしよう。新たな住処を求めて彷徨い続けて辿り着いたものが多い、と聞きます。それと」

「それと？」

ストラトが表情を曇らせている。大方、なにか言い難い事なのだろう。ここは現代日本ではない。中世の異世界だ。その辺りのことを気遣ってくれているのかもしれない。

「大丈夫だ。話してくれていい」

ストラトたちから見れば、日本人の僕はいかにも年若く見えるのだろうが、一応これでも歴とした大人だ。日本に居た頃は税金だつて納めていたのである。…あまり関係のないことだけど。

「はい…。見目麗しい一族ですので、狩り出され貴族の慰み者にされた過去があります」

「…そうか。それは他国の話か、それとも我が国の話か？」

「幸い、我が国のことではなく、過去に他国であったことでございます。現在では、我が国のほかにはエルフはほとんど見かけなくありませんからな…」

隠れたか、滅んだか。そのいずれか。

「エルフは魔法に長けた一族、って認識は正しいのかな？」

「ええ。彼らの多くは精霊魔法の素質を持ちます。もともと、魔術の素質を持つものが多いので古代語魔法を身につけて大成するものもおりますな。彼らはなにせ寿命が長い。我々の研鑽の及ぶところではありませんな」

羨ましいものです。なんて苦笑い。

老境にあるストラトからすれば、常若の種族というのは少し眩しく見えるのかもしれない。

「愚痴が混じってしまいましたな、お恥ずかしい限り。

次はフェザーフォルクですな。彼らもまた、他国ではほとんど見ることがなくなってしまうました。人が足を踏み入れることのできない奥地に移り住んだか、狩り尽されたかのどちらかでしょう。エルフよりも酷い迫害の歴史を送ってきました」

「翼か」

「然様です。貴族の道楽、それとも嫉妬か。理由は存じませんが執拗に狩ったと言われております。その他にも、翼は便利なマジックアイテムの材料でもありましたからな…」

「この国では、そういうことは起きなかったのか？」

「建国以前にはそういったこともあったようですが、建国王がフェザーフォルクの一族を厚く保護することを決めてからはフェザーフォルクを狩ることは重罪になっております」

「…ちなみに、どれくらいの罪になるんだ？」

投獄か、極刑か。はたまた

「拷問の後に、公開での四肢切断。しかる後に郊外引き回しの刑、それでも尚生きているようであれば餓死するまで生き埋めです」

極悪だった。

死んだ方がマシじゃないのか、それは。

「その重罪の理由は分かりませんが、建国王は彼らのことを『天使』と呼んだと記録にはあります」

天使。

真っ白な羽の生えた人間の姿で描写される、キリスト教の天の使い。

「……そのフェザーフォルクは、白い羽の？」

「そうです」

…建国王、アンタはキリスト教徒だったのか。

ファンタジー思考のすっかり根付いた僕らの世代でなければ、それはまさに天使に見えたことだろう。

「黒くなくて良かったなあ…」

「は？」

「いや、なんでもない」

羽か黒かったら逆に狩り尽くされていた可能性が高い。なんて笑えない話はどうでもいいのだ。…しかし、逆にそれが異種族を徹底的に排除する要因になっていたかもしれないと思うと、やはり心中穏やかならざるものがある。そんなことは、実際に暮らしている彼らには関係のない話なのかもしれないが。

「最後は、人魚族か」

「ええ。彼らもまたその命を狙われた歴史があります。なんでも、一地方では人魚族の血肉を喰らうことで不老不死の身体を手に入れることができる、と本気で信じられていたとか」

…八百比丘尼？

「その他にも、人魚族の歌には魔力があり、船を座礁させることから、害悪指定されましたし、やはりその魔力を宿した身体がマジックアイテムの材料になりましたから…」

セイレーンの歌声。船を惑わし、そのまま帰らなくなる…というヤツだ。しかし

「実は、歌で魅了しているんじゃないくて、歌に勝手に引き寄せられて人間が、勝手に自爆しているだけじゃないのか？」

「その通りです。人魚族は自分たちの歌にそのような魔力があることを知らなかったのです」

典型的な勘違い。

しかし、事實はどうあれ。船が帰らなかった、座礁させられたという事実が残り、”人魚族は船を惑わせ、座礁させる”という認識が成立する。

「で、グラーフ王国ではどんな関係なんだ？ 勘違いはともかく、船を惑わせる事実に変わりは無いのだろう？」

「話せば分かってくれますよ。我が国の船には、一隻につき専属の人魚族が就きますからな。座礁知らず、遭難知らずですよ。世界中の海を自由に航行できるのは、我が国だけでしょうな」

…本当に懐の深い国民性である。

「山はドワーフたちが、森はエルフたちが、海は人魚たちが、そして平地で我々が。互いにバランスを取って暮らしておるのですよ」

「貴族どものせいで関係がこじれたりしていないのか？」

「若干、そういう動きもあるようですが、彼らの利益にも深く関わっている以上、関係を損ねるのは良くないと、手出しはしておらぬようですね。逆に、我々が助けられているほどです」

「信頼関係は、崩れるのは簡単だからな…」

「全く」

すぐにでも、なんとかしたい問題が山積みなのになにもできないのが歯痒い。

元の世界から逃げ出してきた僕なんかが、王になるにはこの国は良い国過ぎるのだ。

守らなければ　そう強く思う。

この奇跡の国を。

僕は拳を強く握った。強く、強く

六話 二時間目 民俗学（後書き）

誤字・脱字、ご意見・ご感想お待ちしております。

七話 生涯スポーツ？（前書き）

鋭いご指摘の感想を頂戴いたしました。

そのこともしつかり胸に留め置き、書いていきたいと思えます。

七話 生涯スポーツ？

重い。

シャレにならないくらいに重い。

と、思っていたのだが。存外そんなこともない。

なにがかというところ、15kgほどのチェインメールだ。鞆や手荷物でいう15kgは大変だが、全身にかかる15kgはそれほど重くは感じない。背負い鞆のようにベルトが食い込むわけでもなく、手提げ鞆のように指が痛くなることも無い。

両肩にしっかりと載り、二の腕を隠すほどの袖と、腰までの裾のある鉄環の塊は思ったほどには身体の動きを阻害しない。

が、それは日常生活での話。

歩く程度の運動ならともかく、走るだとか、跳ぶだとか、そんな動きをしようものならそれは唐突に存在感を主張してくる。それに近衛副長直々に持ってきてくれた木剣。これがまた重い代物なのだ。見た目こそただの木の棒だが、鉄芯が入っていてズシリと重い。実際の剣より重く、これで普段から鍛えているということなのだろう。剣先から柄尻まで全体で1m弱。剣としては標準的な長さだ。

ここでちょっと小話。実際には、剣というのはあまり使われないのだそう。主役は槍で、剣は副兵装に過ぎないのだとか。しかも、その剣にしても長剣などではなくて比較的短い、刃渡り70cmほどのものが用いられるそうだ。長剣は普段から携行する分には手頃なだけだそう。とはヴェルド・ブランデン卿が教えてくれたことだが。

「いちつ、につ、さんつ、しつ！」

踏み込んで上段から振り下ろし、足を引いては振り上げる。

高校生だったところに、授業でやった剣道の動きを思い出しながらやってみるが、足と腕がどうにも合わない。剣筋もすぐにブレるし、息も上がる。誰も見ていないのが救いだ。…裏返せば、誰にも教えを乞うことができない、ということでもあるのだが。

この城の主であるはずながら、僕の歩き回れる場所は少ない。

勉強部屋扱いの執務室と、後宮に設けられた寝室。その付近だけだ。寝室のすぐ隣に、食堂はもとより、専用の湯殿まで設けられていて、ほぼ完結した生活空間が存在しており、徹底的に行動範囲を狭めるような配置が成されている。…多分、これは本来多忙である国王に無駄な時間を使わせないように、という配慮なのだろうけれど、少しそれを恨めしく思う。後宮と執務室はほぼダイレクトに繋がっているために迷いようがない。後宮はストラトの管轄なので思う存分、彷徨うことが出来るだろうが予算と人員削減の関係から、人員が皆無であり、また手入れも行き届いていない。求める人材との出会いはなさそうだ。まあ、それはおいおい改善されていくことだろう。再び王が現れたことで、ストラトの本来の仕事も復活。今頃は人集めに奔走していることだろう。じきに後宮も賑やかになるって、それはないか。

後宮といえば、王の妃や妾やら愛人やらを囲う大奥だ。

前国王が亡くなってからは無人であるにしても、ドロドロの負の感情が渦巻く女の戦場。…いささか、誇張が過ぎるかもしれないが古代中国では、後宮には男は立ち入ることすら許されなかったという。

「いちっ、にっ、さんっ…！」

息が続かない。

腕がパンパンに張っているような感じがする。

…やる気を出して、とりあえず形から入ってはみたがこれが厳しい。

実際に使う剣より重く作られているそれを、いきなり振っているのだから当然か。10分もしないうちに腕が上がらなくなってしまう。

「ゼーっ、ゼーっ…！」

不甲斐ないことだとは思う。情けないことだとも思う。普段から鍛えていないのだから仕方ないことだとは理解しているのだけ。床にへたりこんで荒い息を吐く。

「普段から…っ、鍛えて…っ、おくべきだったっ」

後悔は先に立たず。

その言葉の正しさを身を以って証明して、悪態を吐く。

物語の中の主人公たちが羨ましい。少なくとも、彼らは異世界に来てこんな思いだけはしなかっただろうから。華々しく、そして雄々しく戦う彼らに憧れた。そして、今は僕も彼らと同じ異世界に召喚された者だというのに、この落差はなんだ。

…やめよう。無意味な嫉妬だ。

再び立ち上がって、木剣を握る。

逃げることは簡単だ。別に、剣が振れないからといって困りはしない。

僕は王だ。お披露目も、戴冠式も経ずに形だけの王だ。剣が扱えないからなんだというのだ。

しかし、そうではない。ここはもうすでに逃げ出した先なのだ。もう、後が無い。

国民が蜂起すれば、その責任を追及されて断頭台へ。

変革を望めば、貴族たちによる謀殺が待っている。

どちらが身に降りかかるにしても結末は”死”だ。

死にたくなければ、緩慢な死を恐れるのならば、力を身につける
しかない。

剣を手に、鎧を纏い、臣下を束ねて砦を成す。できなければ死ぬ。
全身から血の気が引いて、寒気が襲う。”死”の恐怖。

交通事故や、病死なんて生易しい死にはできないだろう。明確
に過ぎる殺意と憎悪で、僕は殺される。その恐怖に身が竦む。

この奇跡の国を守りたい、そう思った気持ちは本物であったはず
なのに、重くのしかかる現実には押し潰されそうになっている。

それに抗うためには、強く在らねばならない。

その努力を怠ったとき、死が降り掛かるだろう。

泣き言を言っている余裕はない。死にたくなければ、やるしかな
い。

半ば自棄気味に僕は木剣を振り上げた。

七話 生涯スポーツ？（後書き）

誤字・脱字、ご意見・ご感想などお待ちしております。

八話 戦術考察

「ストラト。後宮の人の出入りってどうなってるんだ？」

「陛下と奥方となる方々及びその使用人。といったところでしょうか。一応、私も侍従長という立場上立ち入ることができませんが、あまり好ましくはありません。現状では、全く問題ありませんが」

まあ、人が居ないのに立ち入り禁止というのも可笑しな話だしな。

「親族の面会とかは？」

「後宮への立ち入りはできませんから言伝か手紙で招待、という形になりますよ。入ることはできずとも、出てきてもらうことはできますからな」

「ということは、後宮の中なら基本的には何をやってもばれない？」

「許可を持たぬものが侵入すると、警報が作動しますので」

「ある程度は信頼していい安全性はあるわけだ」

「然様でございます」

深夜、後宮の一角。

国王の寝室と、それに付属する居住空間の一室である安楽室^{レストルーム}での会話だ。

いや、悪の密談と言ったほうがより情景としては正しいかもしれない。まあ、事実として国家転覆の算段をしているのだから間違いないではない。

「なら、後宮を革命本部ということにするか」

「革命……とは、また重々しい響きですな」

どちらからいえば、ストラトも為政者の立場だ。だからこそ、不穏にも聞こえるだろう。

「王が革命主導、つてのも変な話だけだな。

後宮なら、何百人つて人間を置いてもおかしくはない場所だ。打つてつけの場所だろう。

ただ、僕の風聞は地の底に落ちるだろうけど。それは必要な犠牲と違って諦めよう」

正直、苦渋の決断だ。

…どんな風に噂されるのかと思うと、今から胃が痛い思いだ。

しかし、今はそんなことに構っていられないのだ。他に手段がない以上、やるしかない。

「ともかく、寵愛という名目で人材を後宮に呼んで人間を見る。…ファーストコンタクトは最悪だが、仕方ないことだろう。最悪、後宮に監禁ということになるが…我慢してもらおう」

「本気ですか」

半ば、独白になりかけていた言葉を、ストラトが拾う。

本気を疑うのも無理はない。片端から妾にしまおうと言って

いるのだ、僕は。無論、それは名目だけで手を出すつもりなど毛頭ない。それどころか、どれだけの人間が僕が国王だということを知っているのだろうか。召喚されて以来、後宮と執務室の間を行ったり来たりしているだけ。名前を知っているものなど、片手で足りる。そんな形だけの国王の招聘に誰が応えるのか、という疑念もあるがこの際、それも相手の反応を見るということで判断材料の一つにしてみてもよい。と考えている。

とにもかくにも、後宮に人を呼びつけなければ会話もおちおちできななのだ。あまりにも楽観的に過ぎる甘い考えではあるが、もとより無理のある話なのだ。運便りにもなるうというものだ。

「後宮には秘密の抜け道ってあるよな？」

「「ごぞいますとも」

「では、そこを外部との連絡通路にしよう。仲間内を固めたら、城外でも抵抗勢力を組織して動いてもらうことにする」

「そう上手くいきますかな…」

「せめて、都合のいいことでも考えないとやってられない」

頭の痛い話だ。

自分で考えた事ながら、お粗末過ぎて涙が出てくる。素人目に見ても、穴だらけ、綱渡りの連続だ。こんな杜撰な計画に命を掛けなければならぬというのなら、国王という立場を利用して短い夢を見ているほうが幸せかもしれない。例えば男の浪漫、ハーレムだとか。

「陛下」

意思疎通のペンダントはそんなネガティブな思考も伝達してしま
うが、それを自制しようとも思わなかった。

自棄になっっているのが、自分でも分かる。午後の訓練は一人にな
るべきではなかったかもしれない。多分、どこかで軽く考えていた
のだ。遥か未来の知識を有しているというだけで、慢心していた。
どこの世界だろうが、僕は僕以上の存在ではないというのに。

自分の弱さを自覚するだけで暗澹たる思いが膨らんでいく。

「分かってる、大丈夫」

疲れているせいだ。

身体が弱っているときは心も弱気になる。

そういうことにして、気持ちを少しだけ前向きに。

「もう休む。ありがとう、ストラト」

「…失礼いたします」

何かを言いたそうだったが、結局は何も言わずストラトは一礼し
て出て行った。

広い後宮に一人、ちっぽけな僕だけがぽつんと在る。世界一情け
ない王であることはほぼ間違いない。そんな情けない空想で自分を
嘲笑って、寝室へ向かう。

豪華なダブルサイズのベッドは疲れた身体を優しく包んでくれる。
何も考えずに、今は眠ろう。

八話 戦術考察（後書き）

前回と今回、ちょっと暗い感じですよ。

…本分書いてるときに聞いてた音楽がマズかったか（汗）

九話 メイド

結局、昨晩は明け方まで眠れなかった。

それでも、気分は随分落ち着いた。顔色は良くないかもしれないが、調子は悪くない。前日な急激な運動の反動が来ていないことを思うと、筋肉痛は夕方か、明日辺りだろう。そんな到来確実な未来はさておいて、肉体改造ギプス（チェインメール）を着込み、上着を羽織れば国王陛下下の完成だ。

と、ちょうどそのタイミングでドアがノックされる。

「陛下、起きておいでですか」

「ストラトか。起きている、入ってくれ」

「失礼いたします」

ドアが開いて、立派な壮年の紳士が現れる。が、そこまで部屋にまでは入ってこない。

疑問に思い、問い質そうとしたところ、タイミング悪くストラトの声と被って尻すぼみに。

「先日受け賜りましたメイドのお目通りを願えば、と存じます」

「あー、はいはい。構わんよ」

「それでは 失礼のないようにな」

「は、はいっ」

ストラトのが背後に向かってなにやら話しかけている。多分、そこに件のメイドさんがいるのだろうが　ストラトがでかくて見えない。

「し、失礼いたしますっ」

ストラトの後ろから現れたのは、小柄の長い金髪がとても印象的な女の子だった。ちなみに、この小柄というのは僕の主観。僕の身長167cmを基準として測ってみても随分小柄だ。150と少しといったところか。髪は腰ほどまでで、金糸のように細い。…少し残念なのは前髪までも鼻梁にかかるほど長いことだ　が、全体的なパーツから推定美少女。ようやく異世界ファンタジーっぽくなってきた、と言ったら不謹慎だろうか。

「お初におめもじいたします。わ、わたくしは此度陛下の身の回りのお世話をさせていただくことになりました、リディリシア・ローリンゲンと申します。リディア、とお呼びくださいませ」

酷く緊張しているようで、つつかえも噛みもしていないが音の上がり下がりが激しい。正直、後半の名前くらいしかちゃんと聞き取れなかった。ガチガチのくせにわたわたとしている様がとても可愛い。なんとというか、小動物のようで見ていて和む。

「霧島稔きりしまみのるだ。こちら風にはミノル・キリシマか。よろしく、リディア」

僕は、この世界で始めて、自分から名を名乗った。

「は、はいっ！ 至らぬことも多々在るかと思われませんがっ」

ばっ、と勢い良く頭を下げる。その動きに釣られるように舞う髪を自然と目で追ってしまったりして 気がついた。

「…エルフ？」

その、人間より長く、尖った耳に。

「はいっ」

快活に。はつきりとそう答えてくれるが、それでは要領を得ない。

「ストラト？」

「お話ししよう」

今まで僕らのやりとりを微笑ましげに見ていたストラトが応じる。というか、たった数日で僕の行動にすっかり合わせてくれるあたりにストラトの年季を感じる。

「彼女 リディアは取替えっチェンジリング子なのですよ」

「チェンジリング？」

「はい。彼女の両親は我々と同じ人族ですが、稀に異種族の子が生まれることがあるのですよ。

その昔には、妖精が悪戯をして子供を取り替えて行ったのだと言われ、今でも取替えっチェンジリング子と言われているのです。実際には、ただの先祖還りなのですが、他国では未だに忌み子とされたりするそうで

すが…」

「へえ…」

改めてしげしげとリディアを見る。

エルフといえは、理知的で素早い動き　というのがイメージだが、なるほど。リディアにはそれがない。…いや貶してるわけじゃなくて。

僕はおもむろにリディアに近づき、頭に手を伸ばす。

リディア本人はもとより、ストラトも「なにをすするんだ、こいつ」みたいな目で見ている。や、リディアはただ緊張で硬直しているだけかもしれないけど。

そつと邪魔なカチューシャを外し、頭を撫でる。さらさらの髪といい、適度な頭の位置といい、申し分ない。

なでり。なでり。なでり。

部屋を満たす微妙な空気も解せず、頭を撫でる。

「あ、あの一？　陛下？」

控えめなりディアの主張ではつと我に返る。いかん、和んでしまった。

「あー、すまない。なんでもない」

ごほん。と、微妙な空気を追い払うかのようにストラトが咳払い。ああ、でもいいなあ。この娘、すっごい和む。イメージはウサギだろうか。

「…続けますぞ？」

「頼む」

「我が国では、チェンジリングにも変な迷信も偏見もありませんから普通に家族として共に暮らしていたのですが、彼女の両親は昨年流行り病で亡くなりました。一人っ子でしたので、他に身寄りもなく。彼女の両親の友人であつた私が面倒を見ていたのですよ」

なるほど。ただ無意味に暇をしていたわけでもないらしかつた。

リディアの身に降りかかった不幸を思えば、喜べないが一番信用のおけるストラトの友人の娘ともなればこれ以上は望めないほどの好人物だ。人も、条件も。しかし

「リディア」

「はいっ」

「リディアは、主が僕でいいのか？」

何の気はなしに、手に取つたリディアのカチューシャはまだ僕の手の中にある。

彼女は理解しているのだろうか。僕に仕えるということは、否応なしに厄介ごとに巻き込まれるということだ。一蓮托生、とまではいかないにしても平穩からは程遠い生活になるだろう。そんな気持ちを含めて、彼女に問う。

「勿論でございます、陛下」

彼女の口元に笑みが浮かぶ。

分かっているのか、いないのか。意思疎通のペンダントが、いろいろな考えを伝えているはずなのに、嫌な顔ひとつしない。本当にいい子だ。

「リディリシア…えと？」

「リディリシア・ロートリンゲンです、陛下」

フォローもばっちり。

少し離れたところでストラトが台詞を取られて悔しそうにしている。

「リディリシア・ロートリンゲン」

「はいっ」

「改めて、よろしく頼むよ」

言っで、カチューシャを再び頭に載せてやる。

リディアはそれを少し頭を下げることでそれに応えた。

「我が血命と命運の尽きるその日まで、お仕えいたします。ミノル・キリシマ陛下」

九話 メイド（後書き）

期待の新人です。一話でいきなり退場したラフィリアに代わりましてエルフメイドの登場です。オッサンばかりの異世界ファンタジーからようやく脱出、といったところでしょうか。

そういえば、主人公の名前が出たのもこれが始めてだったりします。はてさて、これからどうしたものか（笑）

誤字・脱字、ご意見・ご感想などお待ちしております。

十話 好転

目覚めから、今この時までには僕は確かに幸せだった。

現実世界ではお目にかかったことのないような美少女エルフ（推定）が専属のメイドになってくれて、ようやく異世界召喚系のテンプレっぽくなってきた。相変わらず、状況は最悪だけどリディアは存在そのものが一種の清涼剤だ。…なんか、こういう風にいうと変態っぽく見えるのが問題だけど。

話を戻そう。

今とても不愉快な思いをしているのは間違いなく目の前の男のせいだ。

レーベレヒト・マース伯爵。

ひよろつと細長い、イタチのような顔立ち。何度か顔を見た覚えがある。…ああ、そうだ。いつか施策についての事後報告をしにきたナントカ伯爵のことだ。

「陛下、本日のご予定はお決まりですか？」

妙に甲高い、人の精神を逆撫でするような声で、レーベレヒトは言う。

「午前中は勉強、午後からは訓練の予定だが」

「それでは、午前の予定をご変更なさってください。陛下には一日も早く、グラーフ王国の象徴となっていたただかなければなりません」

「そのための勉強だ、変更する必要があるのか？」

「ええ、ございますとも。もちろん、基礎的なことの重要性も承知しておりますが、陛下はグラーフ王国の国王であらせられます。民を治めることこそ、まず学ぶべきことかと存じます」

かしずき、頭こそ下げているものの、表情が笑っている。

対してストラトはといえば渋い顔をしている。普段どりの彼ならば、容赦のない突っ込みか反論が口を突いて出るところだ。ということは、王城での権力では圧倒的にレーベヒトの方が勝っているということなのだろう。恐らく、この国を牛耳っている貴族の筆頭格。それに彼の言っていることもあながち間違いではない。

「一理ある。そなたの意見を容れよう。いいな、ストラト」

「……仰せのままに」

できる限り、偉そうな口を利く。そこかしこでボロが出そうだが、まあ俄か国王だし。

それに、欺いておかなければいけない相手でもある。

「ということだ、レーベヒト。お前の教えを乞うとしよう。しかし、その前にやるべきことがある、しばし後に出直せ」

「承知いたしました」

一礼し、薄ら笑いを浮かべたままレーベヒトは退室していく。

「ふう……」

普通に緊張した。

さほど賢そうな人物ではないように見えたが、狡猾で狡賢さだけ

は一級品　そんな印象。イタチというよりはキツネか。…どちらにしても厄介な相手だが。

「陛下」

「分かってる、ストラト。何も言うな」

レーベレヒトの意図は大体だが読めている。

僕をすっかり愚か者に洗脳してしまおうというのだ。なにもかも、都合の良い解釈と情報で満たしてしまえば、どんな愚かな行いでも当然で正しいことだと思いつまらせることができる。詭弁と論旨のすり替えは腐敗貴族どもの十八番おはじだろう。まあ、そんな下らないことで洗脳されてやるつもりはないが、それらしい演技はしなければならぬ。虚栄心に満ちた上辺だけの、何も分かっていない馬鹿な王様を演じなければならない。果たして、そんな大それたことが僕にできるのか。

筋書きを書いたのは、間違いなく僕だけけれど。

「陛下…」

どうしてよいのかわからず、リディアがおろおろしている。

そんな所在無げな仕草は、人が本来もつ庇護欲を大いに刺激してくれる。

ああ、そうだ。僕は守らなければならないのだ、この愛らしい小動物然とした少女を。

主がこの体たらくでは、落ち着くものも落ち着くまい。虚勢のひつつでも張れなくて、なにが一国の王だ。

「リディア」

「はいっ」

「部屋の掃除をしておいてくれ、きれいにな」

にっこり、とまではいかなかったけど、普通に笑えたように思う。出会ってまだ二時間程度だが、尤もらしいことを言って余裕を演出してみせる。

「ああ、それと僕のごことは名前で呼ぶ練習をしておくこと」

「はいっ!?!」

踵を返しかけたリディアが素っ頓狂な声を上げる。

「それだけ。行ってよし!」

「はいっ!」

反論は聞かず、リディアを送り出す。多分、なにを言われたのかいまいち理解していないだろうから、後でまた話でやらないといけないだろう。

…しかし、リディアをからかうのは本当に楽しい。彼女にとってはいい迷惑だろうが、僕はとても和む。新鮮なリアクションが普通に嬉しい。

「…陛下」

ストラトは呆れたように嘆息する。

先程のことといい、リディアのことといい、もはやなにから突っ込めばいいのやらといった感じだ。

「そう言つなよストラト。僕は英雄じゃない、いつでも豪胆でいられるわけじゃないんだよ」

僕は、ただの人間だ。

マンガやアニメの主人公じゃない。

目の前に立ちはだかる壁に、勇敢に立ち向かっていけるほど強くない。

全てのことにはビクビクしながら、道を踏み外すまいと必死になつてきただけのつまらない小心者。

好んで読んだ異世界に召喚された主人公たちが虎や龍ならば、僕は精々鼠がいいところだ。実力も、胆力も。しかし、窮鼠猫を噛むというではないか。それに、鼠は黒死病ペストを媒介する動物でもあるのだ。その致死率は50%から70%といわれる人類史上最悪の感染症を。

「でもまあ、やってやるさ」

できなければ死ぬだけ。

一歩間違えれば即死のデスゲーム。

そう思うだけで竦みあがってしまいそうだが、それはもう考えるのを止めた。

人間死ぬときは死ぬ。ヘマをやっても大丈夫なときは大丈夫なのだ。

だから、精々前向きに物事を考えよう。

レーベレヒトの統治学だって、元の世界でやっていたアルバイトと思えば大した苦でもないだろう。愛想笑いを浮かべて嫌な客の文句に應對して、媚びへつらうようにやってきたのだ。ただ、空気を読めばいいだけの話。難しく考えなければいい。たった、それだけのことなのだ。

「とうわけでストラト」

「は」

「翻訳魔術を頼む」

ラスボスの相手をするのに、意思疎通のペンダントを使うわけにはいかない。

十話 好転（後書き）

なにかと内面のアップダウンの激しかったミノルですが、なんとか安定した…かな？

誤字・脱字、ご意見ご感想などお待ちしております。

十一話 勘違い？（前書き）

投稿初期にご覧になられた方、ごめんなさい。
なんかだ中途半端な文章が投稿されていました。誠に申し訳ござい
ません。

十一話 勘違い？

気持ちを前向きに、心を軽くして臨んで尚、人を陰鬱にさせるといふのはある種の才能ではなからうかと思う。もしそれが意識してやっていないことであるとすれば、性格に問題があるのだろう。

午前中から始まった統治学の学習という名目の大自慢大会だった。リーベレヒト・マース伯爵閣下が仰るには、我々が国王不在の間に築き上げた統治システムは完璧に機能しており、国王の政務負担を著しく軽減している、らしい。そのシステムが如何に素晴らしいか、それを作り上げた貴族が如何に素晴らしいか、さらにはそんな貴族を纏めているオレはもっと素晴らしい！という三重の自己讚美。自己陶醉で彩られた選民意識の醸成。… 途中からはコイツの頭は大丈夫なのかと真剣に心配したほどだ。その実態はといえば、本来絶対王政という国家形態において国王にのみある最終決定権を、国王不在を理由に貴族連中で好き放題に乱用しただけのことだ。

しかしまあ、自分たちで作り上げたというだけあって事細かに権力構造なんかをペラペラ喋ってくれる。そのお蔭で内情はこの上なくよく理解できるのだが… なんと胡散臭い。

僕がさも馬鹿らしく、感心したように振舞っていたのと同じでリーベレヒトもまた馬鹿を装ってこちらを欺こうとしているのではなにか、という疑念が湧く。仮にも一国の搾取体制を確立させたのだから、それなりの権謀術策を持ち合わせているはずなのだ。油断だけはできなかつた。

そんな緊張感を強いられる割には聞かされるのは自慢話ばかりと
いふのであれば、疲れもするというものだ。更に悪いことに、身体
の節々が痛み始めている。 筋肉痛だ。

異世界まで来て筋肉痛に苦しむのは、多分少数派だろうな…なんて後宮の安楽室でぐったりしながら考える。午後の鍛錬までの短い休憩だ。正直、着込んでいるチェインメールが億劫で仕方ないのだが、それはそれでまた目の前のことから逃げ出してしまうようで悔しいので我慢している。…すでに散々逃げ回った挙句、異世界にまで逃げ出してきてそれでもまだ逃げ回る、というのはあまりにも格好悪い。

そう思うようになったのは、きっとリディアの存在が大きい。僕よりも年下の子が、慣れない環境に連れてこられて訳の分からない奴のメイドになってしまったのだ。そんな彼女が頑張っているのだ。僕だって泣き言をいってなどいられない。すでにやってしまった後だが。まあ、それも悪いことばかりではなかったようだ。

「ミノルさま、お茶が入りました」

思ったほどに慌てることもなく、リディアは僕を名前前で呼んでくれるようになった。

それどころか、緊張すらすっかりほぐれてフレンドリーな感じ。多分、頼りない主を見てなんとなく余裕が生まれたのかもしれない。もしくはストラトがなにか言ってくれたのか。

「ん、ありがとう」

なんとなく微笑ましい気分になって、湯気を立てる紅茶を一口含む。

色といい、香りといい申し分ない。味もきつと一級品なのだろうが、恥ずかしいことに紅茶の味なんて全く分からない。エグみも渋みも感じないからきつと美味しい紅茶なのだろう、という情けなさだ。日本に居たころは、紅茶なんてものには全く縁がなかったのだ。精々ペットボトルで売っている甘いミルクティーかLIP T

Nくらいのもの。それも砂糖と牛乳を大量にぶち込んで飲んだものだからまあ、紅茶の味のなんたるかなど全く分らない。

これは”オイシイヨ”とか言ってあげるべきなのかなあ。でも具体的な話になると全くだしなあ。

なんて、どうでもいいことを考えていたときだ。

「ミノルさま。ひとつ、お聞きしたいことがあるのですがよろしいですか？」

「いいよ、何が聞きたい？」

「ありがとうございます。それではお聞きします」

この一言は、ただの純真な好奇心からもたらされた何気ない疑問だったのかもしれない。この国に生きる一人としての当然の疑問であるこの一言が 僕の人生を大きく変える一言になった。

「ミノルさまは、この国をどうなさりたいのですか？」

十一話 勘違い？（後書き）

あまりにも考えなしに文章を書きなぐっていたので少し整理。

…少し無理のある展開になるかもしれませんがご容赦くださいませ

…。

誤字脱字、ご意見ご感想などお待ちしております。

十二話 真実

この国をどうしたいのか。

それは物事の本質を穿つ言葉だったように思う。

僕は名ばかりとはいえ国王で、ある意味この国を自由にすることの許された存在だ。

欲望のままに国を食い荒らそうとも、名誉欲のままに名君たろうとすることも自由。

今は自由に身動きができないまでも、本来的に一国の王というのはそういうものなのだという事実をリディアは僕の目の前に突きつけた。彼女にそのつもりはなかったとしても。

そして 僕はその答えを持ち合わせていなかったのだ。

僕は「長くなるから、後でな」とか言って、その場を誤魔化して逃げるように安楽室を飛び出した。

全く、自分が嫌になる。鍛錬部屋にしているなにもない広間に飛び込んで鍵を閉めた。

「くそ、そうかよ。チクシヨウ」

拳を握って、ドアを殴りつけた。

カ一杯殴りつけたのに、しょぼくれた音がひとつ響いただけで頑丈なドアはびくともしない。

そうだ。

僕はただ逃げ出してきただけなのだ。

日本に還りたいわけでもない。
この国を良くしたいわけでもない。
ましてや、苦しんでいる国民を助けたいわけでもなかった。
全て、ただの義務感からそうしなければいけないと思っただけ。

安っぽい正義感からそう思っただけ。

そこには僕の意思なんてものは微塵も存在していない。

答えられるわけがなかったのだ。

明確な目標なんてなにもない。未来像^{ガイジョン}なんて欠片も持ち合わせていない。

日々の生活に追われるばかりで、そんな夢を膨らませている余裕なんてなかった。…いや、これはただの言い訳か。大学に在席していた頃だって、将来のことなんて漠然としか考えていなかった。就職活動だって、そうだった。

「志望動機とか、苦労したっけ」

”やりたいこと”なんてなかったのだ。だからなにもできなかった。現状を変えようとしなかった。そのくせ、現実から逃げ出すとして、こんなところまで来た。

僕は どうしようもなく薄っぺらい。風が吹けば飛んでしまうようなそんな人間。

通りで、なにかをやるうと思いつても上手くいかないわけだ。目的意識がないから、その意思を貫き通せない。臆病ばかりで尻込みする。僕は慎重だったんじゃない、ただ臆病だった。

「陛下」

ドア越しに声が掛かる。

「…ストラトか」

「なにか、ございましたか」

「リディア、何か言ってたか？」

「血相を変えて私の元へ飛んで参りましたよ。『わたくし、なにか粗相をしてしまったのでしょうか』と」

「そっか。心配、かけたな…」

全く…主としてこれほどまでに酷い奴はそうそういないはずだ。

「なあ、ストラト」

「はい」

「国王って、どこまで我俣になっていいんだ？」

「お好きなように、なさりたいようになさってよろしいですよ。元より、国王を召喚するということ自体、国民の望んだことではありませんから、それ相応の覚悟はありましよう」

既に状況が最悪なのだから、これ以上最悪にはならない。ということなのだろうか。

誰が、どんな奴が王になるか分からない”召喚”などに国を委ねるだけの覚悟があるというのか。しかし、結果的にそれを望んだということは仮に今以上の最悪が降りかかることすら受け入れたともいえる。

「好きなように、か。
僕には難しいな」

良い成績。

良い学校。

良い会社。

そんなレールの上を誰に強要されるでもなく走ってきた。

アレもダメ。コレもダメ。そんな雁字搦めの社会の中では、そんなありきたりなレールの上を走るのが一番楽だった。何も考えなくても、目標が目の前にあつたのだ。∴最終的に、僕は脱線してしまつて動けなくなつてしまつたけれど。

「ははっ、ダッセエなあ……」

色々ダメな部分を露呈しっぱなしの僕だけど、今回はかりは極めつけた。

僕は一体なにがしたいのだろう。

しなければならぬことと、したいことは違う。

僕はこの国でなにをしたいのだろう。

この国を どうしたいのだろう。

ドアを支えに、僕は座り込んで頭を抱えた。

扉の向こうにいるストラトにも、どこかで泣いているかもしれない。ディアのことも、気にする事ができないくらい、僕は悩んでいた。

十二話 眞実（後書き）

上がったり下がったり忙しい奴です。

でも、ミノルは被害者なのです。私の。思いつきのままに書いていた形だけの主人公、空っぽの主人公だったのです。この場を借りて、懺悔を。

十三話 再開（前書き）

たくさんの方々に見ていただき、感謝の言葉もございません。

ひとつの節目として、総合評価100pt突破と15000アクセス
又3500ユニークのご報告です。

これからも頑張ってます！

十三話 再開

どれくらい時間が経ったのだろうか。

もしかしたら寝ていたのかもしれない。

いくら考えてもなにも思いつかない。僕自身が、どうしようもなく薄っぺらい。

一体何をしてるんだ、僕は。部屋はすっかり暗闇に沈んでいた。

「そうね。一体、こんなところでなにをしているのかしら、亡命者さん」

渋い、重低音でも。

心地よい陽気の様な声でもない。

凜とした涼やかな声だった。

その声を聞いたのはそんなに昔のことじゃない。いや、つい最近のこと。ほんの数日前のことのはずだ。

「ラフィリア？」

召喚の巫女　ラフィリア・ヘルゴラント。

僕が逃亡者であることを知っている、この世界では多分唯一の人物。

「ええ、そうよ。霧島稔。貴方をここに連れてきたラフィリアよ」

「そっか。無事で何より　彼氏には会えたか？」

「お蔭様でね」

声はすれど、姿は見えず。

一寸先すら見えない濃密な暗闇が辺りを覆っている。

「死んだって聞かされてたけど、大丈夫だったんだな」

「ええ。貴方のお蔭で殺されずに済んだ」

「そいつは良かった」

これは、心から。

少し話を聞いただけでも、新たな国王が歓迎されるような印象ではなかったから、召喚の直後は気をつけるように言っていたのが功を奏したらしい。

ラフィリアとは、お互いに傷を舐めあった 愚痴や不幸自慢の類でしかなかったけど、不満をぶちまけあった そんな不健全な仲だ。

若い身空で国王探しなんて大役を押し付けられ、順調だった彼氏とは引き裂かれ、やってきた異世界では絶望の連続。変な連中に絡まれたこと数知れず。挙句、十年もの年月を彷徨うことになった。

不幸中の幸いなのが、現実には召喚は一瞬で探していた十年という時間が実年齢には反映されない事だと笑っていたっけ。

こちらの世界に来る前に、最後の贅沢とばかりに二人で美味しい物を食って酒を飲んで二人仲良く潰れたのだった。

人間らしく話をしたのが随分久しぶりだったこともあって、良く覚えている。

「それで、貴方はなにをしているの」

「ご覧の通り、しょぼくねてるよ」

「待遇は厳しい、って言ったでしょうに」

「いや、そうじゃなくてさ」

言葉に詰まる。

僕がどうしたいのかなんて、ラフィリアが知っているはずもない。それでも、彼女の前でそんな気遣いや遠慮は無意味だろう、愚痴仲間だ。

「僕は何をしたいんだろうな」

言った。

言ってしまった。

バイト先の愚痴とか、日本の社会が歪なんだとか、色々責任転嫁しまくった愚痴や泣き言を散々言い合ってたラフィリアだって、さすがに呆れるだろう。

「はあ？」

予想通り、素っ頓狂な声があがる。

そりゃあそうだ。僕だってそうだ。

でも、帰ってきた答えは意外なもので。

「貴方、散々わたしに言ってたじゃない。楽園を作るぞー、だとかなんだとか。よく覚えてないけど」

楽園。

ああ、言ったかもしれない。自分の怠慢を全部棚上げして、この

社会が間違っているんだ叫び、喚き散らした世迷言だ。

誰もが夢と希望を持って、それを誇りに思い一直線に走り抜けられる そんな楽園を。

夢も希望もついで持つことのなかった、僕の夢物語。到底、実現不能な妄想。

「 ああ、そうだった」

「 そーよ。思い出した？」

「 うん。思い出した」

目の前にある困難に圧倒されて、芽生えかけていた夢を見失っていた。

「 王様になって、好き勝手に国を作り変えて、楽園にするんだっけ」

僕の生き易いように、僕の我侭のままに、やりたいようにやる。そんな子供染みたことを考えていたっけ。

そうだ、僕にも”やりたいこと”はあった。勢いそのままに喋っていた全てを実現はできないまでも、それは明確な指針。

「 お、ちょっとイイ顔するようになったかな？」

「 かもな」

「 では、感動のご対面といきましょうか！」

眩い光に目が眩む。

辺りを埋め尽くしていた闇が一転光へ変わる。

「思わず目を覆った僕を、ラフィリアが笑っている。チクシヨウ、
いいように遊びやがって。」

でも、感謝している。一番大切なことを気付かせてくれた。

僕と同じ、黒髪の巫女は、悪戯っぽい表情を浮かべて笑っていた。
見覚えのある鍛錬室。

たった数日で見慣れた改造紅白袴。

そしてここ数日で浮いたり沈んだりの激しい僕。

でも、ようやく。本当に落ち着くことができそうだ。

仕えられる対象でもなく。金の成る木でもなく。ましてや、国王
などでもなく。

ただ一人の人間、霧島稔としてやっていく。

その足元が固まった。そんな気がした。

十三話 再開（後書き）

陰鬱なお話はここまでです。…多分。

ようやく、物語が開始といったところでは。随分、遠回りをしてしまった（苦笑）

誤字・脱字、ご意見・ご感想などお待ちしております。

十四話 笑声

「そういえば、どうやってここに来たんだ？」

素朴な疑問。鍛錬室のドアの鍵は掛かったままだし、そもそも殺されかけたはずの人間がどうして後宮に入れるというのが。普通なら王都に居ることすら不可能だ。

「直接来たよ。王都の郊外からだけど」

「説明になつてねえよ」

僕は城から出たこともなければ街並みを眺めたこともないが、常識的に考えてふらつと立ち寄った。みたいな気軽にできることではないはずだ。死んだ、というのが虚偽報告であるとはいえ、それならそれで指名手配くらいはされているはずなのだ。いくらこの国が腐敗しているとは言っても、権力闘争の牙城ともいえるこの城にそう易々と侵入などできようはずもない。

「あー、うん。えっと、転移魔術で直接来たから。これでいい？」

「まじかい」

転移魔術。

ファンタジーでは有名な移動魔術だ。ただし、やたらめったら難しかったりうっかり転移場所を間違えると残念なことになるあの魔法だ。

「……って、異世界からの召喚ができるんだから転移魔術くらいあるわな」

僕はその転移魔術の応用　空間転移ではなく時空転移してきたのだから今更驚くべきことではないように思う。

「そうそう。まあ、この国じゃ使えるのは私だけだけどね」

「へえ。ストラトも無理なんだ？」

「へっ？　あのおじいちゃん、魔術師だったの？」

あー、そうか。ラフィリアは腰の曲がった無力な老人耄碌済みというストラト侍従長しか知らないのだ。

国家行事としての国王召喚の儀式の関連で顔をあわせていたとしてもその程度の関係でしかないだろうし、無理もないだろう。僕だって初対面では変身や変形に準ずるようなビフォーアフターをしてくれるとは思わなかったのだ。ラフィリアがそんな変化を予見できるはずもない。

「まあ、本人に確認するか」

訓練もしないで結局は閉じこもっただけの鍛錬室。

ただっ広いだけの四角い部屋だが、天井は高く大人数でパーティーでもできそうなくらいの空間だ。後宮、というある種の閉鎖的な空間でどうしてこんな広いスペースが必要だったのかはわからないが、基本総大理石で作られている後宮内で唯一板張りという特異な部屋である。奥まった場所にあることから倉庫か何かだったのかもしれない。

鍵を外してドアを開け ようとして硬直する。

目の前に壁が突如出現したのだ。いや、正確には壁などではなく筋肉と言うべきか。燕尾服で覆われた巖の如き背中だった。…というか、ストラトの背中だった。

鍛錬室のドアの前で、弁慶宜しく仁王立ちである。雄々しいことこの上ないが、酷く滑稽な図が出来上がっていた。律儀にも、小さな身体でそれに付き合っているリディアがその滑稽さに拍車を掛けている。

「……………」

ばたむ。

とりあえず、閉めてみた。

なにか悪いものを見てしまった、そんな顔をしているラフィリアとひとつ頷き合って今一度ドアを開ける。

今度は大丈夫だった。

恭しく一礼するストラトと、羞恥からか頬を真っ赤に染めてお辞儀するリディアの姿がそこにはあった。

とんだコメディイダと思う。最高級の大理石が惜しげもなく使われ、国家としての贅を凝らして作られた後宮でなにをやってるんだ。こんな光景を、国民が見たらどう思うのやら。でもそんな考えは捨てて、今は笑うべきだろう。感情のままに。今このときだけは、僕を縛るものはなにもないのだから。

* * *

理屈の雁字搦めから開放された僕は、随分と久しぶりに大笑いをした。

笑顔とか、微笑なんて上品なものじゃなくて大口を開けて涙すら流しながらの大爆笑。更にそれが筋肉痛に響いて痛し痒しで更に笑

いを上乗せした挙句、呼吸困難を伴い床に這い蹲るようにして痙攣しているところを見るに見兼ねたストラトに救出され今に至る。

柔らかなベッドの上で、辛くも思考を取り戻した僕は三人にそれはもう心配されたものだった。よくもあんな下らないことで笑死寸前にまで陥ったものだ。笑い死にした国王なんて、醜聞もいいところだ。

しかし、お蔭でかなり人間らしさというやつを取り戻したように思う。

「あー、笑ったー」

大学を卒業して、五年以上こんなに笑ったことはなかった。僕自身、なにが可笑しくて笑ったのかも分からないくらいだけど、とにかく笑った。

ストラトが呆れ果て、ラフィリアは変な目で僕を見ているし、リディアは泣きかけている（様な気がする）。

まあ、それもそうだろう。

午後のお茶をしていたと思ったら、何気ない一言で僕は急に取り乱し。

リディアに呼ばれて来てみれば主はすっかり意気消沈、訳のわからないことを言って沈黙したまま閉じこもり。

少し会わない間にすっかりしょぼくれて、良く分からない理由で復活し。

極め付けに先程の大笑いである。命を賭けた大爆笑。どこからどう見ても変な奴だ。立派な不審者である。その事實は覆しようのないものなので、とりあえず

「えーっと、みなさん。ご心配とご迷惑をおかけしました。

多分、これからも様々な醜態を晒すことになるかとは思いますが、どうかよろしく御願います」

豪華な天蓋つきのベッドの上からではあるが、頭を下げた。

最初からいきなり躓いたけれど、これでようやく始められる
一世一代の国盗りの幕開けだった。

十四話 笑声（後書き）

誤字・脱字、ご意見・ご感想などお待ちしております。

十五話 悪巧み

とまあ、威勢の良いことを言いはしたものの、現状は何も変わっていない。ただ僕がやる気を確かなものにしたというだけ。

組織としては脆弱この上ない。

「では、改めて紹介させてもらおう。こちらの黒髪さんは僕をこの世界に召喚してくださった巫女さんでラフィリア・ヘルゴラント。死んだことになってるはずだけど、さっき転移魔法で鍛錬室にきたみたい」

多分、ストラトとリディアは知っているだろうけど紹介しておく。今のところ、後宮に入れる人間は三人 僕とストラトとリディアだけのはずなのにいきなり現れた、その説明も兼ねて。

「そして、こっち 男性の方がストラト…えつとなんだっけ？」

そつえば、名前しか聞いてない。とんだ主君もいたものだ。

「ストラト・ツェーリングンと申します。巫女さま、ご無事でなによりでございます」

…自己紹介は僕に対してだった。というか、ストラト侍従長とラフィリアは面識があるのだから自己紹介は必要なかった。尤も、人相が変わってしまっているストラトにラフィリアの表情は引き攣っていたが。

「んで、こちらは僕の専属メイドをしてくれているリディリシア・

ロートリンゲン。癒し系だ」

「ミノルさまっ。わたくし治癒魔術 神聖魔法の心得などござい
ませんっ」

どこか必死さを感じさせるリディアの抗議。

多分、”癒し系”というのを治癒魔術と捉えたのだろう。でも、
ラフィリアには僕の言わんとするところがしつかりと伝わったらし
い。ははーん、とでも言いたげな意地の悪い笑顔を浮かべているこ
とからもそれは明らかだ。国王召喚の儀式のために、日本を十年彷徨
った間に触れた価値観というのは僕としつかり共有されているよ
うだった。

「分かってるって。それより挨拶だよ、あ・い・さ・っ」

リディアの訴えは軽くスルーして、本題を進めることにする。ち
よつと強引だが、”癒し系”という概念を僕の口から説明するのは
憚られる。…見てて和む、なんて言われたらショックだろうし。

「…ミノルさまの身の回りのお世話を仰せつかっているリディリシ
ア・ロートリンゲンです。リディア、とお呼びください。ラフィリ
アさま」

スカートの裾をちょっとだけ持ち上げて、優雅に腰を折るリトル
メイド（サイズの意味で）。

「ねえ、稔。アレは撫で回したり頬擦りして揉みくちやにしちゃっ
てもいいのかな？」

「同性だから、特別問題にはならないだろうけど。今後のことを考

えるなら止めといたほうがいいんじゃないか？」

「そっか、残念。よろしく、リディアちゃん」

…多分、ラフィリアにもなにかクルものがあつたのだろう。魂に揺さぶりをかけるなにかが。しかし、僕よりも相当冷静なのか。なにも行動に及ぶことはなかったけれど。

「さて、顔合わせは済んだな？ なにか、質問とか？

ない？ ないなら今後の方針とか話したいんだけどいい？」

全員の顔を一通り見回して、頷きや礼、返事などがそれぞれに返ってくるのを確認してから僕の考えを披露する。

「まず、国政を取り戻すことから始める。腐敗貴族どもの排除だな。その後の処分はさておいて、実態の把握から始めないといけない。どれくらいの数が居るのか、どれくらいの権力で、どれくらい金をもっているか。これはストラト、大雑把でいいからまとめておいてくれ」

「御意」

「で、クーデターをやるには軍事力と国民の支持が必要だ。

相手は貴族。誰からも好かれてないような奴らだろうが、武力を持っている可能性は十二分にある。戦いにならなければ一番いいが、そうもいかんだろう。地方領主とかでアテにできそうな人物を説得してもらおう」

「そんなの、どーすんのよ。稔はここを離れられないし、ストラトもリディアちゃんもそうでしょう？ まさかわたしにやれっての？」

うん。それは思った。口に出して初めて気付いたけど、僕の手札はとても少ない。一人二役どころか三役、四役をこなしてもらわなければならぬ。その手札の中でも、僕が一番使えないときているかといってラフィリアは死んだ人間扱いだし、手配だってされている可能性があるからおおっぴらには動けない。

「それは、まあなんとかするさ。人材だって集めないといけない」

「そこが一番問題なんじゃない？ ただ貴方をここに連れてきただけのわたしが殺されそうになっただけだから、難しいでしょう」

「そこは国王、って立場を最大限に利用させてもらう」

ストラトにはすでにある程度話してあるから平然としているが、リディアとラフィリアは訳がわからない、といった顔をしている。

正直、あんまり話したくないのだがそんな場合でもない。

「後宮を使う。妾やらなんやらという名目で無作為に後宮に連れ込んで、使えそうな奴だけ働いてもらって残りは監禁だ。男女貴賤を問わず、だ」

二人の表情が引き攣る。それだけに止まらず壁際まで全速後退。分かりきっていたことではあるが、そこまで露骨なリアクションをされるとかなりへこむ…。気持ちには痛いほどよく分かるけど。

「正直、僕もやりたくないんだけど。なんか代案はない？」

聞いてはみるが、多分代案は出ないだろう。

風聞こそ最悪だが、その隠匿性と人の流れの説得力に関してはか

なり納得の行くものがあると思う。全て国王の我侭、横暴ということとで済ませることが出来る。そしてその反発心は支配者層である貴族に向き、抵抗組織も作りやすくなる。それどころか、後宮の秘密を探ろうとした者を問答無用で抹殺しても誰も文句が言えないという特典まで付く。後宮を嗅ぎ回るなど、その行為そのものが処断の理由になる。

「とまあ、ざっとこれだけの利点があるわけなんだけど」

代案は出なかった。

代わりにラフィリアが物凄く嫌そうな顔をしていた。

「よくもまあそんなことまで考えるわね…腹黒い」

放って置いてほしい。こちらは命懸けなのだ。

ちなみにリディアはよく分かっていないようだ。…こんな後ろ暗い話には縁のなさそうな彼女。できれば、純真なままでいてほしいと思う。こんな面倒事に巻き込んだ人間の思っていることではないが。

「そうやって集めた人材を、まあ、言い方は悪いが洗脳する。価値観の摩り替えというのかな。本来的な貴族の存在理由とかそんなヤツを徹底的に叩き込む。実際にはもうちよつと柔らかい方法で大丈夫だと思うけど、最悪の場合はね」

意識して、にやりと笑って見せればやはりラフィリアが嫌そうな顔をする。

「ほんつとに嫌な奴ね。灰汁アクが強いったらないわね。煮ても焼いても食えやしない」

「……そこまで悪し様に言われると、本気で嫌われてるんじゃないかと錯覚するよ……」

「ラフィリアさまっ、ミノルさまに失礼ですっ！」

両の拳を握って、僕をフォローしてくれるリディア。多分、結構本気なんだろうけど可愛らしさしか見て取れない。そんなリディアに癒されて、本題復帰。

「ありがと、リディア。」

その中から、市民受けの良さそうな家柄のヤツを中心に市民組織を作ってもらおう。暴発しないための抑えと、時が来たときの蜂起の指揮をやってもらう」

「蜂起？」

「革命とも言っな。時期が来たら国を丸ごとひっくり返してもらおう。これで完成。どうよっ？」

その工程にはもっと複雑な要素が入り混じるが、骨子はこんな感じだった。

十五話 悪巧み(後書き)

誤字・脱字、ご意見・ご感想などお待ちしております。

十六話 続・悪巧み

「企みがバレたらどうするの？」

至極あっさり、一番嫌な懸念を口にしてくれるのはラフィリアだった。

大体、隠密作戦なんてのは規模が大きくなればなるほど発覚しやすくなるものだ。当然、そのあたりのことも考えてはある。

「バレたら、とりあえず僕は助からないな。でも、安心してくれていい。作戦は失敗したときのことも考えての二段構えだ。その時は、内戦ってことになるだろうけどね」

不満の種はもう撒かれているのだ。僕は、それを芽吹かせてやるだけでいい。

「なんにしても、発覚は遅ければ遅いほどいい。後は野となれ山となれ、だ」

「そんな適当でいいの？」

「いいんだよ。やり方さえ示してやれば、そのうち起こる事だよ」

「…まるで他人事ね」

「他人事だよ。実際に革命を起こすのは僕じゃない。命を賭けるのも僕じゃない。やるもやらないも、国民次第さ」

「……」

冷たいようだが、それが真実だ。

道筋を書いて、準備を念入りに行っても、実際に行動を起こすのは僕じゃない。

現状に不満を持つ一人一人の国民だ。

皆が一様に口を閉ざして僕を見る。そのまなざしに込められている思いはどんなもののだろうか。まさか、尊敬ではあるまい。

勇者として召喚されていたのであれば、その力を求心力に革命勢力として台頭できたのかもしれないが、僕は王だ。力を持たぬ王しかし、王であるが故にできることもある。

血を流すか、流さないかという選択だ。

「もし、バレずに上手くやれたら国中の貴族を集めてでっかい祝賀会をやる。そこを強襲してもらおう。そうすれば被害は最小、効果は絶大。悪くはないだろう?」

「できることをやる、ってわけね。それでわたしはなにをすればいい?」

「ラフィリアは転移魔術で飛び回ってもらうことになる。異種族の里を廻って顔を撃いでおいてほしい。それと、貴族連中が彼らに手を出さないように監視すると、市民組織の監督を頼む」

「りょーかい。詳しいことは後で聞かせてね?」

「ん。ストラトはさっきも言ったように、王城内の情報を集めてもらおう。あと適当に人にも声を掛けておいてくれ。使えるかどうかは僕が見る」

「御意に」

「リディアは、普段どおりの仕事と後宮の管理を任せる。人も増えてくるかもしれないが、僕の名代として、好きにやっていいから」

「は、ははは、はいっ！ がががが頑張りますっ！」

リディアにはいきなり荷が重いようにも思うが、やってもらわなければならぬ。誰かに負担を集中させるわけにもいかない。

「陛下はどんなされるのですか？」

「僕は人材教育と、自分の教養と、訓練と　あとは道化ドイロかな」

「道化？」

「うん。貴族連中に僕が無害だと思ってもらう演技と、利用価値のアピールかな　特別な力はないけど、知識だけは蓄えてきたからそれを餌にさせてもらう」

「…異世界の技術」

三人が息を飲む。

ラフィリアはその片鱗を実際に見てきてはいるが、それがどのような意味を持つのかは知らない。ストラトとリディアには想像すらできないだろう。

とはいっても、考えなしに知識や技術をばら撒いたりはしないし、またできないだろう。日本での生活は高度な科学技術によって支えられている社会であって、身近な製品ひとつであつてもとんでもな

い技術が惜しみなく使われているのだ。この世界では実現できないものも多い。いや、むしろほとんど役に立たないだろう。

それでも、異世界の技術というだけ価値がある。それがある程度、身を守る盾にもなってくれるだろう。

僕はひとつ拍手を叩き、逸れた注意を引き戻す。

「以上で作戦会議は終了！ はい、各自行動に移る！」

「貴方はどうするのよ」

「僕か？ 僕は寝る。筋肉痛でもう動けないし」

真剣なムードは一気に霧散し、白けた視線が僕を射る。が、動けないものは動けないのだ。

僕は柔らかなベッドに身を投げた。

十六話 続・悪巧み（後書き）

中身が薄くて申し訳ありません（陳謝）もう少し文章量があれば…
とは思いますが…。なかなかどうして、頭が回りません。

誤字・脱字、ご意見・ご感想などお待ちしております。

十七話 失態（前書き）

なんか、実際の技術とか云々という話が出てきますが、話半分で聞き流してくださいと助かります（苦笑）

十七話 失態

実際に動き出してからは、時が経つのも早かった。

ラフィリアは異種族との外交官として不満点の洗い出しや、調整のために国中を飛び回っているし、ストラトも王城内の力関係や貴族連中の資産調査・交友関係調査、果ては女官たちの噂話まで精力的にかつそれとなく集めてくれている。

しかし、そんな中でもとりわけ忙しく働いているのは僕とリディアだろう。お互いに新人　国王として、メイドとして　ということもあるが、現実的にやるべき実務が過剰だったといえる。

リディアは後宮管理の一環として後宮を片付けなければならなかった。

人材育成計画の実施が急務であることは確かだったが、それ以前に人が出入りできるように　他の人間の受け入れ態勢を整えなければならぬ。つまりは大掃除である。だが、この大掃除がまた大変なのである。

今のところ使われている後宮のスペースといえば”広い庭（鍛錬室）つき、平屋一階建て”というところなのだが、これはほんの氷山の一角でしかない。僕自身、歩き回ったりしていないのでストラトから伝え聞いただけなのだが、なんでも王城の奥にもうひとつ王城がくつついているといった規模らしい。僕は王城の大きさを知らないから漠然と大きいのだろうな、としか思わないのだがリディアが真っ青になっていたからかなり広大な空間なのだろう。

そんな場所に四人しか居ない。これから増えるにしても今はたったの四人　いや、ラフィリアは外交に出るから実質三人。

これではお話にならないと急遽、王城から人員を徴発してメイド連隊を結成。計画前の大掃除に乗り出したのである。もちろん連隊

長はリディアだ。中には年嵩のベテランメイドも混じっていたが変なやつかみも、嫌がらせなどもなかったようだ。国王付きのメイドという立場と、本人の人徳だろう。三昼夜にも及ぶ激戦の果てに、無事に後宮の掃除は完了しメイド連隊は解散となったのであるがそれはまた別の形で語られるべきだろう。

リディアが奮闘している間、僕ものほんとしていたわけではない。主だった貴族連中と有識者を集めて技術の供与を行っていた。

「紙の製法ですとっ!？」

紙は元の世界ではこれでもかというくらいに身近な製品だが、実際に作るとなるとこれまた大変な技術を要する。その歴史は古く、紀元前にはすでに今日の紙の原型が完成していたにも拘らず、本格的な生産が行われるようになったのはなんと18世紀になってからだという。日本ではかなり早い時期から和紙の生産が行われ、人々にとって身近なものであったという。しかし、西方への伝来はずっと後になってからのことだ。そしてグラーフ王国もまたご多分に漏れず、輸入品としての高価な紙の存在は知っていても紙の製法は知りえていなかったのだ。

リーベレヒトを中心とする貴族連中と、有識者 研究学府のお歴々が揃って声を上げた。

「うん。僕の世界とこの世界では少し勝手が違うようだから素材から探してもらうことになるけど、作り方は知ってる」

なんてさらっと言ってやった。

「草の茎とか、繊維の多いヤツを煮たり叩いたりして繊維を取り出して、それを水と混ぜて漉^すくんだ」

本当は木材や木の皮なんかからのほうが繊維は取り出しやすいのだが、それで森林を伐採されると困ったことになるので伏せておく。

「すく？」

「近い表現では…掬い上げて漉し取る、といった感じかな」

「??？」

全く未知の知識を教えるということは難しい。概念を共有できないからニュアンスが伝わらない。話ではまったく要領を得ないので似た様なモノをもって来させ、身振り手振りで指導していく。とはいっても、イメージにもあつたものではないから、それはシュールな光景であつただろうが、本人たちは到つて大真面目だ。

概要を話し、必要なものを用意…または作らせることから始めなければならず、これまた前途多難。

近代的な光沢のある紙は恐らく製造不能　アレは綿密極まる科学技術の結果　なので、和紙の作り方を基本に据えて話をするのだが、文化的にヨーロッパ圏なのかこれまたニュアンスが伝わらず、近い物自体が存在していないということもあり紙の作り方と同じくらい時間を要した。

繊維と水を入れる箱はまず問題ない。

漉き枠に関しても問題ない。

だが、繊維を受け止めるための”簾”が伝わらない。一応、図のようなものを書いて見せたが伝わったかどうかは微妙だ。代用品として目の粗い麻布とかも用意してもらつた。

僕にしても、『作り方』を知っているだけで、作つたことがあるわけではない。全てが手探りで出来上がってくる道具や代わりに使

えそうなモノを検分し、その役割や意味をその都度講義して聞かせて形にしていく。

最初は全て謁見の間でやっていた実験もいつの間にか研究室が設置され、そちらで行うようになっていった。

基本的なやり方を教えたら、あとは彼らに試行錯誤してもらって研究してもらうしかない。

そんなある意味召喚王らしい仕事を果たし、ようやく人材育成に取り掛かるうかというところだ。日頃からの鍛錬も無駄をしない程度にこなしてようやく、チェインメールの重さにも慣れてきた。

でも、もっと別の重いものを背負うことになった。

紙の製法を教えたことは、貴族連中にとつての僕の価値を飛躍的に高めたようだった。知識を供与して一ヶ月。貴族たちはこぞって品質の良い紙を作ろうと競い合っている。献上品として、紙の届かない日はないほどに。

初めこそ警戒し、ボロを出すまいと注意していても、熱心に取り組まれては教える側にも力が入る。欲に眩んだ目が、童心に返ったように輝いていたのが印象に残っている。

しかし、僕は彼らを裏切らなければならない。彼らを破滅に追い込まなければならない。

共に紙漉きについて意見を交わし、完成を喜び合った彼らを。

「少し、関わりすぎた…」

寝室で、一人独語する。

彼らの行く末を思うと、胸が痛んだ。

十七話 失態（後書き）

今後少しばかり更新速度が遅くなるかもしれません。

あまりに薄い内容の文章ばかりで話数を増やしてしまうのもよくないと思いますので…。

キリのいいワンシーンだけで話を切ると書く分には楽なのですが（笑）

誤字・脱字、ご意見・ご感想などお待ちしております。

十八話 只今引き籠もり中

紙の製法を教えて以来、僕は後宮から出ることもほとんどなく過ごしている。

稀に技術関係の問い合わせに執務室で応じる程度で、表向きには国中から美男美女を集めての淫蕩生活を送っている　ということになっていく。しかし、その実態はといえば

「いいか、王族や貴族なんてのは国家の寄生虫でしかないことをよく胸に刻み込んでおけ。我々はただ浪費し、なんら益体のない社会のゴミクズでしかないということをだ。どうしてか分かるか」

「我々はなんら社会的生産活動に寄与しないがためだっ」

「その通りだ。国民の築き上げた富の上に胡坐をかいて居座っているのが我々だ。ではなぜそうなった。どうしてそれが許されていた？」

「我々が墮落したからだっ。国民の生活を守るためだっ」

「そう。我々はただ国民の生活を守るための安全装置としての役割を任されているに過ぎない。外敵が現れれば、その命を惜しむことなく危険に晒し国民の代わりに死に果てることこそが本来の我々の役目だ。誰もが行えないことを果たすために、我々は社会的生産に寄与せず安楽を許されている。故の貴族だ。

……お前たちは貴族か？」

「否ッ！ 断じて否である！」

「そつだ。責務を果たさぬ貴様たちは犬にも劣る。いいか、貴様等はゴミクス以下の寄生虫だ！」

「我々はゴミクス以下の寄生虫だ！」

「声が小さい！ タマ落としたか！！」

「！！！！」

以下省略。 自主規制。

といった、某金属皮膜的なノリでの洗脳 ではなくて、思想矯正の真つ最中。かなり偏った考え方であるとは思うのだが、本来的に特権階級とはそのようにあるべきだと思っている。あとは将来の腐敗抑制のためにも、特権が与えられている理由をしっかりと理解させておかなければならない。特権が与えられる理由とは、国民の安全保障に他ならない。武芸や学問を専業にする仕事があるのは、困ったことがあったときにはその人たちが力や知恵を貸してくれるからこそ生産性のない仕事でありながらも頼りにされ受け入れられるのだ。そのことを知っていなければならぬ。外敵から身を守るために軍隊を養い、村や街といった規模では対処できない物事を解決するために国を作り、政治家という存在を許容しているのだ。軍も政治家も”別になくてもいい存在”であることを決して忘れてはいけない というのは某銀河の英雄たちの物語から言を借りたものだが。”国民のために国家が存在しているのであって、国家のために国民が存在しているわけではない”ということを徹底的に叩き込んでいく。男女を問わず、だ。やり方がスマートでないのは承知の上。

若い貴族の中には、父や祖父のやり方に疑問を持つ”青い”奴が意外と多くて助かっている。良くも悪くも『理想に燃える若人』たちだった。それでも、呼び出しに応じた者たちの半分くらいはどうしようもない特権思想に凝り固まってしまったヤツらばかりで、仕方なく地下に幽閉している。ストラト曰く、拷問部屋であったとか何とか。そんなサディスティックな国王も居たのかと思うと暗澹たる思いに囚われるが 気にしないことにした。僕は僕だ。

そんな教育を貴族の子息たちに施す一方、僕もまた彼らから教育を受けていた。宮廷作法のなんたるか。その威厳のなんたるか。そして優雅さのなんたるか。 全て上辺を繕うためのものでしかないが、王らしさの演出という意味では身につける必要性もあったわけで四六時中指導されっぱなしだ。なんせ、後宮はある程度の差はあっても全員が貴族の出身でそのような作法を幼少の頃から身につけてきた者たちであるから厳しいことこの上なかった。それ以外にも、戦士としての訓練に力を入れていた。貴族の子弟は武術を嗜んでいる事もあり、良い師ともなった。

「ぐうっ……！」

薙ぎ払うように叩きつけられる木剣を左手の盾で受け止めるが、力負けして身体が泳ぐ。姿勢の崩れたところに間髪入れずに足払いが決まって無様に転倒。しかし、追い討ちの一撃は床を転がってなんとか避ける。

「ぜーっ！ ぜーっ！」

息が苦しい。

緊張と運動のせいだ。なんといつても、目が追いつかないのが問題だ。日本では高い反射神経を求められるようなことがなかったこ

ともあるのだろうが、僕の目では剣先を追えないのだ。更に、勘も働かないので鎧の上から打ち据えられること十数回。痣だらけになりながら、ようやく”どちらからくるか”がなんとなく見えるようになった程度である。それも、幅広の盾でなければ防げない。

「ごろごろと転がって、勢いのままに膝立ちになり盾を構えるが。目の前に相手の姿は既になく、背後から木剣がすこんと頭を打った。」

「随分マシにはなったようですが、まだまだですね。剣先だけではなく、使い手の動きから目を離さないように」

「ふえい」

鍛錬室で僕に稽古をつけてくれているのはシルヴァ・ブランデン。ヴェルドの息子だった。

鋼のような精悍さのヴェルドとは違って、貴公子然とした柔らかい表情と、爽やかさは恐らく母に似たのだろうが、実直な性格と黒髪、そして剣の腕は父譲りだった。ただ、無口ではないところが父とは違っていた。

「それと、筋力と体力が全く足りません。その程度の動きで息を乱しては」

「実に騎士らしい騎士っぷり。」

そんなシルヴァは発掘人材の第一号であり、今ではなにかと僕の補佐をしてくれている。…それこそ、先程の宮廷マナーやらの後宮を上げての教育体制を敷いたのもコイツだ。ストラトほどではないにしても、一般的な知識を僕に叩き込むことを使命と考えているフシがある。ストラトとも仲が良いし。反面、リディアとは水面下の争いがあるらしい。やっていることが、少し違うとはいえ、職域が

微妙に被っていることがその原因らしい。

公のシルヴァ。私のリディア。そんな不文律が後宮では出来上がっていた。

「とにかく、日中は活動に差し支えますから就寝前に後宮を走りましよう。ボクも一緒にしますから」

：リディアが控えめな分、こちらは主だろうがなんだろうが、引っ張りまわす強さ いや、強引さがあつた。：まあ、訓練に関してはそれくらいのほうが僕は有難いのだが、リディアがなんとなく不機嫌になるのが心配の種だった。

十八話 只今引き籠もり中（後書き）

誤字・脱字、ご意見・ご感想などお待ちしております。

十九話 リディア

毎日が充実しているというのはとても幸せなことだと思う。

日本ではただ日々の生活に追われるように仕事をし、忙しいだけの毎日だった。しかし、この世界に来てからというもの、心になにか温かいものが満ちていく。そんな生活が続いている。まあ、最初の頃は散々だったが。

名ばかり国王を脱却すべく奔走し、頭の固い貴族どもをちぎっては投げちぎっては投げ。というのは嘘だが、精力的に活動している。精神の高揚は、かつて覚えがないほどで全身これ是やる気の塊、といった具合だ。そのやる気はといえば、宮廷マナーにはじまり国王としての教養、身体を作るための厳しい鍛錬も僕の膝を折らせることはできない。まさに無敵！僕にもついにチート能力が目覚めたか！と一人快哉を叫んだりもした。

しかし、そんな浮かれ気分も束の間のこと。精神的な充足感、満足感はともかくとして便利な生活に慣れきったヤワな肉体はとつくに限界を超えていたのである。いわんや、日々の厳しい鍛錬にである。

その成れの果てが、ベッドの上に寝かされているほぼ全身包帯男である。別に怪我をしたわけではないが、酷使に酷使を重ねた筋肉組織が炎症を起こしてしまっており、今は消炎効果のある薬草で全身に湿布が施されているのだ。その有様はといえば、恐らくグラーフ王国で一番柔らかいベッドの上にあっても少なからず荷重のかかっている背中が痛む、というほどのものであるから重傷である。さらに、ついでとばかりに疲労からくる高熱まで併発してしまい、現在リディアがつきつきりで看病をしてくれている。

長い前髪のせいでその表情は拝めないが、きつと険しい表情をし

ていることだろう。

「何度も申し上げたはずですが、ミノルさま。もう少し、身体をご自愛くださいと」

枕元で呟かれるリディアの拗ねたような声が耳に痛い。何かにつけ、僕を休ませようとしてくれたのを無碍むげにしてきたのは僕だ。就寝前の持久走に最後まで反対していたのもリディアなら、体調を崩したときに真っ先にジルヴァに噛み付いていたのも彼女だった。なのに、僕はといえばかつてないほどのやる気で、自分をすっかり見失ってしまった。つくづく、リディアには格好悪いところばかり見られている。

「いやあ、全く弁解の余地もありませんな」

高熱のせいで苦しくはあるが、意識ははっきりしている。僕に非があることは明白だ。

「…いえ、出過ぎたことを申しました…」

それだけ言つて、リディアはしゅんと頂垂うなだれてしまう。彼女はなにも悪くなどないのに、恐縮させてしまう。本当はもっと活発で元気、なのにどこか控えめ…というのがリディアのキャラクターなのだろうが、僕の立場というやつが彼女の本来の持ち味を奪っている。可能であれば対等な関係でありたいという僕の願いからは程遠い。…そこに振って湧いた（ある意味必然だが）この状況、何らかのアクションを起こすにはいい機会だ。が、心配なこともある。リディアが僕の世話をしてくれるようになってもう優に一ヶ月以上が経つけれど、僕はいえれば時間の大半を革命運動とその準備に費やし、後宮の自室に戻ってからも今後の方針やラフィリア、ストラトから

の報告を受けるなどし、就寝の直前でさえ考え事をしたりで、ほとんど会話らしい会話をした覚えがないという最低っぷりだったりする。言い訳の種はたくさんあるが、どちらにしても最悪の人間には違いない。そんな僕に彼女が愛想を尽かしていないか、それだけが心配だった。

「リディア」

「はい、ミノルさま」

そんな最低な僕の呼びかけにもすぐに応じてくれる。それどころか、身を屈めて一言も聞き逃すまいと、あるいは僕の負担を軽くしようとする口元に寄せてくれる。本当に良い娘だ。

「もっと、言いたいことは言っていないからな」

「えっ…?」

何を言われたのか、一瞬判別がつかずに目をぱちくりさせているのだろう、多分。

「僕は一応国王だけど、そんなことを気にしないで何でも言っ
てほ
しい」

「あ、あああ、あのっ！ ですがっ」

「イヤ、ほんとに。僕が鈍いだけなのかもしれないけど、言葉に
し
てもらわないと分からないんだよ。だから、お願い。二人きりの
と
きだけでもいいから」

「えええええええつ!?!」

頬どころか、長い金髪から僅かにのぞく長い耳の先まで真っ赤に染めて動転しているリディアに更に追い討ちをかける。

「何を言っても、何をやっても叱つたりしないし、怒らないから」

な? と精一杯の親しみを込めた笑顔で言う。

笑顔なんて言うけど、正直変な顔になっていないか心配だ。こっちの世界に来てから随分人間らしさを取り戻したつもりだが、人に安心感を与えたいなんてそんな穏やかな感情は久しく忘れていたからだ。人と接したい、そう強く願う気持ちとは。

そんな雰囲気を感じてくれたのか。それまで困ったように視線を彷徨わせていた(多分)リディアが、しっかりと僕を見ていた。

「できれば、ひとりの人間として接して欲しい」

まるで告白だ、と思う。いや、事実告白か? 『愛の』という枕詞がないだけで。

「ミノルさま」

顔を赤くしたままのリディアが、僕の手を両手で包むようにして握ってくる。

「ストラトさまが、いつも仰っておられたでしょう。意思疎通のペリダントをしたまま、強い思いを込めてはならないと」

「う、むう」

優しくも有無を言わせぬ迫力に僕は気圧けおされる。

「ミノルさまが、ペンダントを外してくださるのでしたら、極めて私的に御仕えさせていただきます」

「うぐっ…」

提示された条件に僕は唖りを上げる。

多分、これはリディアのコンプレックスのようなものだろう、と邪推する。一見、拒否ともとれるこの提案は彼女の羨望だ。後宮では、僕が全員に教えるもするが教えられもするのだ。ある意味全員が僕の教師なのだが、リディアはその環の外に居る。講義や訓練の最中に、リディアがその様子を窺っていた。という目撃証言をストラトから聞かされているから、多分間違いない。彼女もまた、教える側という立ち位置を恐らくは望んでいるのだろう。

「それは、僕にこの世界の言葉を教えてくれるということ？」

「はいっ」

期待からか、僕の手を握るリディアの力が増した。多分、この前髪のヴェールの向こうにはキラキラと輝いている瞳があるのだろう。そして、僕は彼女の期待を裏切れない。何事も実利を優先することを信条にしている僕だけに見栄がないわけではないのだ。

僕は、一回り小さいリディアの手を力強く　とんでもない苦痛を伴うが　握り返す。

「分かった。よろしく頼むよ、リディア先生？」

「はいっ!」

リディアの弾むような元気な返事に思わず笑みが零れる。こちらまで元気になってしまいそうな、そんな返事だ。

「では」

と、リディアは頭のカチューシャを取り去る。

「これで、わたくしはただのリディアです。ミノルさま」

”さん”とは流石に言えなかったようで”さま”になってはしまったが、そこはそれ。リディアならすぐに慣れて”さん”付けにしてくれることだろう。照れたようにはにかみ笑いをする彼女が愛らしい。そして僕もまた、彼女の誠意に応えるようにペンダントを首から外した。

「ありがとうな、リディア」

マジックアイテムの加護を失った僕の言葉はリディアに届くはずもなかったけれど、彼女は満面の笑み（多分）をその顔かんはせに乗せて元気な返事をくれた。

これは、大変ながらも幸せなある日のお話し

十九話 リディア（後書き）

マッチョ執事のストラト。

時空転移巫女ラフィリア。

取替えっ子のリディア。一番影の薄い…というかキャラ付けの曖昧な彼女に挺入れしてみた！というか、一人ずつなんかお話しを書きたいですね（笑）

実は今までで一番文章量があったりします（笑）

誤字・脱字、ご意見・感想などお待ちしております。

二十話 待遇改善要求？

リディアとの新しい約束が発効し復活してからというもの、僕は再び無敵モードに突入し、並み居る問題をばっさばっさと切り倒し、薙ぎ倒ししつつも体調管理に気を配りしっかりと休息を取るようにしている。要はメリハリの問題のようで、熱をぶり返すようなこともなく健やかな日々を送っている。まあ、それもリディアがより僕の健康を気に掛けてくれるようになったからに他ならないのだけど、その徹底ぶりは凄まじいものがあった。

食事内容の改善から、風呂の温度、訓練後のマッサージからなにからなにまでリディアが管理するようになったのである。とはいっても、それは僕を束縛するようなものではなく、不自由を感じたこととは全くない。むしろ、大切にされすぎで申し訳ないくらいだ。

中でも、食事内容の改善は著しい。それこそ、毎日のように並べられる贅を凝らした料理の数々。例えるならば、フランス料理のフルコースであるとかから、一転素朴な家庭料理に変貌を遂げた。これは僕にとつて、とても幸せな変化だった。初めこそ今までお目にかかったことのないような高級料理うまいに舌鼓を打っておおはしやぎしたものだだったが、連日続く美味しいながらも途轍もなく”重い”それらに嫌気が差してきたところでもあった。そんな脂っこい料理は僕が倒れた原因の一つでもあるらしい。

それからというもの、僕の食事はリディアのお手製身体に優しい家庭料理と相成ったのである。そもそも城の料理人たちは美味しい食事を最高の素材と技術を以って提供するのを至上命題としているわけで身体に優しい、なんて考えは小指の先程もありはしなかったのである。そのことに憤慨した彼女は自分たちのまかない分でミルク粥を作ってくれたというのがその発端である。余談ではあるが、大変美味しかった。身体に染みる、という経験を僕はそのとき初め

て知ったものである。

閑話休題。

兎にも角にも、計画が露呈しているようなフシも全く見受けられず、食事も美味しいという幸せ生活。リディアに言葉を教わることで、ちよつとした挨拶くらいはできるようにもなったりと順風満帆な日々。

そんなときだった、後宮に大事件が起こったのは。

* * *

「ふざけるなっ!」

「ふざけてなどいませんっ!」

重い怒声と、言い返す高い声が後宮の廊下に響き渡る。あまりに大きな声であったために、何事かと声を聞きつけた者たちがぞろぞろと集まってくる。かく言う僕も講義を途中で放り出して顔を覗かせた一人だ。

「陛下にそのようなものを食べさせて、何かあったらどうするつもりだっ!?!」

「何か、とはなんです! この料理が毒に見えるとでも!?!」

怒号。

雷鳴。

思わず身をすくめてしまつようなそれらに準ずるような言い合いが繰り返されているようだ。それも、どうにもよく知った声であるように思われる。人垣が壁になつて見えないが、多分ジルヴァとリディアだろう。

「貴様のような素人の作ったモノで、陛下が体調を崩されでもしたらどうするのだと言っている!!」

「何を根拠に素人と申されているのかは分かりませんが、実際にミノルさまは召し上がつて美味しいと褒めてくださいますっ!!」

「!!」

「!!」

戦さながらのプレッシャーを放ちながら言い募るジルヴァ。

対するリディアは微塵も気圧されることなく屹然と言り返す。

喧々諤々、というのは多分こつこつというときに使う四字熟語ではない

本来はもつと大人数での五月蠅い様を差す のだろうけど、それに劣らず姦かしましい。

「二人とも、元気だねえ」

思わずそんな呑気な台詞が口を突いて出るほどの大音量だ。既舎の近くでやったら馬が驚いて暴走するかもしれない。最初は興味本位で野次馬をしていた面々も、耳を押さえるか立ち去るかのどちらかを選択して、行動を始めている。しかし、日本というある意味不健全な社会を経験している僕としては大したことのないレベルだ。精々パチンコ屋程度のもの。とはいえ、放っておくわけにもいかない。片や貴族子弟の代表格。片や後宮総括メイドである。おいそれ

と口を挟めるものではない。

「はい、ストロップ」

頬を紅潮させ、互いの主張から罵り合いに移行しようとしていたところにさつくりと水を差す。相変わらず、リディアは前髪フェイスガードのために表情は窺い知れないが、ジルヴァは怒髪天一步手前だ。下手をすれば取っ組み合いになりかねない。

「陛下！」

「ミノルさま！」

”黙っててください！”とは流石に続かなかった。二人の目が驚きに見開いて、慌てて居住まいを直し一礼する。

「これは…大変の見苦しいところを」

「黙ってる、って言われたらどうしようかと思ったよ」

底意地悪く、喉の奥でくくつと笑って見せれば二人は更に縮こまる。実際、仲裁に入ったのが僕でなければ見事にハモらせて”黙っている”と言い捨てただろう。未恐ろしい二人である。

「で、なにが原因だ？ 料理がどうのここの、と聞こえたが」

「ジルヴァさまが、わたくしがミノルさまにお持ちしようとした昼食にケチをつけられるのですっ」

なるほど。よくよく見れば、リディアはその手に大き目のオーブ

ンバスケットを携えている。どうやら中身はオープンサンドのようだ。食事の傍ら、日本にあった料理の話をしたことがあるが、そのときに話したのがサンドイッチだ。それに触発されたことだろうが、目敏いジルヴァに見つかってしまい、口論になった　というのが事件の経緯らしい。

「この際ですので、はっきり申し上げておきますが、陛下」

父親に劣らず、高い上背の持ち主であるジルヴァは一切の揺らぎのない目で僕を見据えている。

「陛下には国王としての自覚が欠けておいでです。このような粗末なモノを召し上がるようなことはお控えください。でなければ、誰かにお申し付けくださればコック長に作らせます。貴方は王なので、メイドと同じようなものを食べているとあっては」

後半に掛けての言葉は、多分リディアに対するあてつけであって、本心ではないのだろう。だから、許してやる。が、言っていることがダメダメ過ぎる。教育課程がまだ進んでいない、ということもあるがこれは再教育が必要だ。人間、根っこの部分から矯正するのは大変ということなのだろうが。

居残った野次馬さんたちを見遣れば、貴族の子弟たちは大体ジルヴァの意見に賛成のようふうんうんと頷いている。しかし、お付きのメイドさんたちの中にはなんと浮かない顔をしている者もいる。

「部下に示しがつかない、というのも理解できなくはないが　そうじゃない。僕が言いたいのはそうじゃない」

大仰に首を振ってため息を吐く。食料の重要性というものをまるで理解していない。

「みんな、藁でかさ増ししたパンを食べたことがあるか？」

僕は卑屈な笑みを浮かべて言った。

二十話 待遇改善要求？（後書き）

誤字・脱字、ご意見・ご感想などお待ちしております。

二十一話 待遇改善要求？

「まあ、実際に僕も食べたことはないんだけどね。全部、伝え聞いた知識だけの話だ。どうして分かるよな？」

首を傾げている者。そもそも質問の意図すら分からないもの。理解している者。様々だが、揃って貴族の子弟たちは理解が及ばないようだ。メイドさんたちは、やはりおぼろげに理解している様子。

「小麦が足りないからだよ。その不足の理由が何処に在るのかは各々考えてもらうとして、だ。僕には搾取の現状が分からないからどんな生活をしているのかは想像するしかない。普通に食べる分にはなんとかなっているのか、かさ増しパンで凌いでいるのか。はたまた木の皮や根を齧る所まで行っているのか……」

これも、全て知識でのみ知る世界の話だ。それも白いパンを食べながら、そんな話をしてどれほどの説得力があるだろうか。それでも、皆が一樣に息を呑む。それくらいの意味はあったらしい。メディアが発達して、膨大な情報だけが氾濫を起こしているような世界で生きてきた僕と、古ぼけた本か自分の経験、それが伝聞という形でしか情報が得られなかった彼らはそのような事実すら知らなかっただろう。

「重い話ばかりしてしまつて悪いけどね、もう少しシヨッキングな話をするよ。食べられなければ捨てられてしまう料理。普段から山と盛られて出てくる肉の話さ。肉1kgを生産するのに穀物は3kgから11kg必要なんだ。まあ、これは僕の世界の基準だからも

っと少ないだろうけどね」

どう？ と見渡してみれば、これには流石に顔を青くしていた。馬もそれくらい食べるだろうに、そこまで考えが到らないものなのだろうか。謂わば上流社会の構成員である彼らが知る由もないか、とも思う。僕だって、あくまでも”情報”として知っているだけなのだから偉そうに言えた義理ではないのだが。

「さて、そんな厳しい現実があるわけだけどこれでもまだリディアの料理は粗末かな？」

「申し訳ありません、陛下。ボクが不見識でした…」

すっかり顔色を失ってしまったジルヴァは俯き、唇を噛み締めている。己の至らなさを悔やんでいる…のだと思いたい。恥をかかせてしまったことは、あとで謝っておこう。

しかし、今はそれよりも伝えなければならぬことのほうがある。

「こんな話をしてしまったものだから、少し食生活を見直してみようとか、節制してみようなんてみんなは思ったかもしれないけど、それは僕が許さないよ」

僕は少し表情を険しくする。俯いていた皆が、その言葉に顔を拳げ”意義有り”と無言ながらに訴えてくる。

それはそうだろう。今の食生活がどれほどの浪費であるかということを知らされた、理想に燃える彼らなら、現状を変えようと思うだろう。その気持ちはとても大切で尊い。しかし、だ。

「物の流れから、ボクたちのやろうとしていることが露呈する可能性がある、からですよね」

「その通りだよ、ジルヴァ。戦だってそうなものな？」

少し知恵の廻る奴がいれば、気付かれかねない。

なんだ、ジルヴァのやつ。全然平気じゃないか。シヨックを受けているようだったから心配したが、今はもうしっかりと揺らぎない目で僕を見返してくる。

「はい。炊煙の量や、運搬する物資の量で敵方の行動を予測することがあります」

「うん。ジルヴァが言ったとおり。そんな風に僕らの行動を読まれないようにいきなり搬入する量は変えられない。けど」

にやり、と僕は悪者っぽく気取った笑みを浮かべる。

「料理人ごと後宮に抱き込んで、いろいろやってみることはできるよ」

…多分、この言葉の意味を理解できたものはこの場にはいない。僕自身、今は結構勢いで喋っている。突飛な思い付きだ。

「食べる分だけ作って、他は保存できるように加工する。他にも思い付きを実行してみればいい」

どうよ？と皆に笑いかける。まったく幼稚な発想ではあるけどやるだけの価値はあると思う。食品保存の 生命の保持に関わる研究だ。

イマイチ浮かない顔をしている奴もいれば、我が意を得たりとばかりに頷くものもいる。しかし、反対の声は上がらない という

わけでもなかった。

「それは本当に危険はないの？ 食べ物が大切なことはよく理解できるけど、計画を危険に晒してまでやるべきことではないわ。第一、料理人を抱き込む理由がないわ」

硬い声音で異論を唱えたのは、少女貴族レヴェツカだ。…下の名前まではちよつと覚えていない。小麦色の髪を縦巻きロールにしたお嬢様。気位の高さは一級品の典型的な貴族タイプ。考え方は極めて保守的だが、それなりに物の道理を弁えていて、きちんと考える頭を持っている。誠心誠意、理詰めでの説得を行った結果、僕の計画に乗ってくれた少女だ。僕を”王と認めない”発言が印象に残っている。

「全くなくはない。けど、利点と理由なら思いつくよ」

「ふうん？ お聞かせ願おうかしら？」

髪をふあさつとかきあげてお嬢様はのたまう。…しかし、生粋の貴族ともなればそんな格好も似合ったりするものだね。などとうでもいいことを考えながらも、口を開く。

「まずひとつ目。今後展開する予定の組織作りの贈与品としての価値。外から入ってくるものが他にないからね、誰かの協力を得るには贈り物が一番だろう？ それとふたつ目。僕が元の世界での味を恋しがっていると我俣を言っているとか、この前倒れたのは料理のせいだとか…色々でっち上げられるよ」

「……よくもまあ、そのような狡い知恵ばかり回りますね」

レヴェツカは懐から取り出した扇で口元を隠しながら、軽蔑の視線を送ってくる。

しかし、反論がないところを見ると納得はしてくれたいらしい。

「ご理解頂けたようだなにより。」

ふう、話したらお腹が空いたな。リディア、お昼にしよう」

「え？ あ、はいっ」

聞き入っていたのか、ぼうつとしていたのか、リディアがはつと我に帰って返事をする。

「折角だ。みんなで分けて食べよう。これだけの人数だと、一切れずつになるかもしれんが　リディアの料理は美味いぞ？」

言って、リディアの持つバスケットからオープンサンドを取り出し、配っていく。

「ほら、ジルヴァとレベツカ。二人で分けるといい、僕はリディアと分けるから」

「あ、はっ。頂戴します」

リディアお手製のオープンサンドはレタスらしい野菜や、トマト。そして鶏を裂いた肉を挟んだあっさりとしたもの。今までこの手の食べ方をするものが出てきたことはなかったから、皆がどうしたものかとこちらを見ている。：食べ方のレクチャーまで必要なのだからか。

食パンよりは遥かに硬いパンだけど、半分がちぎって片方はリディアに渡す。

「いただきます」

オープンサンドに片手で一礼して直接齧りつく。

日本人好みの柔らかいパンではないが、風味というか味は断然こちらのパンのほうが良い。野菜と鶏肉も、ドレッシングのようなものがかかっていて上手く間を取り持っている。リディアがこちらを不安そうに見ている。

「ん。美味しい」

言ってみると、顔を綻ばせてリディアも「いただきます」と僕の真似をしてオープンサンドに齧りつく。

もぐもぐと咀嚼して、飲み込んで一言。

「美味しいですね」

それを見て、各々オープンサンドに一礼してから食べ始める。食べ方もそれぞれで大口でかぶりつくやつもいれば、ちまちまと食べているやつもいる。そして神妙に頷いたり、驚いたり。見ていてなかなか面白い。

「そういえば、ミノルさま。さっきの『いただきます』っていうのはなんですか？」

ちまつ、とオープンサンドを齧りながらリディアが僕に聞いてくる。両手でそれを口元に持っていく様はリスなんかを連想させて可愛い。

「ボクもそれは気になりますね。どういう意味なのですか？」

さつさと食べ終えてしまったジルヴァもそれに混じった。
僕は最後の一口を飲み込んで説明してやる。

「んぐつ。：簡単に言えば、食事前のお祈りみたいなもんだよ。今日食べるものがあることに感謝し、それを育んでくれた大地に感謝をし、それを作ってくれた人々に感謝をし、またその命を以って僕たちが生き永らえることに感謝をし、尊敬の念を『いただきます』という一言に籠めるんだ。そして食べ終わったら、お礼の意味も込めて『ごちそうさまでした』と言う」

多少の脚色はあるけれど、間違ってはいまい。

しかし、この言葉は僕が思う以上に彼らの言葉に響いたらしく神妙な面持ちで彼らは姿勢を正し、なにか請うような目で僕を見ていた。

「どうやら、僕の言いたかったことは最後の最後で理解してもらえたらしい。」

ならば、期待に応えるのが筋というもの。

僕は両手を合わせて合掌。そして一礼する。

「ごちそうさまでした」

「ごちそうさまでした！」

後に、『後宮食革命』と呼ばれるようになるこの事件以来。暫時食事は粗食化が進むようになり後宮において余剰食糧の大規模な備蓄が開始される。僕が大仰に伝えた食糧供給の現状は真剣に受け止められ、特に敬遠されるようになった肉類についてはその保存方法

について研究されることになった。

カロリー 熱量的に見るのであれば結果として待遇は悪化したことになるが、それはあくまでも無駄の排除、効率化により廃棄がなくなったことによるスマート化であり、意義・異論などは全くでなかった。

それどころか、油脂類を多用する食事を改めた料理がリディアたちメイド衆から発案されるにいたり後宮の健康が増進されるという副次効果までもたらすことになった。

” 高級で手の込んだ料理は確かに美味いが、健康と社会に害するところ大である ”

とは、後々にまで語られることになる文句の一説である。

二十一話 待遇改善要求？（後書き）

コラム：話中の肉の生産に關してですが 牛肉 1 k g に穀物 1 1 k g。豚肉 1 k g に穀物 7 k g。鶏肉 1 k g に穀物 4 k g。鶏卵 1 k g に穀物 3 k g だそうです。曰く、週に何度か肉食を減らし、その分生産量を抑え穀物を全世界に分配すれば地球上の飢餓は解決されるそうです。… 実際には飼料穀物として人間が食べるように作られていない穀物が使われていたりもするので一概に正しくはないですが、それくらい贅沢ですよ、というお話。

ちなみに、中世頃にはそのような飼育が行われていたか作者は知りませんが（無責任）大体が放牧によるものであると思われまのでこんなに食べません（笑）

妙に真面目で、かつ何が言いたいのがよく分からなくて申し訳ありません（苦笑）

誤字・脱字、ご意見・ご感想などお待ちしております。

二十二話 中間報告

後宮の安楽室で四人が揃うのは久方ぶりのことだった。

ストラトは王城内に止まらず王都全体の情報収集と、表に出てこない僕の代わりの御用伺いなどの応対に謀殺されていたし、国内外交官のラフィリアもまた非公式ながら各種族の集落を文字通り飛び回って実態調査を行ってくれている。そして、僕とリディアも緩急こそあれ己の役割をこなすべく狭くも広い後宮を右往左往している。そんな事情もあってこの安楽室での会談は、僕とリディアともう一人、というのが多かったのだが今日は珍しくタイミングが合って全員での報告会となった。

久しぶりにフルセットでの活躍となる白磁のティーセットをリディアが運んでくる。

ポットの中身はもちろん紅茶　　というか、この国ではお茶といえば紅茶。彼女の入れてくれるお茶を毎日のように飲んでいるが未だに味の良し悪しは分からない。

貴族の嗜みと、協力者の女性陣にはよく付き合わされて銘柄当てなどをやらされるが、これっぽっちも当たりやしない。

ラフィリアもストラトも美味しそうに飲んでいるから味は確かなのだろうけれど　　やはり、日本人は緑茶だろう、などと言い訳がましいことを思ってみたりもする。…確か、紅茶も烏龍茶も緑茶も原料は同じで製造の過程が異なるだけであつたはずだから作ることは可能だろう。なにもかもが上手く行ったら製造を依頼してみてもいいかもしれない。米も醤油も味噌も。リディアがいろいろと工夫して食事を用意してくれるのでこちらの料理に飽きるということはないだろうけれど、そういうのとは別に故郷の味というのは恋しく

なるものなのだ。

そうやってしばし。お茶を楽しんだあとで、僕は口を開く。皆、それぞれに忙しい身　時間は貴重なのだ。

「それでは報告を」

なるだけ、重々しく聞こえるように言ってみる。こうしていると悪秘密結社の親玉気分が味わえて少し気にいっている。

「それじゃ、まずはわたしからやらせてもらおうわ」

ラフィリアはお茶請けのビスケットをひとつ口に放り込んで立ち上がる。ちなみに、ビスケットとはいうがその実、カンパンである。食料備蓄計画の一環として試作されたものだ。少し穀物臭い気もするが、そこはそれ小麦の味である。僕も食べたがなかなか悪くない。「エルフたちは生活物資を、フェザーfolkたちは薬草なんかの医薬品を、人魚たちは魚介を中心に食料品を教会を通して援助しているわ。彼らも豊かな生活をしているわけじゃないから、かなりの無理をしてくれていることになるわね」

「ドワーフたちは　ほとんど街か」

「ええ。彼らは元から住んでいるし、鉾山が主だから」

「で、その援助物資が教会を通して公平に分配している、ってわけか」

「ドワーフたちを別にしても、彼らはこの国の人々にとっても恩義を感じているから…」

そう言うラフィリアの表情がふっと和らぐ。

そう。彼らは迫害を乗り越えてこの地にやってきて、迎え入れられ安住の地を得た。…それは彼らにとつて信じがたい幸運だったに違いない。大地の果てで、暖かく迎えられるなどは。

”情けは人の為ならず”

という言葉があるが、まさにこのことだろう。

人の恩は巡り巡つていつかは自分に還ってくる、だからこそ情けを施すのだと。

「今のところ、それ以上の問題はないみたいだけど、街に出ている人たちが引き上げてきたりはしているみたい」

わたしからは、こんなところ。とラフィリアは再びソファに身を沈めて、ビسケット改めカンパンに手を伸ばす。

「今のところは問題なし…か。んじゃ、今度見回りに出るときは土産を持って行ってやってくれ。倉庫にあるの、適当に持って行っていいから」

「倉庫？」

きよとん、とした顔でラフィリアは僕を見るが、その返事は紅茶のお替りを用意しているリディアが請負った。

「はい。最近になって食事内容を見直しまして、そこで発生した余剰食糧を保存食に加工して倉庫　空き部屋にしまつてあるんです」

「そういうこと。持てるだけ持って行つていいからな」

「いまいち事情は飲み込めないけど、了解」

うん、と僕は一つ頷いてストラトを見る。侍従長でもある彼はそれだけで言わんとすることを察してくれる。

「では、次は私からご報告をさせていただきます。

現在、主要貴族たちの力関係などにつきましては調査中ですが、マース伯、ゴード伯、ツェヴェル伯らを頂点としていることは間違いないと思います。元締めがこの三貴族で他は取り巻き、その他大勢といったところでしょうか。詳細につきましては調査が完了次第、ご報告をさせていただきます」

「奴らの資産調査は？」

「そちらはほぼ掴めております。ほとんどの財貨は三貴族に集中しており、貴族資産の約半分が彼らの所有か、その傘下ですな」

「ちなみに、額にするとどれくらい？」

「…記録に残っている正式なものだけで、我が国の年間予算の三倍程度にはなるかと…」

ストラトはこの質問を予見していたのか、表情ひとつ変えずにあつさりと言つてのけた。そんな侍従長とは対照的に僕らといえば茫然自失だ。僕なんか顎を落としたかと思うほどに口をあぐりと開けているし、リディアはラフィリアのカップにお替りを注ごうとして硬直。ラフィリアはカンパンを取り落として目を点にしている。それからすれば、二人に比べれば僕なんかはまだ自分を保っていた

方かもしれない。

しかし。

しかしである。

いくらなんでも溜め込みすぎではなからうか。

仮に物的資産　建物などの不動産がその資産の半分を占めるとしても優に国家予算以上の資金を溜め込んでいるということだ。あの程度私腹を肥やして丸々と太っているのだから、とは思っていたがこれほどまでとは予想していなかった。

「我が国には、豊かな鉱脈がありますから……。それに、他国との交易も大規模に行えない土地柄。貴金属の流出というのがほとんどないのでですよ」

「あー……」

なんとなく、納得できる理由ではある。陸路が使えない以上、海路での貿易が主流になるが船舶がその交易を担う。しかし、船である以上輸送できる重さや体積には自ずと限界がある。交易の対価を金で支払うにしても船の容量以上の買物物はできないし、なにより金は重い。それならば、同じくらい価値のある宝石類で支払うのが合理的というもの

「ご明察でございます、陛下。しかし、考えていることがただ漏れです」

「あ、ごめん」

ストラトに鋭く指摘され、はっと我に帰る。先日リディアにも注意されたばかりだが、どうにも考え込む癖というヤツが抜けない。しかし、今回ばかりは悪いことでもなかったようにリディアとラフ

イリアが驚いたように僕を見ている。

「……ミノルさま、凄いです」

「あんだ、頭だけは回るのね……」

ラフィリアのそれは贅辞ではないにしても、リディアが尊敬の眼差し（多分）で見ているのはちよっと嬉しい。

「つか、それだけ聞くと凄く恵まれた国じゃないのか、グラーフ王国」

豊かな鉱脈があり、豊かな森林資源があり、豊かな水があり、豊かな土地があり、豊かな海がある。おまけに外敵がいないときたものだ。こんな地上の楽園があれば、そりゃあ国民も純朴に育つだろうし、貴族だって腐敗する。ある意味、当然の帰結だといえる。

「それ故に、建国以来ずっと狙われております。堅牢極まりない天然の要害に阻まれ一度たりとも侵攻は許しておりませんが」

「だろうな……。龍が守っていようが、潮の流れが難しかろうがこれだけ豊かな国だ。大きな犠牲を支払ってでも手に入れる価値はある……」

改めて思う。

この国はヤバイ。

政治的にもヤバイが、それと同じかそれ以上に外敵もヤバイ。ましてや、今は国内がボロボロだ。そんなところに、外国の軍隊の一群でも辿り着いたら即亡国なんてこともありえる。とそこまで思いを到らせて、思考を放棄する。今考えるべきことではない。これ

は伝えてはならないことだ。僕たちにそれに対処する能力はないのだから。

強張りそうな顔を、真剣そうな表情で誤魔化してストラトに問う。いろいろ考えすぎな僕とは違って優雅な仕草で紅茶を味わっている彼にだ。

「計画に気付かれた様子は」

これには流石のストラトも真面目な顔をする。

「今のところ、そのような徴候はございません。陛下の出された鼻薬が効いているのでしよう」

「…ならいいんだがな。もうひとつ、念を入れて薬を処方しておくか。また人を集めてもらうことになるが」

「かしこまりましたございます」

女性二人がいぶかしげな目で僕らを見ているのをなんでもないと笑って誤魔化す。…だって、隠語とかって格好良いじゃない。

「さて。次は僕だけど、順調に進んでいると思うよ。考え方の矯正からだから、時間はかかるけどね。来年くらいには市民組織を作ってもらうために野に下ってもらうつもりだ」

「来年……」

その一言には皆が暗い顔をする。

しかし、こればかりはどうしようもないことだ。知識だけを植えるのであれば一ヶ月もあればなんとかなるが、革命を確実に遂

行するためには精神をしつかりと確立しなければならない。理念のない蜂起はただの暴走でしかなく弾圧の口実を与えるだけに終わってしまう。それだけではない。規律のない集団は容易く暴徒化し、新たな不幸と禍根の種を残すことになる。負の感情のままに暴発してしまえば、最早山賊と大差ない存在にまで落ちぶれてしまう。それを抑制し、統制できる人物を育てるのは容易ではない。もちろん一朝一夕でできあがりもしない。

「来年だ」

どうしようもなく遠い。明日をも知れない命なのに、来年を待たなければならぬ。そのことが、重く心にのしかかることだろう。

「なに、その間にもいろいろと打つ手はあるさ」

重苦しくなってしまった空気を吹き払うように僕は勤めて明るく言った。

僕の身の回りの状況は改善したけれど、グラフ王国の状況は全くと言ってよいほどに改善していない。いまだ最悪のまま。

それでも。

僕はやるつもりだ。

他でもない、僕自身のために。

二十二話 中間報告（後書き）

なかなか話が進みませんね。

しかし、秘密裏に革命を起こそうと思ったたりすればそれくらいでは足りないだろうと思います。というか、人生を賭けてやる位の心意気が必要でしょう。

誤字・脱字、ご意見・ご感想などお待ちしております。

二十三話 激情

刃物を突きつけられる、という経験は今までにない。

世界でも有数の治安の良い国である日本に生まれ育った僕だから、それは当然でもあるのだけど。それ自体サスペンスやアクションものの映画や小説なんかでは一度はお目にかかるシーンだ。しかし、自分が体験するのと客観的に見るのは根本的に違う。

実際には、緊張やら混乱やらで首筋に当たっているであろう硬質なか何か 恐らくは刃物 が冷たいとか、冷や汗が流れるなんてそんなことを感じられる余裕などありはしない。声一つ上げられず、震えているのが精々だ。

本なら国で一番安全なはずの後宮の最奥の寝室で僕は命の危機に瀕していた。うっかりミスで計画がバレたとか、疎まれて謀殺されかかっている…なんてものじゃなく極めて直接的に大ピンチだ。

時間帯は真夜中。

泣く子も眠る丑三つ時。

革命教育と身体の鍛錬。そしてリディアの語学教室を終えて疲れた身体をベッドにもぐりこませ、翌朝には可愛いメイドさんが優しく起こしてくれることが確定しているはずの未来に、こいつは割り込みを掛けてきたのだ。

年齢不詳。性別不肖。姿形不肖。凶器不肖。侵入経路不肖。ないない尽くしのアンノンウン。ついでに、寝起きにこの状況に陥ったために何がどうなっているのかも分からない。仮にこいつを暗殺者と呼ぶことにしてみるが、それも無意味だろう。とりあえずは殺されても堪らない。反撃の意思がないことを示すためにホールドアップ。

「？」

何か言っている。

ぼそぼそと聞き取りにくいのが、なにかを言っている。

しかし、今現在僕は意思疎通のペンダントをつけていないために理解不能。もう少し落ち着いた状況ではっきり喋ってくれれば単語の意味くらいは拾えるのだが、思考がほとんど回らない僕には無理な話。

なんだか冷静に状況を分析しているようにも見えるかもしれないが、突きつけられて鋭い恐怖が僕の正常な思考を奪っている。うつ伏せなんて妙な寝方をしていたのも問題だろう。恐らく暗殺者は僕の背中に馬乗りになっている。せめて仰向けであれば、その姿形から何らかの情報を読み取れたかもしれないのに。

「？」

また何か言っている。

相変わらず何を言っているのかは全く不明だが、すぐに殺されるということはなさそうだ。となれば、話してみるしかない。力一杯暴れて抵抗して見せるのは最後の手段だ。…それが通用する相手かどうかはともかく。

「僕は言葉が分からないんだ」

指先で自分を指し、次いで話せないという意味を込めて手を振る。もちろんホールドアップしたまま、手首から先だけでだ。実際に僕が口にできた言葉は「僕、無理」というなんとも頼りない片言。一人称プラス否定。そんな意味の通らない内容で会話を試みる。せめて意思疎通のペンダントを身につけたいところだが…。多分、許してはくれないだろう。どんな効果があるか、分かったものではない。

それでも一縷の望みを託して、サイドテーブルの上に置いてあるペンダントを指で差して示す。

それを（ちよいちよい）僕の頭に（ちよいちよい）かけてくれ（ちよいちよい）

といった感じ。間抜けこの上ないが、どうやら意味は伝わったよううで僕の背中adenaにかが動く気配がして、ほどなく僕の首に鎖がかかる。ペンダントだ。

「これで分かるか」

くぐもった無機質な声。ぞっとするほどに感情が籠っていない、機械的な音。男とも女とも分からない。

「お蔭様で。ようやく聞こえるようになりましたよ」

暗殺者さん？ とは付け加えなかった。余計なことをして無駄に命を散らすこともない。

「貴様の真意を問い質しに来た」

「真意？」

「巷で流れる噂の真意を確認し、本当であれば殺し、そうでなければ生かせと。それが我が主からの命令だ」

噂、ねえ。

「答える。返答如何ではその首搔っ切る」

ぐっ、と首筋に押し付けられる力が増す。…なんかじんわりと

熱いような感触がするのは鋭利に過ぎる刃がその肌を傷つけているからだろうか。

…正直、超怖い。ちびつてないだろうな、僕。つか、震えを押さえ込まなければ自分で死んでしまいかねない。

「どんな噂が流れているのか、僕は知らないけどなっ…。この広いベッドに一人で寝ているのを見れば分かるだろう」

なけなしの根性を総動員して、震えを押さえ込む。

「そんなことはなんの証明にもならない。答える」

そんな無茶な、と思う。確かに証明にはならないが。僕の証言よりは説得力があると思う。

だが、無言でいればその分刃が僕の首に埋まっていく。

「ただの噂だ。実体はないよ」

「その証明は」

「明日にでも後宮を見て回れば良い。悪いことはしていないつもりだよ」

「そのようなことができるんですか?」

客観的に見て無理。…なんて言わないけど。常識的に考えても暗殺者を野放しにしておくなど許されるはずもない。

相手に話をする気はなく。証明も不可能。となれば消去法で抹殺しか残らない。

「冗談じゃない」

全くもって冗談じゃない。

そういえばすっかり警戒するのを忘れてしまっていたが、異世界召喚と国王というキーワードがくれば暗殺という危険性があるのは王道ではないか。ストラトの言うほど後宮の防備というのは厚くないのかと疑ってしまう。そのあたりの警備体制は生き残ればもう一度見直すことにして、現状を打破しなければならぬ。やっとやりたいことが見つかって、それに向けて動き始めたというのに、おいそれと殺されてやるわけにはいかない。…それに、物凄く痛そう

だ。
しかし、相互理解という道が閉ざされてしまっている以上、一方通行の抹殺しか残らない。

いや、僕にもあるか。一方通行の武器が。

あるいは届くかもしれない、この思考が。

意思疎通のペンダント。これは言葉の意味を伝えてくれるだけではない、強い感情をも伝えてくれるマジックアイテムだ。

感情を、思考をぐるぐるすると取りとめもなく垂れ流し、感情を鬱積させていく。悲しい思い出ばかりを思い出して涙を流そうとする、そんな感じにどこか似ている。ありとあらゆる思考と感情の枷を外していく。普段、知性や理性といったもので抑制している情動を引き出して作り上げる思考爆弾。わざわざ嫌な記憶ばかりを思い出してストレスを蓄積させることで意図的に感情の大爆発を引き起こす。

一見、難しそうだが僕にとってはなによりも簡単なことだ。

異世界にやってきたのが自分の意思であるにしても、不満の種がなかるうはずもない。できる限りそれらから目を逸らして見ないようにすることで、リディアのように僕を慕ってくれる人たちを落胆

そして

「あああああああああああああああああつ!!!!!!!!!!」

拳を硬く握り締め、獣の如き咆哮を上げて僕は暗殺者に向けて突撃していく。

相手が迎撃の素振りを見せても、全く怯むことはない。今の僕には目の前の暗殺者こそが全ての元凶、諸悪の根源にしか映っていない。刺し違えてでも殺す。そんな激情が僕を支配していた。

二十三話 激情（後書き）

ミノル暴発（笑）

ストレスの多そうな環境ですしね。

誤字・脱字、ご意見・ご感想などお待ちしております。

二十四話 深淵（前書き）

ついに一万ユニークに到達しました！

これも読者の皆様のおかげです！これからも鋭意努力して参りますのでよろしくお願ひします！

二十四話 深淵

寝室の中は様々な負の感情、混沌とした思考が渦巻く魔境と化している。

その発生源たる僕は理性を失い、暗殺者は拒絶のしようもなく入り込んでくる激情に顔をしかめていることだろう。

総大理石で作られた寝室は広いが、精々10m四方の広さしかなく、その中央にはキングサイズのベッドが鎮座しているために空間的な余裕はさほどない。

その狭い二人の距離を詰めるべく、僕は駆ける。薄暗い寝室のなか、黒装束に覆面という影に溶け込むような衣装のその鼻っ面に拳を叩き込む、そのことしか僕の頭にはない。

そんな僕に応じるように暗殺者は僕に黒塗りの刃を突き出してくるが、あまりにも短い。カッターナイフ程度の長さしかないそんな刃物では怪我はしても余程のことがなければ致命傷にはならない。そのナイフの軌道上に左掌を突き出し、突き刺すことで刃を封じれば、目標はもう目の前。勢いを殺すことなく突き出した右拳はしかし、虚しく空を切る。が、それでもまだ終わりではないとばかりに全身で体当たり。二人して床に転がる。

子供の喧嘩とばかりに相手に組み付いて離すまいとするが、そこはそれ暗殺者とまともな喧嘩経験もない僕との差が明確に現れる。

思考爆弾の効果は永続ではない。僕が理性を手放し、向けられる感情が殺意・害意に収束してゆけばそれはただの殺気と大きく変わらない。そしてそれは、暗殺者にとってはある意味慣れ親しんだ感覚。ぶつけられた感情の残滓こそ残ってはいても、実力が違う。

転がるうちに背中を取られ、袖口から取り出した細い糸のようなものが僕の首にかかる。それを防ぐ術は僕にはなく、糸は絞られる。

「ひゅ……あ……っ」

気道閉塞。

頸部大動脈圧迫による脳への血流阻害。

僕の視界は急激に暗くなり、次いで白く染まった。

あつけないことに、ただそれだけ。それこそ、苦しむ間もなく僕は死を迎えるのだろう。

それが僕の最後の記憶だった。

* * *

ゆさゆさと身体を揺らされ、柔らかな声音が僕の耳朵を打つ。

「ミノルさん、朝ですよ。起きてください」

「ん……」

リディアが僕を呼んでいる。

つまりは朝が来た、ということだ。

後宮では僕が一番最後に目覚める。というのも、この世界の皆に比べて貧弱な僕はしっかりと休養を取らせなければまた倒れるかもしれないと、心配されているためと、寝起きだけはいいためにゆっくり眠ることが許されているというのが実情だ。

いつもなら、リディアに声を呼ばれるだけではちっと目が開くのだが…今日はたったそれだけの動作が億劫で仕方がない。酷い虚脱感と疲労感　そして、激痛。

「つう……」

思わず口から漏れる呻きも消え入らなばかりの小さなものしか出ない。

「ミノルさん……」

霞む視界の向こうには、青い瞳に涙を一杯に溜めたりディア。カチューシャはなく、前髪も左右に分けてその双眸を僕に晒している。…その涙を拭ってやりたいとは思ったが、腕が上がらない。そして何より、彼女の涙が僕の身に降りかかった事実を肯定していた。

「……夢じゃなかったか」

痛むのは左手、そして首。どこか虚ろな記憶の中で負傷した部位と一致する。

そこから導かれる答えは暗殺者と一悶着やらかしたのは確かだということ。そして僕が生きているということは誰かが僕を助けてくれたということだ。

「リディア、何が起こったか把握してる？」

「…はい。ストラトさまから、ミノルさんにお伝えするようにと、伝言を言付かっております」

「聞くよ」

「暗殺者は捕縛したのち、無力化。ミノルさんの回復を待って煮るなり焼くなり好きにするように、と」

そう、リディアが強い声こわで教えてくれる。

…助けてくれたのはストラトだったか。高位の魔術師でもある彼だからこそ、僕は助かったのだろう。ストラトが戦士であったなら、助けられるまでに僕が死んでいる。

そう、首を絞められて死んでいる。

「…っ！」

そう思うだけで息が苦しくなったような錯覚を覚える。右手を首元にやって、なにも絡まっていけないのを確認する。そこには包帯が巻かれている…それだけのことなのに酷く気に障る。

重い腕を気力で動かして、包帯を塗り取るうとする。爪を立てて、剥がそうとする。

「ミノルさん」

剥がれない。

気持ち悪い。

息苦しい。

こうなったら痛む左手を使っても

「ミノルさん！！」

声と共にベッド脇にいたりディアが、その身体ごと腕に抱きついて僕を止める。

「いけません…。ミノルさんは怪我をなさっているんです…そのよ
うなことをしては」

でも、そんな彼女の言葉も僕の耳には届かない。

ただ気持ち悪い。ただ苦しい。

どうしてもそれを剥がさなければならぬ。

リディアに抱きつかれている右腕はダメだ。左手は酷く痛むが、それでも不快の元を取り除くためならば大したことはない。ずる、と引きずるように左腕を持ち上げていく。

「ミノル…さん…」

気の抜けたような…呆然とした声でリディアが呟く。

左手がようやく首にまで届く。右手の拘束も緩んでいる。外せる。この忌わしいモノを。

でも、その両手は包帯に届くことはなく、厚手の布地に触れるだけに終わった。

リディアが、僕の頭を抱きかかえるようにして、僕の凶行を阻んでいた。

震える腕で、声で、全身で 守ってくれていた。

これ以上僕が傷つかないように。

「大丈夫、大丈夫ですから。ここにはミノルさんを傷つけようとする人なんか誰もいません。大丈夫ですから…」

リディアの熱が伝わる。

優しい、においがする。

恐慌に陥っていた精神が静まってくる。

痛みでもなんでもいい、恐怖から逃れたかった。

あまりにも直接的な死の臭いに。

あまりにも無意味な死に様に。

あまりにも呆気なく訪れる死に。

僕は怯えていたのだ。

遠い世界で語られる”死”ではなく、自分の身に降りかかった”

死”は僕には重すぎた。

事故ではなく、病気ででもない。偶発的な死ではなく、誰かが望んだ必然の死。嘆こうが叫ぼうが祈ろうが、人によって容赦なく振り下ろされる死神の鎌だ。奇跡でさえ覆すことのできない確実の”死”。

涙が零れる。

歯がガチガチと音を立て始める。

喉の奥からは心から零れ落ちた恐怖が止め処なく溢れ出ていく。

その全てを。

リディアが震えながらも受け止めていた。

二十四話 深淵（後書き）

…と、めでたいことがあった割には話の内容はダークです。

確かに、異世界召喚国王モノだと暗殺つてのは一度は通る道ですが…
…そもそも、命の危険に遭遇するという可能性の著しく低い日本人だと正直再起不能なトラウマになるんじゃないかなあ、とか思ったり。

誤字・脱字、ご意見・ご感想などお待ちしております。

感想など人目に晒すのはイヤ！という方はメールでも結構ですので
よろしく願います。

二十五話 傷跡

衝撃的な体験と、壮絶な恐怖、そして精神的な傷をなんとか押さえ込んで寝室から出れるようになるまで一週間かかった。

起こってしまったことはどうしようもない。経験してしまったものは仕方がない。結果としては酷い目に遭いはしたものの、僕は生きていると呪文かなにかのように自分に言い聞かせ。既に暗殺者は捕らえられ、後宮の魔術による警戒・防御網は召喚の巫女にして国一番の魔術師でもあるラフィリアの手によって十重二十重に張り巡らされ特に寝室周りは徹底的に防護がなされた。そこまでしてやっとなのである。

それまでの間、寝室にはリディア以外の誰とも顔を合わすことができなかった。それほどまでに僕は打ちのめされていた。

晒いたければ晒うと良い。

情弱だと臆病者と蔑まれても良い。

失望も嘲笑も甘んじて受けよう。

ほんの70年ほど前にはまだサムライと呼ばれる高潔な精神性を有した日本人が居たと言うが、そんな気高い血がこの身にも流れているとは到底思えない。年端の行かない子供のようにリディアに縋り付いて震えて過ごした一週間だ。地獄のような時間だった、とそう安直な表現しかできないほどに。理性ではなく感情が、気持ちではなく身体がついてこない。見事に対立する自分自身をどうにか宥めずかしてやっと今に到る。それも騙し騙しでしかなく、気を抜けば立っていることすらままならなくなるし、壊れてしまった僕の中の何かを肩代わりしてくれているリディアが居なくなってしまうたらどうなるのか。想像もしたくない。

しかし、そんな情態をおしても尚やらなければならぬことが

あつた。

* * *

僕は腕どころか指一本動かせないようにガチガチに拘束され、自害もできないように口の中に布を突っ込まれた上に猿轡という状態で地下牢に転がされていた暗殺者と鉄の檻越しに対面していた。

僕を襲ったときにはしていた覆面は外されて、柔らかな色合いの栗色の髪と同じ色の瞳が僕を見上げていた。

無論一人ではない。リディアとストラト、そしてジルヴァが一緒だった。

「やあ、しばらく振り」

僕は軽く笑みを浮かべて、素顔を晒した暗殺者に声をかける。

…正直、それだけで僕はもう平静を失いかけている。恐慌一歩手前。首の傷がしくしくと痛むのが、精神負荷に拍車を掛けている。そんな僕の変調を察したのか、リディアがずっと僕に寄り添ってくれる。…本当に代え難いメイドさんだと思う。こんな駄目な主に幻滅することもなければ失望することもなく傍に居てくれる。僕には勿体無い女性ひとだと思う。…変な意味じゃないぞ？

「晒うなよ？ アンタのお蔭でこの様さ。一週間も放つたらかしにしてたのも、すっかりビビっちゃまってたせいさ」

コレと、コレな。と僕は左手と首を示す。…左手は自爆のような気もするが、よく覚えていないし。等と軽く言い訳を挟みつつ。

「で、個人的にはもう二度と会いたくなかったんだが、確かめてお

きたいことがあってね」

なかなか整った顔立ちで、街に紛れ込みでもすればなかなか人気が出そうだ。しかし、僕を見る目が頂けない。なんの感情も籠らない無機質なガラスを思わせる、どこまでも透明な 見ているように見えていないこの目が。

「この前は成り行きでああなってしまったけど、ようやく話せる。…僕としては話したくないんだけど、どうしても必要なことでね」

ふう、とひとつ息を入れて言葉を継ぐ。

「まずひとつ。主の所に帰って伝える。噂はデマで、王は国をひっくり返すつもりだと。」

ふたつ。雇われか、組織の犬かは知らないが上役に伝える。仕事を依頼したいから人を遣せ、と。お前じゃないヤツを、だ」

「陛下」

脇で控えているストラトが声を上げる。無論、咎める声だ。

「言いたいことはわかるつもりだよ、ストラト。でも、コイツらは使える。隠密組織なんてあるとは思ってなかったけど、あるなら使いたい」

「ストラト侍従長が言いたいのはそのうちではないでしょう」

同じく脇で控えていたジルヴァも混じる。左右からサラウンドで抗議されるってのはあんまし言い気分でもないが…。

「多分、依頼主は辺境領主あたりじゃないかと踏んでるんだ。」巷で流れる噂の真意を確認し、本当であれば殺しそうでなければ生かせ」というのが命令らしいから、まあ間違いないだろう。腐敗貴族側の依頼ではないはずだ」

断定はできないけど。

「それに……こういう奴等の力が必要なんだよ。裏で情報を拾ってもらったり流してもらったりな」

「「……………」」

二人が納得していないであろうことは、なんとなく分かる。

しかしどうしても必要なのだ。裏事情に通じた人間が。僕たちの動きが活発になればなるほど、露呈の危険は大きくなる。それを誤魔化すために異世界の技術を流してはいるが、完全ではない。情報操作のノウハウを持ち、またそれを実行しうる協力者がどうしても必要なのだ。

「綺麗な革命なんて、あるわけがないんだから」

とことん姑息で卑怯に立ち回るか、正々堂々戦って夥しい血を流すかという選択。僕は迷わず前者を選ぶ。

そんな僕を見つめ続ける目は相変わらずガラス玉のようで、なんの色も浮かべていないが、確かに伝わってはいるようだ。

「まあ、そんなわけだからアンタの身の安全は保障するよ。大切なメッセンジャーだからね。扱いが手荒になったのは、自業自得ってことで了解してくれ」

言つて、ついと視線を逸らし背中を向ける。本音を言えば、無力化されているとはいえ暗殺者に背中を見せるのはとても怖い。いや、暗殺者でなくてもか。根本的なところで僕は様々なものに怯えてしまっている。だが、これからやっていくことを思えばそんな甘えたことを言っていられない。一種の荒療治だ。

僕の後が続くように、三人が地下牢を出る。

地上に繋がる階段を上れば後宮のほぼ中央：ちよつとした公園程度の広さを持つ庭園に出る。初めて見たときは酷い贅沢だと思つたものだが、後宮から出ることのできなくなった皆からは憩いの場として親しまれている。

そこが限界だった。

かくん、となんの予兆もなく膝が落ちた。

たつた数分の邂逅が、これほど重く押し掛かるとは思わなかつた。

どうやら、僕はとんでもない傷を負つてしまつたらしい。トラウマなんて言葉で簡単に片付けてしまいたくはないけれど、他に言いようもない。

誰が信用できるのかも全くわからない状況に置かれて、ようやく安定してきたかと思つた瞬間に暗殺未遂。溜まっていたストレスが噴出してみれば対人恐怖症　はちよつと違うけれど。どちらにしても、これは洒落にならない。物語の主人公たちはこんな体験をどうやったら笑つて見過ごせるのだろうか。余程肝が据わっているのか、懐が深いのか：はたまた頭のネジが飛んでいるのか。僕の意見としては最後の可能性を支持したいところだ。

「ミノルさま」

リディアが肩を貸そうとするのを制止して、なんとか身体に喝を入れる。

まだ始まつてすらいなのに、こんなところでいつまでも膝を屈してはいられない。

せめて、精神しんしんくらいは強くなりたいものだ…

心からそう思った。

二十五話 傷跡（後書き）

誤字・脱字、ご意見・ご感想などお待ちしております。

感想など人目に晒すのはイヤ！という方はメールでも結構ですので
よろしく願います。

二十六話 疑念（前書き）

文章の一部に誤解を生じるのでは？とのご指摘を受けましたので、その部分について加筆修正を行いました。

二十六話 疑念

どうにか泣き言ばかりの身体を叱咤してプライベート区画である安楽室まで戻り、ソファに身を投げる。リディアはストラトとジルヴァに一言断ってお茶を用意しに安楽室を出て行く。

ぱたん。

…鳴るはずのない扉の閉まる音が聞こえるほどの静寂。

殊、僕の素行　　というのには聞こえが悪いが、作法などには五月蠅い二人が僕のだらしない様を見て黙っているなどありえないことだ。ストラトからは遠まわしな嫌味が、ジルヴァからは直接的な叱責が飛ぶのが常で、それは僕が本調子であろうがなかるうが容赦はない。しかし、その二人が部屋に居ながら何も言わないというのは他に言いたいことのほうが大切だからだろう。現にジルヴァは今にも踊りかからんばかりの形相だ。ストラトは年の功か、なんとか表情にこそ出していないが目口ほどに物を言っている。

「……言いたいことがあるなら言っていよ。だからそんな目で僕を見るな」

…正直、ちょっと怖い。感性が変わってしまったのか、それとも別の何かか。恐らく、至極真つ当な正義感に燃えているだろうジルヴァがなにか別のことに憤りを感じているように思えてしまつて恐ろしい。普段通り、筋骨隆々といった感じの立派な体軀を執事服に押し込めたかのようなストラトもどこか僕を見る目が違つて見える。非難されているわけでもない、ただ釈明を求めているだけのはずな

のに、空恐ろしいことを考えているように見えてしまう。…ましてや、今この場にリディアはいない。継る手も、庇ってくれる者もない。

重傷だ。頼るべき仲間を信じられない。彼らの目を見るのが怖いなどとは。

「では陛下。言わせて頂きますが、あまりにも軽率です！ 革命のためにありとあらゆる手段を講じるのはまだ理解できますが、アレはなんですか！？ これまで入念に隠してきたのに、帰って伝える！？ 貴方は馬鹿ですか、どこにあの暗殺者の雇い主が味方である根拠があるのでしょうか！」

…ああ、なにもやり方に文句があつたわけではないのか。ジルヴァが激昂しているのは僕の軽率な発言に、だ。暗殺者を主の下へ歸し、わざわざ秘匿してきた革命について明かしてしまったことだ。無論、身の安全を保障する、と言つた約束を反故にして抹殺してしまえば秘密は漏れない。約束を一瞬で破ってしまったという罪悪感だけ。これまで通り…とはいかないが、秘密が露呈することに比べれば安い代償だ。暗殺未遂というだけで理由も十分すぎるほど。…そのつもりはないけれど。

「一応、根拠がないわけじゃない。腐敗貴族たちは今のところ僕を殺すメリットはないよ。僕は不正腐敗の親玉で、今の生活が苦しいのは僕が豪華絢爛な生活をするために貴族たちは過剰に税を取り立てる。それに異世界の技術を僕から引き出せれば凄利益になる…。そしてなにより、彼らならそんな面倒な手段を採らなくても、もっと真つ当な大義名分があるだろう？ 後宮に美男美女を集めて淫蕩三昧。諸悪の根源として打ち倒すには十分すぎる理由だし、なににより暴虐の王を倒した貴族たちは救国の英雄。ちよつと税を下げた適当な理由付けをしてやれば正当に暴利を貪れる」

「なるほど、陛下の仰りようも確かですが、それは我々として重々承知していること。ジルヴァが問うているのは、地方領主だと断ずる根拠です」

へえ、ストラトはジルヴァのことを呼び捨てなんだな、なんてストラトの渋い声を聞きながら思う。まあ、父親であるヴェルドとも親密な仲であるらしいと話に聴いた覚えがあるから、息子に近いものを感じているのかも。……いけない、思考が逃避しかけている。頭を振って意識をはつきりさせる。

「暗殺者が所持していたという、後宮勤めの腕章さ。アレで後宮の出入りを管理しているらしいじゃないか。リディアに確認してもらったが、元より後宮にあった分は全部揃っているし誰かの手引きがあったわけではない。つまり、想定外のところからの入手だ。その昔、後宮に勤めていた貴族連中なら持っている可能性があるらしい」というのも聞いている。でも、さっきも言ったように腐敗貴族連中には僕を殺すメリットがなくて、むしろデメリットの方が大きい。だから地方領主だと思った」

気持ち悪い。吐き気がする。

世界がぐるぐる回っているようで、目を開けていられない。

早くこの責め苦から開放されたいがために口を開く。

「異世界の技術は、この国の歴史を大きく変えてきたはずだ。鉄や農耕、造船・航行技術：どれだけのものかは知らないけど、地方領主たちは異世界の技術を腐敗貴族たちが握ることで不利になる。反乱を起こすにしても、なにをするにしても…余計なことをされる前に真意を確かめるか、殺すかしなければならぬ。僕は待つてすらいたよ、彼らの使者がやってくるのをね。ただ、暗殺者が予想より

馬鹿だっただけ…話が通じないとはね…。ああ、馬鹿は僕も同じか…」

「ですが、陛下。それはあまりにも短絡ではありませんか」

朦朧とし始めた意識で、彼はなにを言ったのだろうとぼんやり考える。あれ…そもそもストラトとジルヴァどっちだろう。

「二人は…味方だよな？」

もはや言葉にならない呟きとともに、僕の意識は闇に落ちた。

* * *

何事かを呟いて主君たる黒髪の青年 姿形を見るだけならば少年でしかない は力無くソファに伏した。

「陛下!!」

私が叫ぶよりも先にジルヴァが声をあげ、ソファに駆け寄る。

しかし、私はすぐには動けずに居た。この者は、本当にグラーフ王国の命運を預けるに足る人物かと今更ながらに値踏みしている。

確かに、この主は明晰な頭脳を持っている。それは、私からすれば貧弱そのものでしかない身体能力を補って余りある美点だ。カリスマも気品も持ち合わせてこそいないが、異世界の知識の詰まっている頭脳から捻り出される考えは恐ろしく切れる。

だが、しかし その思考に似合わず精神は驚くほどに脆弱だ。

ミノル・キリシマは、王の器ではない。

それはストラト・ツェーリンゲンの経験からくる確信だ。

王に必要なものは明晰な頭脳でもなければ、頑健な身体でもない。決して折れることのない精神だ。決して揺らぐことのない巨石でなければならぬ。

暗殺の憂き目に遭ったことを恐れるなどは言わない。怯むなどと言わない。しかし、その程度のことでは精神を折られては絶対にならない。

だが、私はこの王に成り得ぬ若者を気に入っているのだ。王たる器にこそないが、同時に王たる全てを知っているように感じるのだ。

「ストラトさま」

「リディアか」

いつの間にかリディアが背後に立っている。思考に没頭しすぎるなど、これでは私も陛下のことをとやかく言えない。

「やはり、ミノルさまは倒れておいででしたか…」

「…なに？」

やはり、とはどういうことだ。

落胆を隠せずにいるリディアを気遣うこともせず私は問い詰めた。しかし、彼女は取り合わずに用意してきた銀盆をテーブルに置いて、熱したタオルを手にソファへ。

「ジルヴァさま、ありがとうございます。あとはわたくしが」

「え、ええ。御願います」

慌てふためいていたジルヴァは脇に退き、入れ替わったりディアは慣れた様子で陛下の顔を拭っていく。

「…っ！！」

現れたのはとても生きた人間とは思えぬ土気色をした肌。そして目元には黒々とした隈。そして紫色の唇。

「化粧か！」

ジルヴァが叫ぶ。私は叫ぶことすらできなかった。

何故気付かなかった！

力ない様子には気づいておきながら、どうしてその良すぎる顔色に気付かなかったのだ。

「わたくしはお止めしましたが、聞き入れてはくださいませでした。ミノルさまはわたくしたちが思っている以上に、弱いお方です。ですが、それもそうでしょう？」

丁寧に丁寧に、優しく優しく顔を何度も拭ってゆく。

「ミノルさまは勇者でも英雄でもない　ただの人間です」

「それがどうしたというのだ」

苛立っているのが自分でも分かる。

少し前まで面倒を見ていたはずの友人の娘が、主に仕えるように

なつてまだ幾許も立たない新米でしかないリディアに何が分かるというのだ。

「ストラトさまは、ミノルさまにあまりに多くのことを求めすぎておいでです。わたくしたちだって、ミノルさまが求められるものどれほどを持っているというのでしょうか」

”若くて美人で護衛までこなす完璧なメイドなど夢想の中にしかおりませぬぞ”

そう言つて、陛下をお諫めたのはいつのことだったか。

どれほどの情けない姿を晒しても、決して無い物ねだりだけはしてこなかった。常に足りないのは自分自身と決め付けて、誰かにそれを求めることもない。泣き言は言つても我侭は言わなかった。

”足ることを知る”人物だからこそ、気に掛けて心を砕いてきたのではないのか。

「ボクたちは甘えていたのか。求めるばかりで、なにもしてこなかった」

ジルヴァの口から漏れるのは苦りきつた独白。

頑張れ頑張れと盛んに捲くし立てた自分はどれほどのことをしてきたというのか。そう自分を責めているのか。

「ミノルさまは強いお方ではありませんが、足掻いておいでです。今このときに、強くなろうと足掻いておいでなのです」

今このときも。

化粧までして顔色を誤魔化し、平気であるかのように振舞って見せたこの青年は。

一体なにを目指しているのだろうか。

二十六話 疑念（後書き）

誤字・脱字、ご意見・ご感想などお待ちしております。

感想など人目に晒すのはイヤ！という方はメールでも結構ですので
よろしく願います。

二十七話 発起（前書き）

一部差別的な意味合いの言葉では？とのご指摘を頂戴しましたので修正しました。ありがとうございます。

二十七話 発起

後宮には動揺が走っていた。

いや、動揺などという生易しいものではない。激震だ。

誰もが大きな声で語ることはないが陛下が倒れた今、誰がこの革命騒ぎを收拾するのか誰が責任を取るのか。そんな話で持ちきりだ。しかし、そのような浮ついた話を表立ってしないだけの分別はあるのか、貴族の子弟とその従者百名以上が詰めているはずの後宮は異様な静けさを保っていた。

嫌な空気。

つい先日までの活気は鳴りを潜め、その代わりに不穏な気配が漂っていた。

ボクたちを蹴り飛ばすかのような罵り声も、一点の文句もつけようのないほど整然とした論理も、尽きることのない泉のように湧き出るアイディアも。その全てをこの場にもたらしていた人物が今はいない。たったそれだけのことで、こうも静まり返ってしまうものなのか。ボクたちが目指そうとしたものは

「ジルヴァ・ブランデン」

「レヴェツカ・マツケンゼン」

背中に向けられた呼びかけ。それに答えるボク。

振り向くまでも無く、豊かな小麦色の髪を縦に巻いた髪型が印象的な少女の姿が脳裏に浮かぶ。忘れられようはずもない。幼い頃からの仲だ。お互いの呼びかけをフルネームで行うのは、なんという

か礼儀のようなものだ。子どもの頃から、ずっと仲良くしたが年頃になるにつれ次第にそうもいかなくなる。貴族にとって婚礼は駆け引きの延長でしかない。恋愛結婚など物語の中の絵空事。妙な噂でも立とうものなら家名に傷がつきかねない。…なんて幼いながらに考えたボクたちは明確な線引きとしてそうするようになった。

「なんて顔してるのよ、アンタ」

不細工つたらないわ。なんて笑うレヴェッカには、ボクの顔は見えていないはずなのに。…いや、分かるか。最初の遣り取りだけでお互いの調子を計ることぐらいは造作もないことだ。

観念して振り返ってみれば、口ほどには笑えていないレヴェッカの姿。その口元は笑みというよりは自嘲。

「王国、滅亡前夜…そんな感じがしないかい？」

ボクはそう呟く。

白い大理石の回廊。

不気味なほどの静けさ。

中庭の木々の葉擦れの音。

そして絵になる男女が二人。

駆け落ちの算段でも始めれば立派な王侯ロマンスの出来上がり。

「そんなの、お断りですわ。まだ始まってすらいないのに止めてなるものですか」

「そうはいうけど、この調子じゃ…」

貴族然とした強気とも高慢ともとれるレヴェッカの態度はそれは心強いものだが、現状は如何ともし難い。つい先日まで共に革命の

理想を語り合った仲間さえ、今は保身の算段をしているのだ。最悪の場合、革命を密告することで自己の安全を図ろうとするものが現れないとも限らないのだ。

「この程度のことかなんだというのです。皆が馬鹿なことを考えているというのであれば、殴り倒しても目を覚ましてやればよいだけのこと。違って？」

殴り倒してでも、とは過激だ。

苦笑いが漏れる。そういえば、ボクがうじうじと悩んでいるときはいつだってレヴェツカが頬を張りにやって来たっけ。いつだって彼女の答えは単純明快。

「もとより」あの男”は私たちをアテになんかしていませんわ」

「っ！？ それはどういうことだ！？」

「使える者は一握り。他はその他大勢。実際の政治でもそうでしょうっ？」

さも当然であるかのようにさらりとレヴェツカは言う。彼女の言うことは確かに間違っではない。しかし、武人として育てられてきたボクにはおいそれと認められるはずもない。個人の武勇は確かに意味がある。しかし、どれほど鍛錬を積んだ達人でも一人で千人もの兵士を擁する軍隊とは戦えない。数はもまた力だ。

「ほんの一握りって君は言うけど、たったそれだけの人数で国が動かせるんです？」

「いいえ。実際に国を動かすとなれば数も必要でしょう。」

私が言いたいのは、あなたが”使う側”なのか”使われる側”なのか、ということですよ

頭脳となるのか、手足となるのか。

一握りの使える人間として、その他大勢を使うのか。その他大勢として使われるのか。

「ボクは」

国家の統治形式は複雑だ。真なる頭脳は国王だたひとり。しかし、その手足であるボクたちもまた頭脳でなければならず、その手足となる部下たちもまた　と幾度も繰り返す。本来、下から一つずつ上らなければならぬところを、極めて高い位置からスタートできるのが今のボクたちだ。バレれば即刻処刑というリスクを抱えることにはなるが、そこは己の才覚を遺憾なく発揮すれば、そしてその才覚が腐敗貴族連中よりも長けていけば歩の良い勝負になる。

功名心や出世欲、権利欲なんてどうでも良いと思っっているけれど、この国を変えるには権力はあつたほうが良い。

「”使う側”だ。ボクは陛下を見捨てたりはしないし、裏切りもしない」

力強く断言。特別自分を無能とも思わないし、自負や矜持もあるつもりだ。ましてや、今の後宮にボクやレヴェツカほどに骨のある若者は他にいない。陛下の意思に賛同した者ばかりが集められているが、それも様々だ。従つておけば重用されるだろうという下心のある者もいるだろうし、本当に国民のことを思つて参加した者もいるだろう。そのどれにしても、能力まで伴っているものは非常に少ないのが実情なのだ。

「なら、使う前に従えて来なさい。私はもう駒を束ねましてよ？」

切れ長の瞳が、更に細められる。ボクを値踏みしているような目だ。

”私にできて、貴方にできないことがありませんか？”

声にこそ出さないが、ボクにそういつているのだ、レヴェツカは。

「言われるまでもない。そんなことは大したことじゃない…。問題は」

伊達に陛下の補佐　という名の教育係兼お目付け役をしていたわけではない。陛下に協力してくれている人物のことは全て頭に入っているし、考え直すように説得する自信もある。そんな単純なこととも思い付かなくなるほど頭を悩ませていたのはもっと別のことだ。

「問題は？」

「指導者がいない。ボクたちが皆を引っ張っていくにしても、明確な指針を示してくださいださっていた陛下が倒れられたとあっては…」

「革命の戦術は、それこそ繊細なものだけど、別段目新しいものではなくてよ。私たちでも十分に継続できましてよ？」

もちろん、細心の注意を払って、ですけども。とレヴェツカは補足する。

「そうじゃない。このまま進めてしまった革命は、本当に国民のためになるのか？　陛下はまずボクたちに”国や貴族のために国民が

あるのではない。国民のために、国や貴族があるのだ」と仰った。その意図が分からないままに進めていいのだろうか？

多分、陛下が考えておられるのはもつと根本的に違うなにかだ。ボクたちが考え付き、できることはといえば所詮は首の挿げ替えでしかない。もちろん、成功の暁には善政を心がけるつもりだし、陛下が血迷ったのであれば命を賭けてお諫めするつもりだが

「それは…」あの男”にお出まし願うしかないのではなくて？」

頑なに”陛下”という言葉を避けるレヴェツカも、流石に思うところがあったのか眉を顰めた。懐から扇子を取り出して玩ぶ。それが物事に行き詰ったときの彼女の癖だと、ボクは知っている。

「…結局は陛下頼りなのか…」

「ちょ、ちょっと。そんなに調子が悪いんですの？」

ぱつ、と扇子を広げて表情を隠すが、うろたえているのが全然隠せていない。

「ああ、レヴェツカは知らないんだっけ」

他の誰にも漏らさないことを宣誓させて、ボクは事の経緯をレヴェツカに話した。話を聞く彼女の顔色は赤くなったり青くなったりを繰り返し、最終的には真っ赤で落ち着いた。

「なんたる情弱！ 貧弱！ 信じられませんわ！ たかだかその程度のことで！？ 甘ったれるんじゃないやありませんわよ！？ 王とも在るうものが暗殺程度でビビッってんじゃないですわよッ！？」

「ちょ、レヴェツカ落ちて着いて！」

「散々大見得を切ったくせに、なんという様ですの!？」

「声が大きいよ！」

「~~~~~ツ!!!!」

なんとか大声で陛下を罵倒するレヴェツカの口を塞がせることは成功したが、その怒りが冷めることは無くまた貴族の誇りからか地団駄を踏むこともできず 代わりに扇子を力一杯締め上げていた。

しかし、レヴェツカの叫びはボクの心中の代弁でもあった。

「言いたいことは、分かるよ。いくら召喚された王とはいえ」

あんまりだよ、とは続けられなかった。

「召喚…それですわ！」

「いや、なにが？」

「覚えておりませんか？ 歴代の召喚王は在位が極端に短いことを」

『列王記』という書物がある。

これは歴代国王の中でも国家の繁栄や発展に著しく寄与した名君のみが名を連ねることの出来る国家の記録である。『列王記』に名

を残した国王は、その生涯を永遠に讃えられるべく記録に残されるのだ。国家の体現とも言われる王侯貴族はもちろんのこと、国民にも広く知られている書物である。もちろん、生涯であるから生年から没年まで記載されているわけだが……。生年の書き込まれている王はいない。その全員が召喚王であるからだ。

建国王とも呼ばれる初代国王は、今はグラーフ王国の領土である一帯を別々に治めていた豪族たちを平定、統合しその名の通り国を立ち上げた一代の英雄である。その血筋が途絶えたあとには、二代目の召喚王が統治し、粗野であった農耕を洗練され生産性の高いものへと昇華させた。三代目の召喚王は製鉄の技術を。四代目は造船・航海技術をグラーフ王国にもたらしその名を『列王記』に残している。建国王は齢七十余りまで生きたが、他の召喚王は軒並み短い。異世界の技術をもたらしそれが根付いたのを見届けると王位を子に譲り退位している。その間、長くて二十年。

「そう、”長くて”二十年ですわ。記録によれば、召喚された当時の王は皆若い。にも拘らず二十年で退位するというのはどうしてかお分かりになって？」

「……陛下と同じなのか？」王”であることの重圧に耐えられなかった？」

「”あの男”が特別なのではなく、召喚王そのものが精神虚弱なのではなくて？」

至極大真面目に語るレヴェッカだが、話が逸れている。学院などに論文を提出すればそれなりの評価はもらえるかもしれないが、その前に不敬罪で投獄だろうか。

でも、それなら辻褃は合う。絶対の権勢を手に入れておきながら大した未練も見せずに投げ捨てるのは、権力が惜しいのではなく身

に降りかかる重圧から逃れんがためであったとしたら。

ミノルさまは勇者でも英雄でもない 　ただの人間です

平和な世界の住人であったというのなら。その精神の脆弱さは納得できるのだ。

「ともかく、陛下は臥せっておいでだ。話したとおり」

「…情弱っぷりには呆れますけれど、その根性は褒めて差し上げますわ。…まだ諦めておられないのでしょうか？」

「必死に足掻いておられるそうだ」

死相にも似た陛下の顔色と、それを労わるリディアさんの優しい微笑が思い出されて拳を握る。

陛下は戦っておられるのだ。なのにボクたちときたら

「…外に出るのが駄目というのなら、書簡は大丈夫なのかしら」

ぼつり、と。ボクの思考の隙間にレヴェツカという言葉がするっと入り込んでくる。

「書簡？」

「ええ。対面が駄目というのであれば、文字があるではないですか。侍女が常に傍に居るのなら文字の読めない”あの男”でも意味くらは解するのではありませんこと？」

「その手があったか！」

「…私、極稀にですがあなたの事が心配になりますわ…。脳味噌まで筋肉にだけはならないようにしてくださいましね？」

ボクはもうレヴェツカの言葉を半分も聞いてはいなかった。

まだ陛下から学ぶ術はある。ただこれまでのような一から十まで手取り足取り教えてもらうことはできなくなる。しかし、それは望むところだ。陛下にばかり頼ってられない。グラーフ王国はボクたちの祖国だ。ボクたちが良くしていかなければならないのだ。

「感謝する。レヴェツカ・マツケンゼン」

「どういたしまして。ジルヴァ・ブランデン」

顔を上げて、胸を張る。

実際にどうなるかは分からない。しかし、今は少しだけ見えた目標に向かって突き進むのみ。

今の後宮は箱庭だ。この中では何が起こっても外には影響しない。ならば思いっきりやってみればいい。後先を考える必要はない。ただ全力でぶつかっていけばいいだけ。

ボクとレヴェツカは別れの通過儀礼を済ませて互い違いに白い回廊を歩き出す。

兎にも角にも、まずはこの居心地の悪い空気を入れ替えるべきだろう。まだ何も始まっていないのに終わらされては堪らない。

姿勢を正して、靴音高く歩みを進めた。

二十七話 発起（後書き）

誤字・脱字、ご意見・ご感想などお待ちしております。

感想など人目に晒すのはイヤ！という方はメールでも結構ですので
よろしくお願いします。

二十八話 静養（前書き）

タイトルと中身が微妙に食い違っているかもしれません。

二十八話 静養

僕は軽い昼食の後安楽室でソファに身を沈め、リディアの淹れてくれた紅茶を傾けながら呷く。

「へえ。ジルヴァも考えるもんだなあ…。」課題を出してくれ”とはね”

静養とは名ばかりの實質引き籠もりと化している僕はリディアの読み上げてくれる書簡の内容を聞いて笑みを浮かべる。

正直なところ、いくら教育が必要とはいっても一から十まで僕が全てを教えきれるものではない。基礎となる考え方や概念を懇切丁寧に教えることはできても、実際の経験からくる理論の肉付けを行うのはジルヴァたちなのだ。平和ボケしている理屈ばかりの日本人である僕と、僕から見れば歪んだ育ちではあってもグラーフ王国で生まれ育った彼ら。互いに補い合わなければならぬ部分は間違いないで存在している。その部分をどうするか、というのは僕にとってのささやかな悩みではあったのだがジルヴァの提案はそれを解決してくれるものだった。

僕に対する気遣いの言葉などと共に届けられた書簡の内容を要約するところだ。

”革命に賛同する者全員の総意として、革命の理念と方針を改めて吟味し我らが血肉としせんがためにご助力を請いたい”

後宮に呼び寄せ僕に協力してくれていた貴族の子弟たちはおるか、その従者たちを含む全員 百名以上に上る署名が添えられていた。

「いやはや、参ったね。僕に教科書を書けつて言うのか、あいつは」
僕はカップを片手に苦笑する。

彼らの前に立ち、偉そうな態度で知識をひけらかしてきた僕はお世辞にも紳士とはいえなくても紛れも無く教師の立場だった。教材は自己批判と貴族主義のアンチテーゼでしかないというのに、ある種僕の妄想でしかない理想を規範にしようというのか。

「いや、そうはならないか。ジルヴァの署名の次にはレヴェツカの名前があつた。僕のことを否定しがちな彼女のことだ、素直すぎて頭の固いジルヴァとも良い具合にバランスをとるだろう。僕が致命的な間違いを犯したとして、それに噛み付かない彼女ではない。真つ向から反対意見を出してもらえらるというのにはありがたいものだ、少なくとも僕にとっては。」

「それに”ご助力”ときたもんだ」

こればかりは笑いを堪えられない。

「ミノルさま、そんなに可笑しいことなのでしょうか？」

まだ字の読めない僕の代わりに書簡を読み上げたりディアにしてもそれは可笑しいことには思わなかつただろう。彼女の疑問は尤もだ。しかし、ちょっと勘繰ることの出来る文面でもある。

「ご助力、つてことはメインは自分たちでやります。という風にも取れるだろう？ ジルヴァたちは僕に楽をさせてくれようとしているとも思えないか？」

「あつ、確かにそういう風にも受け取れますね」

「真実かどうかはさておいて、有り難い話さ」

極々身近な人とであれば普段通りの精神状態を保っていられるが、まだ後宮最奥のプライベート区画からは出られずにいるというのが僕の現状だ。徐々に改善の傾向は見られているが、なかなか思うようにはいかないのが歯痒い。本来なら僕が引つ張っていかなければならないというのに、僕には特別な力も強靱な精神すらも備わってはいない。望んで手に入るものではないとはいえ、それが情けなくもあり悔しくもある。

だからこそ、強くなりたいと願った。当然、願うだけでは手に入らないから努力をする。人前に出られなくなつた分、身体を鍛えている。一方的な殺戮の憂き目に遭い刷り込まれた死の恐怖を克服するには僕自身が強くなるしかない、というのが震えながらに導き出した答えだ。自分自身を向上させることでしか、この恐怖は押さえ込めない。…という割にはこの身体は自身を傷付け得るものに対して過剰なまでの反応を見せ、ナイフどころかフォークも持てなくなつてしまっている。木剣などは論外だ。

それでも初めの頃はなにも受け付けなかった胃がなんとか食べ物を受け入れるようになったことは大きな進歩だろう。少なくとも、リディアの泣きそうな顔を見なくても済むようになった。

「しかし…現実的な問題として、僕はこの国の文字が書けないんだよな」

会話に関しては一日の大半を共に過ごしてくれるリディアとのコミュニケーションを経て、ある程度の話の意味を拾うことはできるようになってきているが、文字となるとこれは全くの別問題。実際、ジルヴァからの書簡もリディアに読み上げてもらわなければならなかったし、文字が読めないために何かを知ろうとすれば誰かに聞くし

かないという大変に不便で、何度か改善を試みはしたものの、挫折に終わっている。形式としては英語を初めとするアルファベットに近い言語形態であるらしいことは判別できたのだが、問題はそのアルファベットに相当する文字が問題だった。象形とも幾何学模様とも思えるような半円や直線、放射線などが組み合わせられた複雑怪奇極まる文字であるのがその理由である。それらが26あって各々アルファベットに該当する意味を持っているのだが…その文字をまず記憶することが困難だったのだ。たった26の形状記憶と思うこと無かれ。その形状の複雑極まるどころ、もはや異邦人に対する加虐の域である。

「余計なところでファンタジー要素を入れるんじゃない!!」

と絶叫したのは文字の練習を始めてすぐのことだったように思う。喚きたてる僕に、リディアはご丁寧にも大きな文字の相對表を作ってくれたものだが、未だに覚えられずにいる。一文字が複雑すぎるのだ…。

そんな経緯を事細かく知っているリディアはすぐに助け舟を出してくれる。

「よろしければ、わたくしが代筆いたしますが…」

少し困ったように申し出てくれるのも、もう当たり前のようになってしまった。

…というか、僕が頼めば良いだけの話なのだが…どうにも素直に物を頼めない。それでなくても世話になっているというのに…。という余計な見栄が悪いのだが。

「本当に申し訳ないが、よろしく頼むよ。リディア」

「かしこまりました、ミノルさま」

落ち着いた様子で優雅に一礼するその様はもうすっかり熟練のメイドさんだ。…本当はまだ着任から二ヶ月も経っていない新人のはずなのだが…その短い期間の間に様々なことがあり過ぎたせいだろう。メイド本来の仕事よりも、ひとつ上のメイド長クラスの仕事をいきなり押し付けてしまったこともある。更に面倒な主人　僕のことだが　の世話まで一人でしなければならなかったのだから、成長もするというものだろう。…もしかしたら、僕の見えていないところではいろいろとドジをやったりもしているのかもしれない。

閑話休題。

「そつえば、そろそろストラトが来る時間か？」

「そうですね。そろそろいらっしやる頃かと」

調度、昼食の後のお茶も済んだこの時間帯にリディアとストラトは僕の御守番を交代する。大分安定してきたとはいえ未だに一人にするには不安が残る、という理由からの措置だ。

コンコン

「ストラト・ツェーリングン、参りました」

それなりに分厚い扉越しにもはっきり聞こえる低く渋い声は間違えようもない。

「噂をすれば影、ってね。どうぞー」

「失礼致します」

現れたのは老境に差し掛かって尚衰えを知らぬ偉丈夫。見間違えることの難しい侍従長の姿。

…いつも思うのだが、筋肉質でマッチョなのにどうして執事服が違和感を感じさせないのだろうか。

「それではミノルさま。わたくしは失礼致します。ストラトさま、ミノルさまをよろしく御願いますね」

「お任せを」

「では」

言っつて、リディアは食器と茶器をまとめて退室していく。

リディアにも仕事があるというのに、傍に就いていてくれるというのは本当に感謝のしようもない。ストラトにしてもそうだ。彼の場合はもっと大変だろうに、嫌な顔ひとつしないで居てくれる。みんながいなければ、もっと早くに潰れてしまっているだろう。

ぱたむ。と気の抜ける音を立てて扉は閉まった。今、この部屋にはストラトと二人だ。

「さて、ストラト」

「はい、陛下」

ソファに腰掛ける僕の正面に立つストラトが姿勢を正す。

「ひとつ、大切な頼みがあるんだ」

僕は無理に笑顔を作って、そうストラトに持ちかけた。

二十八話 静養（後書き）

誤字・脱字、ご意見・ご感想などお待ちしております。

感想など人目に晒すのはイヤ！という方はメールでも結構ですので
よろしくお願いします。

二十九話 邂逅

「陛下。今、なんと仰いましたか」

普段からマッチョな体格に似合わず、優しい顔つきで好々爺然としたストラトが今は険しい。

「例の暗殺者グループとの交渉をストラトに一任する、と言っただ」

強い力の籠った視線を、なんとか真正面から受け止めることに成功して僕は言う。しかし、たったその一言を伝えるだけで僕の口の中は干上がってしまったている。とことんプレッシャーに弱くなってしまったことを否が応にも理解させられる。

腰掛けているソファからずり落ちそうになるのを必死で堪えて言葉を接ぐ。

「僕はこの様だ。それに、あの暗殺者と対面して理解した。今の僕では仮に暗殺者グループの使者と対面したところでまともに頭が働かないよ。とても、平静ではいられない」

あの無機質な瞳を思い出すだけで怖気が走る。未だに包帯の巻かれている首が苦しいような気までしてくるし、左手の傷はまだ痛む。そしてなにより、震えが止まらなくなる。

「見てみる、話のネタにするだけでこのありさまだ。とても交渉どころじゃない」

僕の意味に抛らぬ震えを起こす両の手をストラトに示す。

一度こうなってしまうえば、しばらくは震えが収まらない。手を組んで、腿に挟み込んでなんとか震えを押さえ込もうとするのは、この短い期間で染み付いた癖のようなものだ。

そのことを知っているストラトはひとつ唸って目を伏せる。努力云々以前に、現状で僕が使い物にはならないということとを彼が一番良く理解している。リディアほど親身でもなければジルヴァほど盲目的でもない。ストラトの感性はあくまでも現実的だ。夢は夢として受け止めてくれるが、現実離れた話には異を唱える。徹底した現実主義者だ。今まで対立することなくやってこれたのは僕もまた現状を打破するために現実主義者であらなければならなかったからというのが大きいだろう。僕の出した意見がストラトからしても現実的な案であったからこそ何も言わなかったというだけ。現に暗殺者との対面の直後には露骨な態度を取っていたことから分かる。

「……………」

瞑目し、沈黙を続けるストラトに僕は更に言い募る。

「ラフィリアは不在。ジルヴァとレヴェツカは経験不足。頭だけは狡い僕は役立たず。…となれば、ストラトしかないんだよ」

まさか、リディアに任せるわけにもいかないだろう？という僕の冗談にもストラトはなんの反応も返さなかった。

僕は首を傾げる。…これは沈黙ではない。なにかを考えている？僕の言葉が届かないほどの思考の深み。あるいは葛藤か。どちらにせよ、余計な口を挟むべきではないように思われた。

難しい表情のまま直立したストラトが口を開いたのは優に10分は経った頃だ。

「陛下はご存じないかと思いますが、アレはただの暗殺者ではありません。大陸中を混沌の海に叩き落した、異能の暗殺集団『曙』の手の者です。今でも世界中から忌み嫌われ各国で指名手配、狩り出しが行われていると聞きます。一人残らず殲滅されたと言われる今も、です」

ストラトの口から語られたそれは凄惨極まる大陸の歴史だ。海と山脈に囲まれ文化的に孤立しているグラーフ王国ではほとんど知られていない大陸史。

中世暗黒時代、とでもいうのだろうか。

ストラトが言うにはそれはそれは酷い時代だったのだそうだ。

その原因が、『曙』という雇われの暗殺者集団であったという。

いや、正確には”ただの組織”であったそうだ。所謂、裏稼業と呼ばれる類の仕事を専門とするただの一組織。彼らは異能の力を以って今までにない精度での仕事を果たすことが出来た。

金次第でいかなる仕事をも請け負い、正確に遂行する。それは仕事の内容が”暗殺”であつても遺憾なく発揮され、そのことが後の悲劇を呼ぶに到った。

貴族社会において、権力を握るための手段は大きく二通り。

自分の才能を王に認めさせ、召し上げてもらうか。

それとも自分の上に居る者を引き摺り下ろすか。

前者は難しく後者は容易い。

” 邪魔者は消す ”

そんな風に考えてしまう者が出てきたのはある意味当然だろう。

そして金さえ積みめば仕事を選ばずに遂行する『曙』が貴族の権力抗争に利用されるようになるのは早かった。次から次へと貴族の死

亡が相次ぎ、殺したものがのし上がり、のし上がったものが殺される。問題は一国に止まらず、他国にまで飛び火しつつには暗殺による王位篡奪までが行われるようになる。その上、暗殺を口実に他国への宣戦布告などが相次ぎ大陸は血みどろの大戦争へと発展していった。

そして数年。地図の上から小国のほとんどが消え去ってから、各国の王たちはふと気が付いたのだ。暗殺に次ぐ暗殺によって人材が払底し、臣下との信頼関係もズタズタで併呑した小国の統治すら危うくなってしまうている状況に。

彼らは異例とも言える大陸首脳会議を内密に執り行い、『曙』の完全抹殺を大陸全体の総意として決定した。この戦争は『曙』の陰謀によって引き起こされたものであり、我々人類の共通の敵だとされたのである。

世界から敵と看做された『曙』の壊滅は早かった。醸成された権謀術数の限りと残虐性の限りを尽くして狩り尽くした。秘密の里は暴かれ、ただ一つの例外も無く抹殺し尽され灰すら残さぬほどの徹底振りであったという。それが50年ほど前の話だと言う。

「しかし、殺され尽くしたのだろうか？」

「いえ。完全ではなかったと聞きます。極少数ではありますが、脱出した者がいるというのが通説です。そして、龍の鎮座する山脈を抜けグラーフ王国に潜んでいる…とも」

直立したまま、静かに語りを終えるストラトは　しかし。あまりに泰然とし過ぎている。あの険しい表情はなんだったというのだ？それに、徹底的に狩られたはずなのにどうしてそんなに『曙』の情報を持っている？

ああ、こういうときのテンプレ（お決まり）といえば、アレか。

「もしかして、『曙』の生き残りがストラト　お前だとかいうオチじゃないよな？」

背中を冷や汗が流れ落ちる。願わくば、冗談であって欲しい。そう強く願った。

「流石は陛下でいらっしゃる。よくお気づきになりましたな」

しかし、淡い期待は宙へと消えた。

柔和な笑みのまま、いつも通りの微笑みのまま、彼は言った。

「私が『曙』の頭領、ストラト・ツェーリングンでございます。陛下」

二十九話 邂逅（後書き）

誤字・脱字、ご意見・ご感想などお待ちしております。

感想など人目に晒すのはイヤ！という方はメールでも結構ですので
よろしく願います。

三十話 決意

元、という但し書きがつきませんが。と言うストラトの補足は僕には聞こえていなかった。

暗殺騒ぎ以降、精神の情動野がすっかり不毛の荒野になってしまっている気がする。もう、告げられた事実には驚きすら感じない。それどころか、逆に納得してしまえるほどだ。

…いや、でもショックを受けていないわけじゃない。

この世界にやってきて、いきなりファイリアと引き離され途方に暮れていた僕を支えてくれたのは他でもないストラトだった。それ以外にもいろいろと心を砕いてくれていた。そして何より、リディアと引き合わせてくれたことを心から感謝しているのだ。彼女の優しさがなければ、僕はもうずっと前に死んでしまっているだろう。身も心も。

不思議と裏切られた、とかそんな風には思わないけれど 身体は別だ。

目の前に、僕を殺しかけた暗殺者の身内がいる。

その事実だけで歯の根は合わなくなり、かちかちと耳障りな音を立て僕の身体はどうしようもなく震えてしまう。首と左手の傷が疼き出し息苦しさを感じる。まるで再現フィルムのようなようだ。事件のあった翌朝、子供よりみっともなく震えていたそのときの再現。

でも、それは身体だけの話だ。染み付いてしまった条件反射。一種の防御行動。大丈夫、思考は冷静だ。いつも通り、クレバーな僕のまま。ともすれば、身体に引き摺られそうな精神を御しながら身

を丸め、震えの引くのをじっと待つ。

「申し訳ありません、陛下。リディアを呼んで参ります」

その声音には、僕への気遣いがありありと感じられる。でも、僕はどうにか首を振ることでそれを拒否した。必要ない、余計なことをするなと念を籠める。

それでなくとも、リディアには無理な負担を強いているのだ。こしばらくで豹変とも取れるような大人っぽさを纏うようになったのは僕のせいだ。不安定な僕を少しでも安心させようと、ありもしない余裕を演出して見せてくれている。…全く、どちらが年上なのか分かりやしない。そんな彼女に縋っているのもまた僕なのだけど

「…しかし、陛下」

冷静になりきれしていない、どこか狼狽した目で見ているが元はいえばお前のせいだからな。

「…い、らん…と言った…ッ！」

歯鳴りを押さえ込んで、どうにかそれだけを口にする。

いつまでも震えてばかりいられない。いつまでも過ぎ去った死の影になど怯えていられない。

それに、今日の前に居るのは他でもない、ストラト侍従長だ。たまたま、『曙』のメンバーであったというだけ。殺すのであればこんなに優しくはするまい。ましてや自分の正体を明かすなどということとは。

そう自分に言い聞かせる。

「…それで、そんなことを僕に言ってどうしたいんだ？ 悪魔だろ

うが邪神だろうが、疫病神だろうが使えるものならなんでも使う。国際的に敵視されている？ だからどうした。そんなくだらない事はどうでもいい、今この国をひっくり返すのに利用できればそれでいい」

一息に言い切って、ふーっ、と大きく息を吐く。声はどこか震えているし、ソファからずり落ちそうになっている。言っていることとは裏腹に、腰が抜けてしまったように力が入らない。

「しかし…陛下」

「くどい」

あくまでも頑ななストラトを一蹴。さらに言葉を重ねていく。

「お前の出自がどうであろうと、やってもらう。」

依頼内容は欺瞞情報の流布、及び情報収集。暗殺の依頼は一切を要求しない。報酬は望むがまだ。財貨による支払いであれ、生存権の保障であれ国家の威厳をかけて保障する。お前の判断で交渉して良い」

「……………」

「仮に、他国が『曙』の残党を保護しているということでも干渉してくるのであれば、一国家として彼らの安全を守るために対抗する。大陸を敵に回してやるうじやないか」

口角を持ち上げて、意地の悪い笑みを浮かべてやる。

『曙』を国内に匿うということは、国際的な地位を投げ捨てると同義だ。大陸全体から目の仇にされている組織を隠匿すれば、当然こ

の国も排除の対象となる。ましてや、この国は豊かだ。豊富な鉱物資源に森林資源、それらに支えられた農地もまた肥沃である。それだけで侵略しその生産力を奪いたくなるというのに、さらにはほとんど絶滅したとされる異種族を多数抱えている国でもある。そんな国は、放っておいてもいずれどこかの国から侵略を受ける。そこに狙われる理由がひとつ増えたところでなんだというのだ。であれば、『曙』の力を借りても正しい国家の姿を取り戻すべきだろう。それに、彼らの存在がバレたからといって容易に手出しの出来る場所ではない。…そんなに上手く事が運ぶはずもないが、現実問題として彼らの力なくして革命を起こすことはできないだろう。我々は素人なのだ。今はまだいいが、いずれは誤魔化しきれなくなる。そうなるからでは遅い。

「やってくれないか、ストラト」

なんとか居住まいを直しながら、懊悩するストラトに問う。

まるで柱かと紛わんばかりの直立姿勢のまま、眉間に深い皺を刻みストラトが熟考する。

正直、僕にとって『曙』の成り立ちはどうでもいい。その所業ですらどうでもいい。彼らの置かれている現状は僕にとってはマイナス要因だが、その能力はマイナスを補って余りある。僕は自分自身のために最善の方法を選択するだけだ。他でもない、死なないために。

すうっとストラトの瞼が上がる。

「……私が『曙』の人間であるを知って尚、全権を預けると？」

「勿論だ。シヨックを受けていないと言えば嘘になるが、僕にはそもそも他に選択肢がない。さっきも言ったけどね」

「私が、彼らに有利な条件で契約を結んでくるとは思わないのですか？」

「構わない。結果として、彼らの協力が得られれば少なくとも現状は改善する。つまり、僕に出来ることが増えるということだ。なんとかするさ」

「……………陛下は、恐ろしいと思われませんか？」

我々が　とはストラトは言わなかった。何が恐ろしいのか、色々勘繰ることの出来る言葉だ。

『曙』が恐ろしいのか、それとも彼らに弾圧を掛ける大陸諸国が恐ろしいのか、そのいずれでもないか。

「怖いよ。そりゃあもう、いろいろ怖い。死ぬのが怖い。殺されるなんて真っ平ゴメンだ」

けど。と僕は言葉を継ぐ。

「だけど、敵が見えているのなら恐ろしくない。抵抗できるのなら、反撃できるのなら恐ろしくもなともない。間隙という間隙を小突き回し、抉じ開け引き裂いてやる。徹底的に、完膚なきまでに」

声に、熱が籠る。いつの間にか震えはどこかへ去っていた。

「何も出来ずに、死にたくはないんだ。何も出来ずに死ぬこと、それが怖いよ…今はね」

訳の分からないことを言っているな、と思う。でもこれは飾らない僕の本心だ。

「ストラト。何度も言うけど僕には『曙』がどういう組織なのかはどうでもいい。使えるものは全て使う。それだけだよ」

…単純な話がそうなのだ。

”立っている者は親でも使え”

僕には手段を選ぶ贅沢は許されていない。

「……………承知いたしました」

どこか苦い笑みを浮かべてストラトが応じた。

「陛下にとつては心底どうでもいい話なのですな。使えるものは使う。実に単純です。我々は圧倒的に不利な状況、手札は多い方がいい……………そうですね？」

強張っていたストラトの表情が一気に緩む。憑き物が落ちた、とでもいうのだろうか。その笑みは爽やかですらある。

「このストラト・ツエーリングン。謹んで交渉役の任をお受けいたします」

僕もその笑みに釣られてか、微笑を返す。

「ストラト」

「は」

「…少しくらい、欲張っても構わないからな」

「…?」

流石にこれだけでは伝わらないか。

首を傾げるストラトに悪戯っぽくいつてやる。

「『曙』の連中に肩入れしても良いぞ、って言ってるんだ。経緯はどうあれ、この国に苦難の果てに流れ着いた者たちを拒絶などしないよ」

「…」
「…」
「…」

直立状態から、腰を起点に90度近く曲げての最敬礼。そして澄い豊かな音律が決して広くはない安楽室に響いた。

「 国王陛下」

三十話 決意（後書き）

誤字・脱字、ご意見・ご感想などお待ちしております。

感想など人目に晒すのはイヤ！という方はメールでも結構ですので
よろしく願います。

三十一話 革命論 序

「なあ、リディア。理想的な革命ってのはどんなもんだろう?。」

「は、はいっ!?!」

僕がリディアに素っ頓狂な声を上げさせたのは朝食を摂っている最中のことだ。

食堂 とはいっても、無駄に長い机の置かれたとかそんな部屋ではない。後宮の個室程度の広さの部屋に調理場が併設されているだけの簡素なものだ。机にしても、ただの六人掛けのテーブルだ。そこに僕とリディアが対面で座っている。

朝食のメニューはオートミールにサラダと魚の塩焼き、そしてフルーツジュース。もちろん果汁100%だ。

日本風に言うならば白いご飯とアジの開き、そして味噌汁くらいにオーソドックスな内容だ。グラーフ王国での生活もそろそろ三ヶ月になるうかという頃。正直、白米に醤油や味噌といったものが恋しくなってきたのはいるが、特別それを不満に思わないのは間違いなくリディアの努力のお蔭だ。

ほぼ毎日のように食べるオートミールにしても、ただ粥にするだけではなくナッツやドライフルーツを混ぜたりと色々工夫をしてくれているお蔭で嫌気が差すこともない。変わり映えのしないサラダも、僕から料理に関する情報を引き出してはドレッシングを工夫してくれる。

そんな心配りの行き届いた毎日の食事は間違いなく、僕を健康にしてくれている。

油脂類を控え、炭水化物も全粒使用でミネラルとビタミンに優れ、

毎食しっかりと盛りられるサラダは同じくミネラルとビタミンを。そして所々で使われている牛乳などの乳製品はカルシウムを…と、不健康極まる現代日本人が必要とする栄養素をバランスよく供給してくれている。

栄養学、なんて学問はこの世界に存在しないらしいがリディアの作ってくれる数々の料理は栄養学的観点からしても全く素晴らしいものだった。

このところ、重点的に行っている身体強化トレーニングにもしっかりと身体がついてくるのは多分この食事による体質改善のお蔭だと僕は思っている。

つまるところ、僕の身体の調子は絶好調であるということだ。それに伴うかのように精神状態も目覚ましい復調を見せている。…それでも、全快には程遠いが。

閑話休題。

革命の話を突然リディアに振ったのもちゃんと理由がある。

意識調査、というわけではないが革命をどんな風に思っているのか知れたかったし、なにより考えを纏めるためにも話し相手が欲しかったのだ。

「えーっと…そうですねー」

口元に運ぶ途中だったスプーンを器に戻して、思案するように顔を上げる。

”お仕事”の前髪フェイスガードのためにどこを見ているのかは分からないが、多分視線を彷徨わせているのだろう。最近、僕の前ではすっかり大人っぽくなってしまったりリディアだが「えーと、えーと」とか言いながら首を傾げて様子は歳相応でどこか安心する。

「うーん……そもそも、わたくしには革命というものがよく分かりません……」

しばらく唸った後に、肩を落としたリディアはどのように答えた。

「ふむ……」

それもそうかと思い、一つ頷く。

元より革命は王政に対する反発、政治主体の奪取を目的として起こす篡奪行為のことだ。

これまで何の疑いをも抱くことなく王政と言う制度が維持されてきたというのであれば、そもそも王政をひっくり返そうと考えたこととすらないのだろう。

「でも……」

「ん？」

「誰も辛い思いをしなくて済めばいいな、って。そう思います」

「それは……」

無理だろう、と冷静な部分がそう告げている。

どんなに控えめに考えても人死にの伴わない革命などありえない。熱狂に飲まれ、理性を半ば放棄させるような集団幻想とも言える力が革命にはある。常識で考えるまでもなく、許されないような行為が平然と正当であるように思えるような、そう思い込ませてしまう力がある。優しい気持ちをごどこかに置いて来てしまう。

「…そうだな。それが一番だな」

それは至極当然のことで、忘れてしまいがちになること。
やるうとすることが大きくなればなるほど、犠牲は付き物だとか、
仕方ないとかそんな風に思ってしまう。遠くを見つめてみると、足
元が見えなくなるように。

「リディアは凄いな」

「は、はいっ!？」

「リディアは、本当に凄い」

「え、ええっ!？ わ、わたくしはそんな褒めていただくようなこ
とは何もっ!」

おろおろと取り乱して、酷く慌てているリディアを見るのも随分
久しぶりな気がする。大人っぽい雰囲気と漂わせるリディアも魅力
的だが、やはり純真で慌てんぼのリディアのほうがいい。

リディアが傍にいてくれる限り、僕は正気を保っていられるだろ
う。革命という熱狂に飲まれずにいられるだろう。

「ミノルさま？」

いつの間にかリディアが怪訝そうに僕を見ている。

「何を笑っておいのですか？」

「い、いや…?」

口では否定して見せても、口元は意地の悪い笑みを形作ってしま

っているし、腹筋は痙攣の兆しを見せている。…つまり、何処からどう見ても笑っている。

「ミノルさま！ からかっていたのですねっ!？」

「い、いや…だから」

「知りませんっ!」

リディアは頬を紅潮させ、ぷいっとそっぽを向いてしまう。

僕はといえば、不思議とこみ上げてくる笑いをどうにかしようとするのだが、それがどうにも笑うのを我慢しているように見えてリディアには不興のようだった。

しかし、お蔭で”教科書”の書き出しの目処は立った。具体的な内容はまだまだだが、まず何よりも大切なことは”自分を見失わないこと”だ。革命という一種のお祭り状態に流されないこと。理性を手放さないことだ。

追記。

ちなみに、リディアのご不興を買ってしまった僕はその日半日リディアに口を利いてもらえなかったことと、入れてくれた紅茶がそれはそれは渋かったことをここに報告しておく。

三十一話 革命論 序（後書き）

誤字・脱字、ご意見・ご感想などお待ちしております。

感想など人目に晒すのはイヤ！という方はメールでも結構ですので
よろしく願います。

三十二話 朝

「ミノル。朝、起きて」

こんな風に始まる僕の朝。けれど、そんなに早くはない。

夜明けと同時に、なんてことはなくすっかり日が昇って後宮全体が活動を始めてから僕が起き出す。幸いなことに僕は目覚めの良い方なのでかなりゆつくり寝かせてもらっているのだ。

…身体がひ弱であることと、精神衛生上問題を抱えているということもあって、すっかり休ませてもらっている。…人前に出られないために、あまりやる事がないのも確かではあるが。

「ミノル、起きて」

そしていつも、リディアが優しく起こしてくれる。これはもう、役得というしかない。少しでも駄々をこねようものなら、それはもう大変に取り乱してその様はとても愛らしい。のだが、報復が恐ろしいのでやらない。言うまでもないがリディアの。ではなく、彼女を取り巻く周囲の人々からの報復だ。一度、出来心で駄々をこねたことがあるがもう二度とやろうとは思わない。それほどまでに辛い体験だった。

そうならないためにも、身を起こして返事をしなければならぬ。

「おはよう、リディア」

「おはよう。ご飯、できてる」

「ああ、すぐに起きるよ」

…別に片言で喋るのが流行しているわけではない。どうしようもないくらいに機嫌を損ねたわけでもない。全身が活力の塊のようなリディアが爽やかな朝を教えてくれる、いつも通りの光景だ。彼女が急に言葉遣いを変えたのではなく、ただ僕が彼女の言っていること全てを理解できなくなったただけのことだ。

理由は単純。意思疎通のペンダントを身につけていないからだ。暗殺騒動で僕が著しく不安定になっていたために有耶無耶になっていた約束を今になって実現しているのだ。

”ミノルさまが、ペンダントを外してくださいさるのですしたら、極めて私的に御仕えさせていただきます”

いつかの、極めて個人的な約束だ。

その証拠に、リディアはカチューシャをしておらず、前髪で隠していた双眸を晒している。大きく、ぱつちりとした深い蒼サファイアブルー。すつと通った鼻梁。…非の打ち所のない美少女だ。

リディアの素顔を見るのは初めてではないが、見る度に見蕩れてしまう。…なにも思わなかったのは、初めて素顔を見た時　暗殺騒ぎの翌朝のことで、そんな彼女に気付くことすらなかったのだ。膝を抱えて震えている時だって、彼女はすつとカチューシャを外し”極めて私的に”僕の面倒を見てくれていた。それは僕を安心させるためだったのかも知れず、それ以外の理由だったのかも知れず…聞くにも聞けず_にいた。いや、今も聞けないままだが。

ともかく、それでは不公平だろうと今更ながらに僕は約束を果たすべく、リディアと二人きりのときはペンダントを外してネイティブな会話レッスンを受けている。その甲斐あってか、ある程度の名詞と動詞、そして日常的な副詞やら形容詞なども少しは覚えた。そして分かる部分だけを言語化すると片言の会話分の出来上がり、というわけ。リディアの発音が丁寧ではつきりとしたものだからなん

とか…というレベルだ。

「早く、来て」

僕が回想に浸っている間に、リディアはそれだけ言って寝室を出て行った。

他にも何事か言っていたが聞き取れなかった。でも、短くはない時間を一緒に過ごしているのだ。その行動から何を言ったかは察することができる。

キングサイズの一人で寝るには広すぎるベッドの横に据えられているテーブルに着替えが一式置いてある。これはいつもリディアが朝持ってきてくれるものだ。だから、多分聞き取れなかった言葉は

「着替えはここに置いておきますね。それでは、早くいらっしやってください」

ということなのだろう。

なんにしても早く起きなければ。

さほど寒くもないので暖かな寝床への未練もなく、さっさとベッドを出てリディアが用意してくれた衣服に着替えていく。滑らかな手触りと、つややかな光沢を持つこの布は絹かなにかなのだろうか？少なくとも綿や麻の類ではない羊毛でもないだろう。間違いない高級品。同質の布で出来たズボンとシャツを身につけ、薄手の皮の上着を羽織り、チエインメイルを着込む。その上からもう一枚、環頭衣状の上着を重ねて完成。ちなみに色はみんな真っ白。リディアが言うには、この布は染色できないのだそうだ。…真剣にないで出ているのだろうと思う。

手馴れたもので、着替えには五分もかからない。さっくりと着替えを済ましたら、テーブルの上に置いてあるペンダントをズボンの

ポケットに入れて寝巻きを抱えて部屋を出る。隣部屋：本来は護衛の詰め所であるはずの安楽室を抜け、一度廊下に出てから向かいの食堂に入る。

すでに後宮は完全に目覚め、活動を開始している。一時は完全に静まり返っていたというが、ジルヴァとレヴェツカが浮き足立つ仲間たちを叱咤激励して活気を取り戻させたのだと聞いている。それだけに止まらず、自主的に自分たちの在り方について議論を交わし、僕が教えた言葉の意味を掘り下げて理解に勤めている。薄っぺらいだけの僕の理屈に、肉付けをするために頭を捻っているのだ。

中でも面白いのはその議論に彼らの従者も混じっているということだ。誰が言い出したのか、やりだしたのかは分からないが立場の違う人間の意見はとても貴重なものだ。従者として就いている彼女らは箱入りの貴族たちとは異なり、“現実”を知っている。何も知らない貴族の坊ちゃん、お嬢さんには良い先生になっているようだ。彼らの手伝いをし始めたものまでいるらしい。

主従の関係を越えた信頼関係。そんなものが築ければいいな、とは思っていたが彼らは自分たちだけでその域まで辿り着こうとしているのかもしれない。

そうやって引っ張って行っているのがジルヴァとレヴェツカだ。短い時間ながらも面会したときには二人ともいい表情をしていた。特にレヴェツカは「如何かしら、私たちの手並みは？ あなたがやるより上手くやれてよ？」と言わんばかりに自信たっぷりだった。

全く、苦笑するほかなかった。あの二人には人を惹きつけるなにかがあるのだろうか。短期間で後宮を纏め上げたのは他ならないこの二人。その手腕の巧みさは嫉妬するのも馬鹿馬鹿しいほど。

何はともあれ、そういうことであれば人心掌握はジルヴァとレヴェツカに丸投げして僕は僕にしか出来ないことに集中できるというものだ。

彼らを殺してしまわないように、この国の将来を守るために策を弄するだけ。

明確な指針を定めることが今の僕の役割。

「ミノル？ どうした？」

「いや、なんでもない。すぐいくよ」

心配そうに食堂から顔をのぞかせたリディアに僕は笑いかける。眉の下がった彼女も可愛い。普段から目元を隠してしまう彼女だから、こっちはつきりと表情が分かるというのはとても嬉しいことだ。しかし、いつまでもリディアに心配ばかりかけてはいけない。そのためにも、身体を鍛え革命の準備を進めなければならない。朝と夕方に訓練をし、その合間に革命の教科書を書き、ストラトの報告を受け、夜にはリディアと会話のレッスン。なかなか大変だが充実した日々だ。これでトラウマがなければ尚良いのだが、そこまでは望むまい。それもこれから克服していくものだ。

「今日も一日、頑張りますか」

そのためにも、まずはしっかりと朝食を摂ることだ。

今日のメニューはなんだろう？

三十二話 朝（後書き）

誤字・脱字、ご意見・ご感想などお待ちしております。

感想など人目に晒すのはイヤ！という方はメールでも結構ですので
よろしく願います。

三十三話 魔法技術 その巻(前書き)

すっかり忘れてしまいがちですが、ファンタジー世界です。
それでは今週のびっくりドッキリメカ〜

…ごめんなさい。本編どうぞ

三十三話 魔法技術 その壱

ほんの小さな疑問が僕の中に芽吹いたのは革命マニュアルの作成の合間、安楽室でストラトが用意してくれたお茶で一服しているときのことだった。

クラウト茶、という結構ポピュラーなお茶なのだそうだ。なんでも、家庭によって味が違うという代物であるらしい。そのために味は千差万別だそうだ。…日本で言うところの糠漬けなんかがそうなのかもしれない。で、その実態はといえば、薬草茶　もつとエレガントに言うならばハーブティーのようなものらしい。何種類もある薬草を乾かしたものをブレンドして作るためにその配合によって味が変わるのだとか。またその効能もさまざまで、リラククス効果もあれば身体を温めてくれるものもあつたりと非常に奥の深いもの　なのだそうだ。

というのはストラトが熱っぽく語った話。お茶のブレンドはストラトの趣味でもあるらしく、薬草の育て方から効能まで事細かく蘊蓄を垂れて、後宮では土いじりができない…と不満を漏らしたりもしていた。

それは後宮はほとんどの外部要因に影響されない造りになっているのが原因だ。

完全な環境管理のされた温室のようなものと考えてもらえればいかと思う。外部からの影響を徹底的に排除するように作られているのだ。それも偏執的なまでの徹底振りで魔法を駆使し外部からの熱の移動すらもシャットアウトしてしまっている。

中庭から見える青空でさえも実は偽物で、実際の後宮は野球のドームスタジアムのような造りになっていて僕が見ていたのはドームの天井に映し出された幻影なのだという。はつきり言って全く理解が及ばないのだが、つまり魔法によって高度に管理された擬似的な

自然空間とでもいうのだろうか。魔術によって光源や空気の対流を作り出して日光やそよ風を演出しているのだという。それどころか、独立した水源を有し尚且つほぼ完全とも言える浄化循環施設が完備なのだとか。

気温も湿度も常に一定で、最適の生活環境を常に維持されている。それこそ、季節感を喪失させるほどに。

なんだこのトンデモキャッスル。

「この城は、古代遺跡の上に建っているのですよ。その設備が今も尚稼動しているというだけですな。とてもではありませんが、再現など不可能な高度な魔法技術ですよ」

古代遺跡。

魔道技術。

このところ考えているのが現実問題ばかりでつい忘れてしまいがちになるが、この世界は僕の知っている世界ではなくて、魔法が至極当然に存在しているファンタジーな世界だ。魔法とか言うある意味なんでもありな事象の介在する世界。しかも、その魔法という技術は大昔に大半が失われ今現存しているのはほんの一握りでしかない。

そしてその一握りから大きく逸脱する技術の塊が後宮なのだ。

今のところ、僕の力の及ぶ唯一の城であるのにその内情を僕はまったく知らない。

この、今僕が手にしているティーカップを満たしているクラウト茶を淹れるお湯にしても一体どうやって沸かされているのだろうか。薪か？炭か？ガスか？電気か？それとも魔術だろうか？僕の常識からすれば前者ふたつが最有力だが、リディアにお茶を　もちろん紅茶だ　を頼んだときにはほとんど待った覚えがない。もしかしたら常時保温してあるのかもしれないが、節制儉約が合言葉になっ

ているかのような後宮でそのような無駄遣いが為されているとは思えない。

「なあ、ストラト」

「はい、陛下」

突如振って湧いた疑問を解消するべくストラトに問いかける。

「後宮の熱源ってどうなってるんだ？」

瞑目したまま、お茶の香りを楽しんでいたストラトが瞼を持ち上げ、僕を見返した。

…ちなみに、僕はこのクラウト茶の匂いが苦手だ。日本人らしく、緑茶と麦茶に慣れ切った僕にはどうにも受け入れられない。しかし、健康にはいいそうなので薬と思って我慢して飲んだ。良薬口に苦し、と言うとおり苦い思いをしたが。

「やっぱり、古代遺跡そのままを使っているのか？」

「いえ、少し異なります。古代の技術であることには変わりないのですが、一部再現に成功しているものがあります。魔力式のかまど”がございます」

「へえ…魔力式」

”かまど”というのがなんとモジュールな響きだが、時代背景から考えると当然ともいえる。

しかし、魔力という不可思議なものが燃料として使えるというのは便利だ。詳しくは知らないが魔力なんてのは時間によって回復す

るもので、木材や炭のように回復に何十年と掛かるようなモノではない。非常にエコだ。俄然興味が湧く。

「一体どんなものなんだ？」

「ご覧になりますか？」

「見る」

話を最後まで聞かない子供のように即答。

魔法技術というだけで興味が湧くし、未知のものともなれば冒険心すら刺激されるというもの。

「では食堂へ」

常でない様子を見せる僕にストラトは笑みを浮かべながら先導する。

安楽室の向かいの食堂。毎日ここで食事を摂っているわけだけど、思えばその奥がどうなっているかを僕は知らない。

ストラトの後を追ってついて行くが、そもそもそんなに遠いというわけでもないから現場にはすぐ到着した。食堂のすぐ隣部屋…といても扉もなく、ただ布を上から垂らして一応区切つてあるというだけのもので、食堂とほぼ同じ広さの厨房がある。イメージとしては旅館の厨房だ。部屋の真ん中に作業台が置かれて壁際にかまどや水瓶などの熱源、水周りが設置されている。ドラマなんかに出てくるヤツである。

目的の”魔力式かまど”はすぐに見てそれと分かった。壁に半ば一体化するように設置された腰ほどの高さの四角い長方形。上面に火口と思われる窪みも見える。

それになにより、魔術が関係しているのだろうと一目で分かるよ

うなの紋章が赤いペンキのようなもので描かれている。
半円や直線、四半円…それらの組み合わせだった紋様。
強い既視感。

「…これは、この国の文字か？」

「然様です。もっとも、今では読み解くことも出来ぬほどに古いものですが。我々、魔術師が扱う呪文と同じ古代語です」

不用意に触らぬように、と僕に忠告をしてストラトがいくつか連なる魔力式かまど真ん中に立つ。

「陛下、これから少し部屋が寒くなるかもしれませんのでお気を付けてください」

「は？」

「ゆきます」

かまどの中心　紋様が一際細かく、濃密に描かれている部分にストラトが触れるとそれを合図としたかのように、赤い塗料で描かれた文様に光が波紋のように広がり一呼吸置いて全体が淡い光を放つ。そこからは一瞬だった。かまどの火口から強い陽炎が立ち上る。それにつられるように両隣の火口からも陽炎が立ち昇る。しかし

「…これだけか？」

正直、少し落胆している。もっとド派手に火炎でも立ち上るものと思っていたのだが、なんとも残念な陽炎が立つだけとは。熱が発生している割には放射熱も感じられない。拍子抜けだ。

「陛下、そちらに片手鍋があります。水を張って持ってきてくださいませんか」

「いいけどさ」

期待が大きかった分、落胆も大きい。

魔法技術。期待していたのだが…。

失意のうちに、壁に吊られている片手鍋を手に取り水瓶から冷たい水を汲んで、脇目も振らずにかまどを注視しているストラトに手渡す。

「陛下、少し離れていてくださいますかな？ 危のうございませうで」

神妙な顔つきで、額に汗すら浮かべたストラトに尋常ならざるもの感じて素直にかまどから離れた。

「ゆきませうぞ」

ストラトがゆっくりと陽炎の片手鍋を翳す。

一秒 変化なし。

二秒 鍋から蒸気が上がり始める。

三秒 盛んに蒸気が上がり、ボコボコと激しく沸騰している音が少しはなれた僕にまで聞こえる。

四秒目にはストラトはさっと鍋を火口から外し、作業台の上に置いた。猛烈な蒸気が厨房の中に拡散していく。

「如何でしたか、陛下。」これだけ”です”

「……………」

僕は戦慄していた。

「圧倒的な火力…通常にあるまじき熱量に僕は言葉を失ってしまっていたのだ。」

ストラトに手渡した鍋は片手で扱うものだが、決して小さくはない。直径20cmほどの鍋でだいたいの容量は3.5Lほど。大体2/3ほどまで水を入れたので2Lほどだろうか。

それほどのお湯を沸かそうとすればガスコンロでも五分ほどはかかるだろう。

それがたったの四秒。常識外れとか言うレベルの熱量ではない。それでいて、その鍋を火にかけていたストラトにも火傷などした様子もない。放射熱もまったくと言って良いほどなかった。

途轍もない技術力に、そしてある種の感動に、僕は打ち震えていたのだ。

三十三話 魔法技術 その巻（後書き）

一応、その式まで予定しております。

誤字・脱字、ご意見・ご感想などお待ちしております。

感想など人目に晒すのはイヤ！という方はメールでも結構ですので
よろしく願います。

三十四話 魔法技術 その貳

人類の文明の発達は熱と共にあると言えなくもない。

文明の発達に不可欠である金属の加工のためには、大変な高熱が必要だからだ。

古代においては青銅の文明が鉄の文明の前に敗れ去った。人が鉄を利用するようになって長くなるが、品質の良い鉄を大量に生産できるようになったのはそんなに昔のことではない。大量生産の方式が完成されてからは「鉄は国家なり」と言わしめるほどの存在になったが、その影には高熱を生み出すための試行錯誤の歴史がある。

より高温を得るために過激に燃焼させるために送風装置を作り、炉の熱を逃がさぬように工夫をし、強い火を熾すために炭を厳選した。ある種偏執的なまでの拘りによって熱を生み出してきたのが僕の知っている世界の歴史だ。

それがどうだろう。ほんの数秒で冷水が熱湯に変わってしまう。それにはいったどれほどの熱量が必要なのだろうか。俄かの知識ではとてもではないが思いつかないが、少なくとも恐るべき熱が発生していることは間違いないだろう。可燃物：木片のひとつでも放り込めば一瞬で塵になってしまうかもしれない。

…なんか長々と説明したけど、ここまでは結構どうでもいい話。それほどの熱を容易に得ることが出来るということが僕を歓喜させている。

畏怖でも恐怖でもない。純粋な喜びだ。

近代科学を支えているのは高度な技術によって得られる”安定した高熱”だ。魔力式かまどの熱であってもそれは同様。安定した高熱であれば、どのようなものでも構わないのだ。むしろ、その方法が安易であればあるほど良い。

僕が暗い歓びを噛み締めているのは、そのせいでもある。その必要とされる高温ゆえに諦めていた技術がどれほどあるか。

身近な鉄ひとつとっても、その加工には非常に高い熱が必要なのだ。

鉄の融解温度は1500。鉍石や砂鉄から取り出すにもコレに準ずる温度が必要になる。そのために熱を逃がさぬ炉を作り、原料1kgに対して約10倍近い木炭を消費してようやく鉄を取り出すことが出来るほど。それも何日もかけて火を焚き、ふいごを使って温度を上げてようやくというようなシロモノだ。グラーフ王国の人たちがどんな方法で製鉄を行っているのかは分からないけれど決して生産量は多くないはずだ。しかし、この”魔力式かまど”の技術を転用すれば驚くほどの低コストで鉄を作ることが出来る。国民一人当たりに割り当てることの出来る鉄量が増える。…劇的になにかが変わるわけではないだろうが、生活が豊かになることもあるだろう。

「ストラト、こいつは量産できるのか!？」

湯気の向こう側でストラトが目を見張っている。しかし、そんなことを気にする余裕もないくらいに僕は興奮していた。

「…何をなさるおつもりかは存じませんが…量産は難しいでしょうな」

「なぜっ!？」

いつにない僕の氣勢にストラトがたじろぐ。

「そ、それはですな? 陛下もご覧になられたかと思いますが、かまどに刻まれている紋章に使われる塗料が特別なのですよ。」魔石

”と呼ばれる鉱石を細かく砕いたものなのですが、魔石自体の産出量が少ないのです。それに

「…それに？」

「食堂から出てみればお分かりになるかと」

「外？」

私はここでお待ちしておりますので。とストラトは僕を促した。理知的な解説のおかげで僕も少しだけクールダウン。垂れ布をくぐって、食堂の扉に手をかけた瞬間には違和感を感じていた。

…ドアノブがひんやりしているのだ。

陛下、これから少し部屋が寒くなるかもしれませんのでお気をつけください

なんとなく、オチが読めた気がするが気が取り直して廊下に出る。

「寒ッ！」

後宮の賑やかさは身を潜め、大理石の回廊は冷気を伴った静謐に満ちていた。

常に快適な温度を保っていたはずの空気はさながら巨大冷蔵庫と化したかのように冷え切っている。吐く息が白い。

これはなにか。色々と前提が狂ってくる予感がする。

異世界に来た割にはそんなに異世界らしいことはなかったじゃないかと自分に言い聞かせる。魔法は万能ではなかったし、召喚され

た状況だつてまともじゃない。一件便利な技術にしたつて落とし穴がないはずが無かった。

”魔力式かまど”は、”熱を発生させる技術”ではなかった。”熱を掻き集める技術”だったのだ。熱を作り出すのではない、他所から奪つてくる。つまりはそういうことか。

世の中そんなに甘く出来ていないということ、異世界で噛み締めることになるとは思わなかった。

莫大な熱量を発生させる技術が、軽くワンタッチで簡単に得られるはずがない。顔色一つ変える必要のない労力でそんな効果が得られるはずもない。

失意のうちに、冷風吹きすさぶ食堂の扉を閉めた。

「…どうやら、ご理解いただけたようですね」

「……………」

確かに、量産は困難だろう。仮に家庭用熱源などにしようものなら熱の奪い合いになってしまう。夏だろうが冬だろうがお構いなしにコートが必要になってしまう。

だが 要は使い道だ。一般に普及が難しいならデカい汎用性に富んだモノを作ればよい。熱を集めるのであれば、多くの熱を蓄えるように工夫をすれば、出力を上げる事だつて出来る。色々なことができるようになるのだ。

「ストラト」

「は」

「この”魔力式かまど”を大型化した場合に必要な資材や経費なんかを概算で良いから計算しておいてくれ」

「承知いたしました。…なにかお考えがおありのようですね？ 悪い顔になっていきますぞ」

「そうか？」

自然な笑みのストラトに対して、僕はといえば意地の悪い笑みが浮かんでいるのが分かるくらい口角が持ち上がっている。

ひとつは魔力式かまどの存在に。もうひとつは、リディアの協力のもと取り組んでいた思考を漏らさない方法がストラトにも通用したということ。

これは革命マニユアル 考えれば考えるほどクーデターではないのか？という疑念が強くなる の作成に纏わる副産物の一つだ。というのも、教本を書くというのはそのほとんどが頭脳労働である。だからこそ考えを纏めるのに書き物をしたいのだがこの国の文字を未だに書けない。…ついでにペンと羊皮紙にも馴染めないで居るために実質書き物ができない。…だって、羽ペンとか使えるわけないし、そのことがイライラを増進して考え事ではなくなる。それに、紙にしても製法を伝えたことで増えてきてはいるが紙は酷く滲むのだ。というのも、植物の繊維が粗く隙間も多いのがその理由だ。僕が元の世界で使っていた紙は、てんりょう 填料という熱や化学物質などで表面を平らにして字が滲みにくく作られているためにさして苦勞もせずに使えたのだ。

話を戻そう。

僕の代わりにメモを取ってくれようになっただりディアは必然的に駄々漏れになっていて思考を浴び続けることになるわけだが、そのときにふと思考が途切れることがあったりしたらいい。そのあたりの疑問に端を発して、様々な実験を繰り返した結果、思考を暴露せずに考え事をする方法について会得したのだ。 至極どうでもいい話だが。…ちなみに、完全ではなくてたまーに漏れているそう

だ。

それでも、無意識に思考をばら撒くことが減ったというのは良いことだ。

”狡い”だとか”せこい”だとか”外道”とか…貶しにしか聞こえない褒め言葉を聴かずに済むのだから。

「……そういえば、ラフィリアはどうしているんだろうな？」

「かなり忙しく飛び回っていると聞いております。偶には戻っているそうですが…」

「部屋から出ない生活じゃ出会うはずもないか…」

重要な仕事を押し付けておいて、ひどいはなしだとは思うが。

それでも、暗殺騒ぎがあったからこそ、ち、まともに話もしていない。

…なんとなく、声が聞きたかった。

三十四話 魔法技術 その弐（後書き）

誤字・脱字、ご意見・ご感想などお待ちしております。

感想など人目に晒すのはイヤ！という方はメールでも結構ですので
よろしく願います。

三十五話 後悔

わたしは、霧島稔をこの世界に連れてくるべきではなかったかもしれない。

わたしが願い、彼が願って双方の合意を以ってこの世界に召喚された。それなのにこんなことを考えてしまうなんて召喚の巫女としてはあるまじきことだ。

それでも、強くそう思わずにはいられない。

十年…現実ではないながらも、精神に刻まれた十年は確かにわたしの胸のうちにあつて望郷の一念だけで国王たる人物を探し続けてきた。身が擦り切れるほどの憔悴の中、再び出会った彼はまさしく救済の神だった。

…そういう意味では、わたしと彼の間に結ばれた約束は打算的なものだった。あの時のわたしは、国王が誰だって良かったのだ。ただ早くわたしの知っている世界に、育った世界に還りたかった。恋人の下へ　その想いしかなかった。

…そんなわたしの弱さが甘さが今、稔を追い詰めてしまっている。後宮を揺るがした大事件　国王暗殺未遂事件は霧島稔の傷付きやすい精神をずたずたに引き裂いた。それでなくとも慣れない環境、通用しない常識、未来への不安に押し潰されそうになっていた稔に、間近に迫った死の恐怖に抗う術などあるはずもなかった。

ようやく心に余裕を得ることが出来て、前向きに歩みを進めようとしたその瞬間の惨劇。

稔は一週間、その居室から一步も出ることは無く、またリディア以外の誰にも会うことはなかった。その一週間がどのようなものであったのかは彼とその専属メイドであったリディア以外は誰も知らない。彼らもまた、それを語ることは決してしない。

後宮主要メンバーのなかでは一番早く、一週間ぶりに再会した稔

は、一目でわかるほどに衰弱していた。頬がこけたりしているわけではないが、覇気がない。声にも張りがなく、真っ直ぐにわたしを見つめ返してきたはずの黒瞳は宙を彷徨って少しも大人しくしていない。

これは、わたしの知っている霧島稔本人か？

思わずそう胸中で呟いてしまうほどに彼は弱っていた。

そのとき、わたしは稔とどんな話をしたのか全く覚えていない。ただ脳裏に苦しみをひたすらに耐え忍ぶ彼の姿が焼き付いてしまっていて、それ以来まともに顔をあわせていない。

「お前のせいだっ！！」

そう罵られるのが怖くて。

「日本に帰らせてくれ！！」

と叫ばれるのが恐ろしくて。

他でもない、稔をこの世界に連れてきたわたしに全ての咎がある。そのことが分かっているとしても、受け止めることが恐ろしい。

…いや、本当はそうではない。わたしはただ自分勝手な理由で怯えているだけだ。稔が望むのであれば、すぐにでも彼のいた世界へ連れ戻すことは出来る。…でもそうしてしまつたら、わたしはまた独り国王探しの旅をすることになる。たった一人で。

「わたしは、最低な女」

歴代の召喚の巫女はただ王のみに忠誠を誓い、王に全てを捧げてきた。…それこそ、身も心もだ。

それは世界との決別の対価でもあった。全てのものを振り払って異世界にやってきてくれた人に対するせめてもの礼儀。

なのにわたしには恋人が既に居て、忠誠を誓うことはできてもこの身を投げ出すことは叶わない。そんな話をしたとき、稔は笑って許してくれた。好きにすればいい、と。

それなのに

「守れなかった。稔の弱さを知っていたはずなのに」

優しい稔を 守れなかった。

その後悔の念だけが膨れ上がってついには胸の内に収まりきらなくなつて…こうして一人の少女に吐き出しているのだ。滅多に使われることのない後宮に設えられたわたしの部屋で…わたしよりも、年下の女の子に。

その少女 リディアは優しく微笑んでわたしにお茶を勧められる。彼女のオリジナルブレンドの紅茶は絶品なのだ。…どうやら稔は分かっているようだったが。

「……ミノルさんは、誰も恨んでなんかいませんよ」

「…嘘が下手ね」

とてもではないが信じられなかった。

リディアの言葉を疑うわけではないが、稔は弱い人間だ。その身体にしても、精神にしても決して頑健ではない。だって彼は、世界という外圧に負けてこの世界に逃げてきた亡命者なのだから。酒の勢いでぶちまけた愚痴を知っているだけに、わたしにはその言葉が信じられなかった。

「本当なんですよ？ ミノルさんが恨んでいたのは、不甲斐ない自分。あまりに情弱で脆弱な己自身です」

それはわたしの知らない霧島稔の姿。

「『強くなりたい、強くなりたい』と呪文のように呟いておられました」

なんのためにかは、お分かりですよね？

海の色をした瞳がわたしにそう訴えかける。

もう二度と、辛い目に合いたくはないから。今度は、自分自身の力で乗り越えていきたいから。

だからこそ、人は強くなりたいと願う。

…そうだった。稔は過去と決別することで新たな人生を、後悔しない力強く生きる人生を歩み始めたのだ。嘆くだけの日々は終わり、路なき路を切り開いていくことを決めたのだ。

だからといって、「はいそうですか」と簡単には割り切れないけれど、気持ちは少し前向きになった。

「…わたしも、稔のことをとやかく言えないわね」

ため息交じりの微妙が零れる。偉そうに稔のことを焚き付けたくせに、わたし自身もこの様だ。

「いいんじゃないですか？ 弱っているときはお互い様…みんなで支えあっていきましょようよ」

リディアの微笑が眩しい。

慈愛に満ちた柔らかなこの笑顔は偽って作れるものではないだろう。

全く、頭が下がる思いだ。本当なら、わたしが相談を受ける立場だろうに。

「リディアは懐が深いのね…」

「…もし、そうだったとすれば、それはミノルさんの影響でしょうね。ミノルさんは、いつだってわたくしにいろんな世界を見せてくださいます」

例えば料理とか。

なんて、それは幸せそうな笑みを浮かべるのだ。

純粹に、稔の私生活に一番身近なのはリディアだからそれは役得なのだろう。そして彼女の見聞きしたものは料理という形でわたしたちにも還元される。

リディアが淹れてくれるお茶には漏れなく新作のお茶菓子が付く。それもこれもみんな稔との会話で得られたインスピレーションなのだとか。

以降、このささやかなお茶会はリディアによる料理談義へと変貌を遂げ、二度と恨み言云々の話が出ることは無かったがわたしには十分な答えになった。

稔は本当にわたしのことを恨んでなんかいなくて、本気の本気でこの国を愛しより良くしていこうと努力している様が一番近くで見ているリディアから聞くことができたから。

「…そういえば、ミノルさんがラフィリアさんを最近見ない、と仰っていましたよ？」

「…そう」

わたしはそれだけしか言わなかったけれど、密かに心に決めていた。

今度、飛び切りのお土産を持ってお茶会に乱入してやろうと。

革命とは。

広義においては国家などの社会組織の急激な改革をいい、狭義においては支配者層が握っていた国家権力を被支配者階級が奪い取って政治や経済の構造を根本から覆す改革を行うことである。

この二つの定義に従うのであれば、僕たちのやろうとしていることも革命の範疇に収まるのだが、目標は後者。手段は前者という微妙にちぐはぐなことになっている。

広義の革命は別に支配者が入れ替わることなく、制度や通例を大幅に改革することで支配者側から起こすことのできるもの。

対する狭義の革命は、支配者を入れ替え既存の社会体制そのものを一度崩壊させてから、被支配者層であった人々が主体となって作り直そうというもの。

しかし、僕たち いや、僕の考えている革命はこのどちらとも微妙に異なる。

できることならば、自らが権力を掌握して上意下達の大改革といきたいところなのだが僕にはその力がない。かといって市民が糾合して革命を起こせるのかといえばそれもまた困難なのだ。

ストラトに聞いた話、市民が蜂起して国家を打倒したという記録は一切ないという。精々、大飢饉などの折に食料を求めて一揆が起きた程度で組織的な反抗というのは例がない。そして、前例のないことをやれる人間はほとんどいない。これは発明と一緒だ。言われてみれば当然のことを一番最初に思いつけるかと言われるればそれがどれほど困難なことか。コロンブスの卵が良い例だろう。

話を戻そう。

つまりは、自分たちでは圧政を敷く腐敗貴族連中を打倒できないので市民の力を借りて支配者を打倒しようとしているのだ。本来であればそのまま政治を市民たちに任せれば良いのだが、そうもいかない理由がある。

それは有識者：つまり、教育を受けた者の数が絶対的に不足しているということだ。全体で見れば国家組織を維持していくだけの人数はいるのかもしれないが、その大部分は貴族であり支配者層に属する：つまりは敵である。貴族以外では商人などが豊富な知識を持っているだろうが、彼らもまた支配者層に組し、大部分の市民から財を巻き上げる行為に加担している者が多いだろうと予想できる。知識を有する大部分の人間が支配者側にいるとなつては革命を為しえたとしても早々に瓦解する可能性のほうが高い。あるいは、仲間割れの果てに群雄割拠などということになつては目も当てられない。

「ということは、だ。僕たちが主導して、市民の不満を利用して腐敗貴族どもをなぎ倒すしかないということか」

…言葉尻だけ繕つても仕方ない。

国家運営に携わる知識を持ち合わせている人物が元より少なく、その上革命が成功したとしても市民が運営していくことができないというのなら彼らを”利用”するしかない。実際の革命をやるのは市民だが手に入れた権力の座は僕たちが貰い受ける。

…なんとという横暴だろうか。しかし、市民を一から教育している余裕はないし、革命を知る人間が増えれば増えるほど計画は露呈しやすくなる。であれば、彼らには革命決行直前までやろうとすることを伝えずに完全なその場の勢いで行動してもらうしかない。こちらの都合で一番危険な役を押し付けることになる。良い様に使わざるを得ない。しかし、それでは

「略奪と陵辱の嵐が吹き荒れることになる」

一番考えたくない類の予想だが、今の計画のままでは間違いなく起こるだろう。支配者への恨みは根深い。それは年月の長さに抛らず、鬱積した不満の分だけ深くなる。そして、恨みというのは増幅しやすい感情だ。彼らが加害者の立場になったときどれほどの惨劇が平然と行われることだろうか。それを抑止もしなければならぬ。

…警沢を言いつぎているのだろうか、僕は？ 手段を選んでいる余裕などないのにまだこのような奇麗事に縋っている。やらなければ、危ないのは僕自身だと言うのに。

「あー、やめだやめだ！」

最近は何でも覚めてもずっとこんなことばかり考えている。

革命の理念や意義を考えなければいけないのに、つい思考が飛躍してしまう。もう夜も遅く、眠らなければ明日の活動に差し支えるという時間だ。…純粹に殺されかけた夜を思い出しそうになるということもあるけれど。それを別にしても往く路の険しさを思うと目が醒めてしまう。いや、むしろそのことを考えないために考え事をしていくのかもしれない。

…まただ。

また思考の悪循環に陥りそうになっている。一人の時間が出るたびに、僕の精神は暗い奈落へ落ち込みとうとする。それを自覚できるようにになったのは結構前。そして途中で思考を中断できるようになったのはつい最近だ。

耳を澄ませば聞こえる、もう一つの呼吸。その規則正しい寝息が僕に平静を取り戻させる。

その寝息の主は、リディシア・ロートリンゲン。

…誤解のないように言っておくが、別に疚しい事なんてなにもしていない。リディアが部屋の隅っこに安楽室からソファを持ち込んできて、毛布に包まって丸くなって眠っているだけだ。

暗殺騒動から今日まで、リディアはずっとこの部屋で共に夜を過ごしてくれる。ともすれば平静を失いがちになる僕を落ち着かせるために、だ。それこそ最初は不寝番で僕を看ていてくれたものだった。それが今は深い眠りに落ちている。独り言にも全く反応を示さない。…まあ、そんなことで起こってしまったら申し訳なくて仕方がないが。

暗殺騒動の一件以来、リディアは僕の精神の浮き沈みに敏感いや、過敏に反応するようになった。そうなるのも理解できるほどの醜態を披露してしまったのは僕自身なのだが…。彼女に余計な心配をかけまいとしてうるちに思考を強制的に切り替える方法を体得したのだ。今更ながら。

「眠ろう」

理想と現実が錯綜している頭で考え事しても意味がない。

理想は理想。

現実が現実。

建前と本音。

二者の妥協点を探すのはもつと後で良い。今は考える必要のないことだ。

そうだ。今度はストラトやラフィリア、それにジルヴァやレヴェツカたちにも革命をどう思っているのか聞いてみるのもいいかもしれない。

リディアは革命に”優しさ”を求めた。

みんなは一体なにを望むのだろうか？

この国に生まれ、育った者たちはなにを願うのだろうか？

三十六話 革命論 一章（後書き）

みなさまのご愛顧をいただきまして、総合評価813pt お気に入り登録件数276件 210000アクセス 31820ユニークに到達いたしました。（2010/4/15 23:15現在）

これからも更新を続けていきたいと思っておりますので、宜しく御願いたします。

「厳密には”革命”という単語はグラーフ王国 だけではなく、この世界に存在していないようだ。」

「僕はすでに”革命”という言葉が普通に使っていたが、それを皆が理解できないということもなくさしたる混乱も起きなかったのは、意思疎通のペンダントが上手い具合に言葉のニュアンスを翻訳してくれていたからだそうだ。」

「そこから導かれる事実は、この世界においては国家の興亡というのは全てが戦争などの外的要因によるものであり、内部崩壊という例はないのだということ。ましてや、政治権力の打倒などは思いも掛らないことなのだろう。」

「それゆえに、”革命”という言葉が存在しない。概念もイメージも、全てが無だ。あるとすれば、それは願望だ。」

「僕は現状で話し合いのできる人間を集めて革命に望むものを聞き出した。」

「リディアが革命に”優しさ”を求めたように、ストラトは”平穏”を。ラフィリアは”公正”を。ジルヴァは”正義”を。レヴェツカは”平等”を。それぞれ求めた。」

「それらは革命の内包する重要な要素である。僕の役目はその願いを実現する方策を示すこと。差し当たってはその革命の理念 理想を具現化することだ。」

「第一に、市民生活を維持、向上させること。」

「とにもかくにも、明日食べる物がきちんと保障されることだ。食べ物がある間は絶望もしなければ自棄にもならない」

「第二に、公平性の維持と徹底。

生まれや職業で差別されることは許されぬし、罪は罪として平等にこれを裁く」

「第三に、行政の改革。

国家は国民への奉仕機関に徹するべきであつて、市民の統制下に置かれるべきである」

全てを實行できないまでも、志として掲げるには調度良いだろう。こつそりと考えている腹案はいろいろあるのだが、それも全てはこの革命が上手く済んでからの話だ。それに物事はシンプルな方が理解が早い。そのくせ、考える場合には様々な意味合いで捉えることができるため、広い見方ができる。議論も白熱するだろう。

「できました！」

僕が口述していた基本理念を羊皮紙に書き付けていたリディアが声を上げる。

「ん。ご苦労」

言つて、リディアの頭を撫でる。書き物をするために椅子に座っている彼女は元々の背の低さとも相まって非常に撫でやすい位置に頭が来る。…またそれを嫌がるでもなく受け入れてくれるからこそ、つつい手が伸びてしまふのだが。

「やっと、第一歩ですね」

「ああ、そつだな」

掲げる目標は、あくまでも指標であつて完全に達成することは不可能だろう。

奇麗事であり、夢想であり、世迷言だ。

血の流れない革命はありえない。それがまるまる一晩考えた結論だ。

リディアには悪いが、誰も辛い思いをしないと願ひは叶えてやれない。将来的には幸せを掴む人間が涙を飲む人間より多くなるようにするつもりだが、産みの痛みを避けることはどうにもできない。

私人としては誰一人死んで欲しくはない。…というよりも、僕の指示ひとつで誰かが死ぬという事実を受け入れたくないだけ。しかし、王として 公人としての僕は否が応でも処断を下さなければならぬときが間違いなく訪れる。大を生かすために小を見殺しにする時が必ずやって来る。特別秀でるところのない僕には、超人ではない僕には両方を守りきることは出来ないのだ。

…そのとき、リディアは変わらずに僕の傍に居てくれるだろうか？それだけが不安だった。この柔らかな微笑が軽蔑や侮蔑に変わることに、僕はきつと耐えられないだろう。

「ミノルさま？」

撫でる手が止まったことを不審に思ったか、リディアが僕を上目遣いに見てくる。

「……リディアは、僕を見捨てたりはしないよな？」

こんな言い方は卑怯だろうと、僕自身思う。

優しい彼女が、否定などするはずもないのに。

「そんな悪いことをなさるおつもりなんですか？ …ですがご安心ください、ミノルさま。そのようなことをなさる前に、わたくしどもがミノルさまを止めて差し上げますから」

「冗談めかしてリディアは笑うけれど、そうではないんだ。僕が言いたいのは

「何度でも申し上げます、ミノルさま。

我が血命と命運の尽きるその日まで、わたくしは貴方様と共にあります」

泣いて、笑って、苦しんで、その全てを共に。

その声は真剣そのもので、咄嗟に思いついたアドリブでもでまかせでもないことが察せられた。

信頼ではない。

盲従でもない。

献身ですらない。

「運命共同体というやつか」

その真意は僕には分からない。

それでも、最後の最後までお供してくれるというのであればこれほどに嬉しいことはない。人身御供なんてナンセンスだとは思いますが、純粹に心強い。右も左も分からない異世界で、常識どころか言葉すら通じない世界で最後の最後まで傍らに居てくれるという。

これは絆などという綺麗なものではない。鎖であり、楔だ。切るうとしても切れない関係。投げ出すことも叶わない呪い。

リディアを見遣れば、満面の笑みと力強い肯定。

互いに血を流しあう関係になったとしても、共に在り続けようと

いう血盟。

…いいだろう。リディアが覚悟を決めているのに僕が迷っているなんて格好の悪い真似はできない。ならば、実行の暁にはどこまでも冷酷に冷血に事を成し遂げよう。万難を廃し、新たな国家を建設して見せよう。

「僕も誓おう。」

この身命を賭してグラーフ王国に黄金の時代をもたらして見せよう」「

三十八話 幕間

剣閃が走る。

とはいっても木剣でしかなく、余程の事がない限り大きな怪我にはならない。しかも、扱っているのが素人同然とあっては。

しかし、妙な緊張を強いられているのは籠められている気迫の違いだ。訓練でしかないはずなのに、真剣以上の力がその目には宿っている。

次々と繰り出される剣に打ち合わせるように剣を振るっても彼は決してその手を離すことはなく、更なる剣戟を重ねてくる。

「……ッ！」

このままでは気に飲まれかねない。

そう判断して、対応を切り替える。防御から攻撃へ。いくら気迫が籠っていていようと手数数は圧倒的に少ない。攻撃の合間に反撃を加えることは極めて容易。

振り降ろされる剣を軽くないなし、これまた軽く突きを見舞うだけで盾に身を隠し攻撃の手が止む。気迫と腕が全く釣り合っていない。何度言っても手が止まる。

しかし、確実に進歩してもいるのだ。盾の上から力一杯殴りつけてもこの身体は揺らぐことがない。以前扱っていたよりも大型の騎乗盾は小柄な全身のほとんどを覆い隠すほど。その分重く、扱いても難しいというのに上手く扱えているようだ。

…あるいはほぼ全身を覆い隠せるという点が有利に働いているのかとも思う。

「まだまだ、こんなものでは終わりませんよ、”陛下”！」

ボクは声高く宣言し、猛烈な連撃を加え始める。

袈裟、逆袈裟、横薙ぎ、刺突。それも半端な力しか籠らない片手ではなく、両手で叩き込んでいく。こちらがボクの元々のスタイルだ。後宮に来る前は騎士団に所属していたから騎馬戦闘も学んでいるが、徒歩戦闘がボクは得意だった。それも盾を使うよりも、両手剣で戦う方が。

普段から愛用する得物は俗にバスタードソードなんて言われる片手半剣。片手でも両手でも扱えるというシロモノで斬るにも突くにも適した一見便利そうに見える武器だが、普通騎士が所持しているロングソードよりも長く、また重い為に好んで使うものは少ない。父ほど体格に恵まれているわけではないが、訓練を怠らなかつたこともあつてそんな難物を扱うにも不自由は全くない。

木剣と真剣ではかなり勝手は違うけれど、本気で剣を叩きつけている。なのに、揺らぎはしても決して崩れない。木剣を通じて伝わる感触は頑強そのもの。

前に稽古をしてからもう随分になるが、その成長は目ざましいものがある。打ち合うことに退けていた腰は、今やどつしりと構えている。そして筋力も増しているのだらう、生半な攻撃では打ち崩せない。

これも陛下の恐怖への防衛反応なのだろう、とボクは思う。

リディアさんから聞いた話だが、陛下はかなり念入りに筋力トレーニングをなさっていたらしい。他でもない、身体的劣勢を補うためだ。あの殺されそうになった夜を克服せんがために。

そう、これは負けないための戦い方だ。

分厚い板金鎧を身に纏い大盾を構えいかなる攻撃をも耐え忍ぶ。子どもの頃に読んだ騎士の御伽噺に良く似ている。常に民衆の盾であり続けたその騎士は最後にどうなったのだったけ？よく思い出せない。

もはや鈍器による殴打と変わらぬ斬撃の嵐の前に、ついに大盾が弾けとんだ。腕をもぎ取らんばかりの勢いで訓練室の端まで転がっていく。それを目の端で追いつつ、最後の反撃とばかりに突き出された木剣を跳ね上げた。

試合終了。

訓練室の天井に跳ね上げた木剣が当たり、一拍置いてからんとい音を立てた。

黒い髪、ボクから見れば幼く見える年上の主君　陛下はそのまま崩れ落ちるように床に大の字に寝転がった。

「やっぱ、勝てねー……」

ぜつ、ぜつ、と全身汗まみれで、粗い息を吐いている。

「子どもの頃から剣を握っているんです、そう簡単に負けるものですか」

それこそ、つい先日まで食器のナイフも握れなかった人間に負けるはずもない。…むしろ今日になって突然、今まで手に取られることもなかった木剣を持ち出し、訓練に呼び出されたことの方が驚きだ。

前回会ったのは陛下の暗殺未遂があつて一週間ほどした一度きり。それから一ヶ月近く、書簡のやり取りだけでとても会える状態ではないと聞いていたから尚更だった。

久方ぶりに対面した陛下は、人が違ったようだった。

悪い意味ではなく、良い意味で。

少し痩せたように思う身体も、相変わらずの目の下の隈も気にならないほどの落ち着いた雰囲気こそう感じさせたのだと思う。

自棄でもなければ、努めて前向きになろうとしているわけでもない。はたまた諦観でもなく。

一体この一ヶ月の間になにがあったというのだろうか。

「なあ、ジルヴァ。今日の動きはどうだった？ 久しぶりにしては悪くなかったと思うんだが」

「守りに徹したやり方としては悪くなかったと思いますが、盾はもっと柔軟に扱わないと真剣で戦ったときには割られますよ。力任せに受け止めるのが盾の本来の扱い方ではありませんからね」

本来は致命的な一撃を防ぐ、矢を防ぐといった予防的なものでしなく、破壊力を増すように作られた鎚矛の一撃などを受けようものなら腕ごと砕け散りかねない代物だ。主な素材が木と革ということもあるが、腕で保持する以上は鉄製にするわけにもいかないのだ。

「今日みたいな使い方は駄目、ということか」

「少なくとも、常道ではありませんね」

「…元より、常道など歩いてこなかったよ」

軽い笑い声が漏れる。

確かに、静かに息を潜めて転覆の機会を作り出しひっくり返してやろうとあの手この手を使おうとしているボクたちは、常道からかけ離れている。

「しかし、陛下。剣の扱いはお粗末なものです。よくよく訓練なさってください」

「…分かった」

元々武道の心得があるわけでもない人間が急に上達などするはずもないが、陛下は良く頑張っているといえる。

それに、不自由な身の上で身の丈にあつた武具が用意できないのも問題だ。一口に剣とはいっても種類は多岐にわたるし、鈍器や長物まで含めればどれほどあるやらといった数になる。

不穏な行動と思われないうちに物資の移動に関しては、嚴重すぎるほどに神経を使っている。少しでも疑われるようなものを運び込んではいないのだ。

…後宮で武器戦闘をしなければなくなる状況というのがまたありえない話でもあるのだけれども。

「そうそう、ジルヴァ。近いうちに革命の指南書を手渡せるものと思う。よくよく皆で話し合つて理解を深めてくれ。」

革命の精神が理解できたら次にやってもらわなければならないことも山積している。これからは忙しくなるぞ」

大の字のまま、口角を僅かに持ち上げて意地悪そうに陛下が笑う。その表情になんとなく悪戯心を刺激されてボクもつい言い返してしまつた。

「陛下も、盾の扱い方というものをボクがみつちりと叩き込んで差し上げますよ」

三十九話 革命論 三章

「おーおー、苦勞しているみたいだなあ」

ストラトから先日手渡すことのできた革命の教科書。その第一次討論の結果を聞いてつつい底意地の悪い笑みが顔に浮かぶ。

その出来はといえば、予想していた通りの酷いもので僕はその添削作業中、というわけだ。

「陛下…お戯れにしては度が過ぎるように思いますが…」

「冗談でもなんでもないよ。これからあいつらはもつともつと苦勞することになるんだ、これくらいのこととはしてもらわなければ」

そう。

三行半ほどの文章でしかない、指南書というよりは覚書程度のものでしかない薄っぺらな紙を一枚だけジルヴァとレヴェツカに手渡したのはつい数日前のこと。受け取ったときの二人の顔は未だに忘れられない。

露骨な失望と、拍子抜けしたかのような落胆ぶり。それはもう、見ている気の毒なほどだった。

しかし、その程度のことへこたれてもらっても困るのだ。革命の中核になるのはほかでもないジルヴァたちであって、僕は付属品でしかない。おそらくはこの世界に存在しない概念と思考で閉塞しきった社会に穴を開ける、ただそれだけの役割だ。

だからこそ、基本的な指針となる三ヶ条だけをなんの補足もなしにジルヴァたちに放った。

もつとも、ストラトが言うように無茶を要求しているのも事実な

のだ。僕の世界での常識はこの世界で通用しないのに、それを頭からひねり出せというのだから無茶もよいところだろう。だが、無理難題であつてもやつてもらわなければならぬ。できてもらわなくては話が前に進まないのだ。ある程度の手助けはするにしても、この革命を成功させるのは他でもないジルヴァたち自身であつて僕ではない。

革命の概念すら存在しなかつたこの世界で、一番正しくその内容を理解しているのは僕だ。しかし、人間はその思考の全てを他者に伝えることはできない。生まれ育つた過程、経験、知識、倫理観。その全てが一人ひとり違うのだからそれは当然。だから、僕の抱いている革命の概念ひいてはそこにいたる思考をジルヴァたちに理解させることは不可能である。にもかかわらず、革命実行の主役は彼ら…。

つまる話が、ジルヴァたちにこの世界での革命の概念を新たに創造してもらわなければならぬということだ。仮に僕が革命の何たるかを教えたところで他人からの受け売りでは、どうしても理解不能な部分が出てくるのだ。曰く、その価値観であつたりするものが故に、ジルヴァたちには真つ白な状態から全てを積み上げていく作業してもらわなければならぬ。そこに僕が監修を入れるにしても、大変な作業だろうことは容易に想像できる。だが、そうしなければならぬのだ。この国は、彼らの国なのだから。

「国民生活を維持、向上させていくのは国家の義務である。」

これは僕が教えたことだけど、その裏を読んでもらわないと困る。確かに、国民を養っていくのは義務だけどそれだけじゃあない。…組織を率いていたストラトにならわかるんじゃないのか？」

「…一組織と国家を比べられても困りますが…そうですね。飴と鞭といったところででしょうか？生活を保障する代わりに、なにかしら国民に求めるところがある、ということでは？」

「そういうことだ。」

もちろん、国民を手懐けるという意味合いも多分に含む。しかし、本題はといえば恩を売る代わりに危急の際には国民に負担あるいは協力を求めることもある。そういった場合に備えて信頼を得ておくこと。それが一番の目的だ」

…勿論、これがその理由の全てではない。僕が思いつけるのがこのあたりまで、というだけでもつと深い理由も探せば見つかるのかもしれない。いや、むしろその理由を掘り下げていくのがこの作業の目的ですらある。

考える頭はひとつより二つ。二つより三つなのだ。個人の思考から生み出されたシステムはこの個人が失われてしまえば容易に溶解するのに比べて、比較的腐敗に強いというのが複数の思考を束ね合わせたシステムだという側面もある。その反面、対立し相反する主張を纏めることが非常に困難でもある。…そこが悩みどころだ。

「二つ目…。こいつはまた酷いな。」

平等と公平…現実には有り得ないこととはいえ、一応の建前くらいは考え付いてほしいものだ。…それにしても、無理な話か…」

自由と平和、そして平等を謳っている日本という国でも、身分の差や生まれの不平等、それから派生する不公平というのは厳然として存在しているのだ。…国民総中流といわれ、世界で一番公平に富の分配された国。世界でただひとつの国である日本ですら。

弱肉強食が原則である中世世界ならそもそも平等や公平という概念すら存在しない。世界はもとより不条理なもので、厳しい現実を受け止めその中で幸せを見つけてささやかに生きていく。それが”この世界での普通の生き方”なのだ。

唯一、評価できる点があるとすれば、レヴェツカが言及している

女性の権利・地位の向上に対する点だろうか。家督相続権など、具体的なものとしては非常に貴族的な考え方だが、主張の方向性だけは間違っていないように思う。グラーフ王国における女性の地位がどれほどのものかという、基本的な知識が欠落している僕にははっきりとしたことはいえませんが過去の例に学ぶのであればかなり低い扱いになっている可能性がある。

しかし、彼女たちを革命に引つ張り込めればかなりの力になる。人口の半分は女性なのだから。労働力としても作業内容次第では男性以上の戦力にもなるだろう。要討論。

「…ため息を吐きたそうな顔をしておられますな」

「仕方のないことだと理解しているよ。なに、もう少し回復したらあいつらの横つ面を直接張りにいくさ」

その前に、自分自身の腹を括り直さないといけないけれど。

なんとかするしかないのだ。

できるできないではない。”やる”のほかには選択肢はない。

引き返すことのできる時期はとうの昔に過ぎ去った。

戸惑い震え、涙する日々もすでに過去になった。

変わらなければいけない時期が来たのだ。

僕も、この国も。

四十話 革命論 四章（前書き）

長らくお待ちしました。

∴ その割には内容がアレですが∴。クライマックスに向けて超展開を開始するかもしれないです。

四十話 革命論 四章

数度の書簡の遣り取りを経て、僕はついに直接指導に踏み切った。
…なんて、いかにもジルヴァたちの出来が悪いような言い分だけれど、そんな事実は無塵もない。彼らは意欲的であるし勤勉だ。僕なんかよりずっと。

はじめから全部僕が悪かったのだ。この弱い心のせいで、非効率的な手段をとらなくてはならなかっただけ。元々が困難であることをやっているというのに意思伝達の効率を下げたさらにそれを難解なものにしていった僕の責任。自業自得だ。

「いいか。革命と呼ばれる行動には、大別して二通りがある。夥しい血を必要とする暴力革命と、話し合いによって達成できる平和革命の二つだ。さて、僕たちが目指すのはどちらの革命だ？」

困惑の声が上がる。

それも当然。僕たちがやろうとしていることはこの両方だ。暴力的な手段を用いて、平和裏に革命を成功させようなどともくろんでいるわけだ。

平和革命はそもそもが革命によって引き起こされる夥しい流血を理性を持って回避するために登場したもので、革命の根源にあるのは暴力性である。不平不満の反動の高まりは最終的には暴力という形で噴出する。行き場のないエネルギーが荒れ狂う。

それを巧く誘導し、方向性を持たせることで暴力性を限りなく押さえ込もうというのが僕の考えだ。

「為政者が権力を手放すことを潔しとしない限り、平和革命は成り

立たない。しかし、暴力革命ではすでに疲弊しきった国民にさらに負担を強いることになり、後の秩序回復が困難になる。それでは革命を成功させたとしても、その後に課題を持ち越すことになる。

これらの課題をクリアするには、だ。革命のお膳立てを全て我々の手で成し遂げ、最後の仕上げに国民の奮起を促すという方法を取るようになる。まあ、方法論については後々諸君らと協議を行うことにして……。革命に身を投じる者として、忘れてもらっては困ることがある」

僕は一度言葉を切って、一同の顔をゆっくりと見回す。

革命を指揮することを決意してから半年どころか四ヶ月も経ってはないが、それでも共に過ごした時間が希薄なものであったはずもない。一人一人の顔と名前を反芻しながら言葉を重ねていく。

「僕たちが人間であるように、相手もまた人間であることを忘れてないでほしい。

どれほど非道な相手であったとしても、どれほどの外道であったとしても。僕たちは人間を相手にしているということを忘れないでほしい。

僕たちと同じように笑い、涙を流し、時には怒りもする。そんな人間であることを、決して忘れないでほしい」

それがどれほど難しいことか。

反発心と、あるいは憎しみの感情を原動力に革命を画策しながらもそれを否定しようとしている。

なんとという無謀。

なんとという愚行。

なんとという妄想。

僕はそれを求めよう。

無理のある高潔を。

無茶を押し通す理性を。

「僕たちは！ この世界に新しい歴史を作る！

その歴史を血を以って赤く彩るか、その分岐点がこの革命だ。僕たちが暴力に訴え、憎しみで国を奪い取れば次は我が身だ。だからこそ、我々は高潔で誇り高くあらねばならない。その第一歩としての革命だ」

完全に流血を防ぐことは絶対にできないにしても、それを肯定しない強さを。仕方ないと認めてしまわない、そんな強さを。僕はあの人から学んだ。…いや、人間として当然のことに気付かせてくれたというのが正しいだろう。もちろん、”非常時”に”常識”を持ち込むことのおろかさは承知している。それでも必要だと思ったのだ。この世界で新しく語られる、夢が。

人は前例に倣う。だから、血に染まらない革命が必要なのだと、僕は思っている。だから、無理を強いるし無茶を要求する。

”新しい革命概念の構築”

それが僕の狙い。

言葉すら存在しなかった革命を、流血を伴わないクリーンな政治主体の交代手段とすること。

国家の側には潔さを、国民には自立心を。それぞれに歩み寄りを。そんな絵空事が実現するはずもないが、それでも僕は願ってやまない。なまじ、命の儂さというものを自分自身の身で知ってしまったがゆえに。

僕は甘い。

こんな生易しい方法で計画が立ち行くはずがない　　そう冷静に判断している僕が居る。

きつと、その判断は正しいのだろう。僕は決して正しいやり方を

選んではない。美しくはあっても、決して正しくない。

どれほどの血が流れたとしても、革命を完遂するのが正しい路だ。短期的には大きな損失ではあっても、長期的に見れば大々的な改革は概ね上手くいって国は栄えるだろう。

でもその道を敢えて僕は選ばなかった。

その流されるであろう血の多さに、僕はきつと耐えられない。そして失うものの多さに耐えられない。

だから

「いいか。くれぐれも忘れるな。僕たちが人間であるように、相手もまた人間であるということ！」

僕は声を張り上げた。

これでもう後戻りはできない。一度口に出した言葉はもう引っ込められない。

「馬鹿め」と笑う自分の声がする。

馬鹿でも構わない。今までの僕は、理屈をこねるだけで一度も実行には移してこなかった。それを变えるには、今しかないと思うから。

変革の時が来たのだ。ただ受け入れるだけの变化ではなくて、自分から変わるうとするときが。

四十一話 経年

革命が現実的に動き出した。

方針が定まってくればなにをしなければならぬか、なにを準備し、どうしなければならぬかが見えてくる。

確固たる信念を討論を通して固め、熟成させていく。

目指すべき将来像を思い描き、それを共通の理想として計画を進めていく。

思想教育。

革命計画。

実行計画。

進行予定。

挙げてゆけばキリのないほどの計画予定が必要になってくる。しかし、それを全て僕が準備するわけにも行かないから当然、後宮に集った仲間たちにそれを割り振っていくことになる。大まかな方針だけを伝えて各所を詰めさせて全体で協議、最終的に僕が監査する。そんな具合で大まかに準備を進めていく。最初からきつちりと組み上げていかないのは今後方針の変更があつた場合に対応していくために、計画全体に余裕を設けておく必要があるからだ。

やらなければならないことは革命計画の策定だけではない。革命を成功させた後、どのように国を治めていくか。混乱の極みに陥っているであろう諸地方をいかに迅速に收拾するかの方策の検討。以後の政策方針。行政計画 e t c . . . とやることは山積みだ。

計画の大筋は、市民を中心として革命組織を作り、行政府を襲撃・

占拠するというもの。

ただやることを言葉にすれば簡単だが、事は簡単には進まない。今の権力は完全に貴族が握っているし、反対に僕たちにはなにもない。あるのはわずかばかりの志だけというお寒い状況。

それでも、そんなだから付け入る隙もある。

行政が腐敗し、国民を抑圧すれば彼らは彼らで身を守るための行動を起こし始める。市民同士、個人同士の結束は強くなって対抗しようとして動き始める。僕たちはそこに働きかける。強い人の結びつきを利用する。

「いきなり市民全員を革命に参加させる必要はない。組織には顔役やリーダーがいるから、まずはそんな人物と顔をつないで準備を始めればいい。全員を巻き込むのは最終段階、仕上げのときだけいい」

秘密保持の鉄則は、秘密を知る人間をできる限り少なくすること。国家転覆などという重大すぎる秘密を早々に国民に知らせてしまつてはいくら入念な準備をしても全てが無意味になる。仮に「義に厚い」と一般に評される種族が居たとして、その彼ら全てが一樣に儀礼を重んじるわけではない。中には軽薄な者もいれば残忍なものもいてあたりまえなのだから。

現状、国の状態に不満を持たないものは貴族で恩恵を被っている者たちだけ。不満の種はすっかり成熟し、発芽のときを待っている。土壌もすっかり準備が整っている。向けようのないエネルギーを導くのは酷く簡単だ。爆発寸前。臨界直前。問題は、それが暴発しないように間違ひなく誘導すること。その方法については幾度も討議を重ね、何重にも保険をかけた。最悪の場合でも、被害が小さく収まるように。

もちろん、国民の感情を煽って原動力にするだけでは足りない。

彼らにエネルギーはあっても財力も、武力も持ち合わせていないただの”数”でしかない。確実に革命を成功させるには”数”と”力”と”策”が必要になってくる。理想的な革命のためにはそれらが不可欠になってくるから、当然それも確保する。

狙うのは地方に放逐された貴族たち。その中でもマトモそうな連中。…とはいっても、僕自身が出かけて確認することはできないから信頼の置ける人物に交渉を任せることにはなるが、国の現状を憂えているのであればまず間違いなく協力が得られるだろうと僕は考えている。それに、人間の中にもいろんな者がいるように、貴族の中にも高潔な人物というものは居るものだ。時代の流れに乗れない古く不器用な連中が。僕はそんな彼らに期待している。…まだ見ぬ存在すらも確かではない彼らに。その足がかりとして、以前僕を暗殺しようと送り込まれてきた暗殺者を解放し、使者として送り返している。僕にとっては触れたくない案件でもあるため、詳しくは聞いていないが、迅速な返答があり既にストラトが交渉を開始していると聞いている。同時に、件の暗殺集団『曙』の協力も取り付けたと報告を受けている。…僕個人の感情としては複雑ではあるけれど、彼らの存在は革命の成功率を押し上げることは間違いない。

そして最後の”策”を整えるのは僕の仕事だ。

たいしたことができる立場ではないけれど、”形だけでも”僕は国王なのだから、ある程度融通を利かせることもできるだろう。それも、腐敗貴族たちにとって都合のよい人形であることが必要になるけれど。彼らの権益を侵さない程度の行動は起こせる。無害で無能な羊を演じ、その中で王城内部にも協力者を募ることができれば最高だといえる。上辺の道化を演じるには欲に溺れ、放蕩三昧をしているように見せかけることだ。そのための役者もストラトにリストアップさせている。

無知無能を信じ込ませ、仕上げに行う国を挙げての祝賀会。それが革命の合図。

国中から貴族という貴族を全員招聘しての大式典。よくよく国を治めてくれている臣下への褒賞としての祭典。

もちろんこれは、表向きの話。実際にはこの式典を革命に利用する。当然、国中の要人が集まるのだから警備は厳しいだろうが、そこはそれ。裏側から手を回してできる限りを無力化する算段を立てている。

そして、全員を一網打尽にすることによって革命は完成する。貴族連中を打倒するにはこの上ない機会だ。…まあ、僕の自作自演なのだけ。

正直な話、こんなに話が上手くいくとは思っていない。

どこで計画に綻びが生じるか、あるいは問題点が見つかるか。どんなミスが起こるかなんて、全くわからない。自信満々に皆に語っては見せたけれど、僕は革命運動に参加した戦士でもなければ革命家でもない。純粹に、ただの一市民でしかなかった存在だ。その場で問題に対処していくしかないという精緻に見えて幼稚な計画。信じてくれる皆には申し訳ないが、成功の確率はそんなに高くない。

「やれることを、最大限にやるだけのことだ」

他にもない。自分自身が生き残り、目標を達するために。

そして、大切な　　優しい人たちを喪わないために。

四十二話 革命前夜？（前書き）

…書きたいことは固まっているのに筆が進まない毎日です。

それでもどうにかこうにか更新…。もうちょっとなんとかしないと

…（汗）

四十二話 革命前夜？

光陰矢のごとし。

今は遙か遠き故国に伝わることわざだ。さらに元を辿れば中国の漢詩を起源とする。

…まあ、そんな蘊蓄はどうでもいい。振り返れば日本を飛び出してもう三年になるうとしてしている。

革命の準備を始めて此の方、増加の一途を辿っていった処理しなければならぬ案件を記憶するために日記という形で覚書を残すようになり、それがいつしか日記という形を取るようになったのはいつからだっただろうか。

…実際にはそれすらもどうでもいいことだ。

明日、僕たちは革命の決行日を迎える。

どうにか作戦が露呈することなく、今日までやってこれたことはもう奇跡といっても差し支えないものだと思っている。もちろん、作戦が露呈しないために欺瞞情報を振りまき、時には囿まで用意して水面下で進めている革命から意識をそらせてきた成果でもある。まあ、僕はその指示を出しただけで欺瞞作戦自体は全て、ストラト率いる『曙』の連中がやったわけだけだ。

もう月が天井を超え、沈み始める時間。革命前夜の後宮はひっそりと静まり返っていて物音ひとつしない。まあ、それも当然で後宮には今ほとんど人が居ない状態だ。革命組織の運営・準備のために7割方の人員が野に下っている。第一陣であるところの、ジルヴァやレヴェツカたちが後宮を去ったのが一年半前。そして新たに召集した貴族の子弟、そして外部の革命協力者 市民や地方貴族の子弟たちに革命教育を施して再び送り出したのが半年前。それから極少数でのひそやかな生活が続いている。全員で三十人ほどが後

宮に残った。対外的には後宮にハーレムを作って贅沢三昧を尽くしている振りをするためにも、位の高い者とヴィジュアル重視で残留してもらっている。また、無能の欺瞞にしても信憑性を持たせるために名立たる美姫たちをスカウトして回る…などということまでやってのけた。結果からいえば、半分は召集そのものを拒絶。もう半分は革命に参加する戦士となってほとんどが野に下っていつて後宮には残っていないのだが。例外は”王国の秘宝”と揶揄される一人の女性のみが、革命のラストを彩るキャストとして残っているだけだ。

ケーニヒ家。

代々白髪紅眼の端麗な容姿が特徴的な、王国建国以来の名門貴族。貴族の中の貴族として、国民からも愛され、慕われている。そして代を経ることに変わる国王を支え、絶大な信頼を寄せられ続けてきた一族でもある。忠義に厚く、公正明大で国民を第一に考えていた彼ら。王国にその名を知らぬものなしとまで言わしめる、まさに国家の屋台骨であった。

そもそも、召喚王システムなんて不安定極まるシロモノが実際に運用されてきた背景には、ケーニヒ家の力によるところが非常に大きい。

国民からすれば召喚王などは信じるにも、慕うにも値しないただの他人であってまかり間違っても自分たちの王として認められるものではない。しかし、ケーニヒ家がその間に入り、王を支持し盛り立ててきたからこそグラーフは成り立ってきたのである。…つまりは代理信任だった、というわけだ。

”ケーニヒ家の方々が支持してるのだから、この王様は大丈夫だ”
”なにかあったら、ケーニヒ家の方々が王をお諫めしてくださるだろう”

”ああ、その通りだ。ケーニヒ家がある限りグラーフは安泰だ”

…”

そうまで言わしめる絶大な信頼が、下地として存在していたからこそ召喚王システムは機能していたのだ。

…そして先日。そう、革命前日の昨日になってようやく、その重要人物を口説き落とすことに成功した。ケーニヒ家”最後の”生き残りである、ルクレイシア・ケーニヒを。

どうして最後なのかは言うまでもないことだが、政争に敗れた結果だ。そして、一族は腐敗貴族の権勢を脅かす危険因子として徹底的に狩りつくされ、最後に彼女が残った。…何故彼女だけが残されたのかは分からないが、当時まだ幼かった彼女を手にかけるのをためらったのかもしれない。あるいは、ケーニヒ家ありき、で成り立ってきた王国からその血が絶えるのを恐れたのかもしれない。そして時を経て、人前に出ることなく、人々から絶望と希望を投げかけられながらも忍んできたルクレイシアはいつしか、”秘宝”と呼ばれるようになった。貴族たちからは、白髪紅眼の宝石として。国民からは最後の希望として。それぞれの想いを込めてそう呼んでいるという。

そのルクレイシア・ケーニヒを陣営に引き込めたことは大きい。彼女の存在は国民の支持を集め、事後のことをやりやすくしてくれることは間違いない。腐敗と、不正の蔓延る時代だからこそ、清廉潔白公正明大であるケーニヒ家が望まれているのだ。…そして、僕が正式な王として認められるためにも絶対に必要なことでもあった。…もちろん、代償は決して安くなかったけれど。

…まあ、ともあれ”王国の秘宝”と呼び名され、尽きることのない信望を集めるケーニヒ家の協力を一応は取り付けることに成功したのだ。革命前夜にして、僕の策は全ての展開を完了した。そして明日が本番。

革命最後の仕上げ

王国祭に参加するために、国中の貴族た

ちがすでに王都に集結している。…彼らを一箇所に集めるにあたってもまた一苦労あったのだが　まあ、それは揚げ足取りのようなものだったので別段語るほどのことでもないだろう。また、時を同じくして革命の実行部隊も、そしてその支援に当たる『曙』のメンバーも、その全員が明日、舞台に昇る。

…すでに日記というには無理があるほどに文字を重ねている。自身、緊張と興奮の渦中にいることも理解しているので、筆の進むまに字を書き綴っている次第だ。…こんな書く意味もない言葉の羅列を続けてしまうのも、明日にはこの命が尽きるかもしれないという身の上ともあれば、許されるだろう。この世界に、確かに存在した証を残したいという欲求が全くないわけでもない。…未だにこの世界の文字を書くことがままならないので、慣れ親しんだ日本語で書かれている日記だ。まかり間違っても後世に残ることはないだろうけれど、願わくば再びこの無意味な文字列を綴る機会に恵まれんことを切に願うばかりだ。

霧島稔。

四十三話 革命前夜？（前書き）

…思ったより長くなってしまい、前夜は？まで続きます。

四十三話 革命前夜？

夜 後宮の見回りをするのが癖になってしまったのはいつから
のことでしょうか。

三年前、両親の友人でありいろいろと面倒を見てくれたストラト
おじさまが引き合わせてくださったご主人様は どこまでも普通
の人でした。

聡明で。

賢明で。

博識で。

優しくて。

でも、とても脆い人。

後宮で起こってしまった暗殺未遂事件は、その弱い心を完全に打
ちのめしてしまうほどの衝撃をミノルさんに与え、その傷も完全に
癒えることもないまま、ミノルさんは革命を指導し活動に没頭して
いきました。∴ それこそ、凄惨な記憶を忘れようとしているかのよ
うに。

∴ 日中はそれでもよかったのかもしれませんが。しかし、夜はそう
もいかないということをおたくしは知っています。

夜はどうしようもなく独りになってしまっ

その暗さが。

先の見えない不安さが。

傷の癒えないミノルさんに重く押し掛かっていることを。

そのことを知っているのは∴ わたくしと、ミノルさんだけ。他の
人も気付いてはいるかもしれないけれど、基本的に後宮深部 ミ
ノルさんの寝室近辺はプライベートエリアということで、余程のこ
とがない限りは近づかないのが暗黙の了解になっているから、確証
には至っていないと思います。

事件から半年あまりは寢室にずっと居候していたのですけれど、ミノルさんの気持ちが安定してくるにつれて、革命の準備が忙しくなるにつれてわたくしの足は寢室から遠のいていきました。…ただのメイドでしかないわたくしが、いつまでも国王の寢所に居座るわけにはいかない、とそう思ったからです。…というのはただの建前で、心が落ち着いてきたのはわたくしも一緒のことで気恥ずかしさが芽生えたのです。ミノルさんにしてもそうで、わたくしの存在が逆に心を騒がせてはいけない、とも。

とはいえ、ミノルさんの心が急に強くなるようなこともなければ、不安がどこかに消えたわけでもありません。ましてや、目の前に山積みになった問題が減ったわけでもないのです。

状況は進んでいます。ですが、なにひとつ改善も解決もしていないのですから。

だからこそ、ミノルさんが心配でなりません。一時よりは良くなったとはいえ、ミノルさんが不安定なことに変わりはありません。いつ、どこで、なにが引鉄となって恐慌に陥るか分かりません。主であるミノルさんに対しては失礼だとは思いますが…心配というよりは過保護。あるいは不信の域にまで達しているのかもしれない。

そんな気持ちだが、思考がわたくしを夜の見回りに駆り立てるので

す。どれほど疲れていても、深い眠りに就いていても、突然目が覚めてしまうのです。妙な胸騒ぎがして、飛び起きたことも二度や三度ではありません。そういうときには決まってミノルさんが悪夢にうなされていくのです。そんなときは、声をかけるでもない、起こすでもなく、そっと手を握って差し上げる……たったそれだけのことで穏やかな眠りに落ち込んでいく。穏やかな眠りに戻っていく。その瞬間、わたくしは自分がここにいる意味を深く深く感じるのです。わたくしの役目は、この方の心をお守りすることなのだ、強く感じるのです。

…正直なところ、メイドの領分を超えているなあ、とは思っているので

す。

メイドとして、教えを受けた内にも”主に過分な思い入れを持つな”という話を幾度となく聞かされました。本来、メイドというのは家に仕えるものであって個人にお仕えすることはありません。お付きのメイドであるにしても、一生をその主だけに仕えることはほとんどないからです。

…そしてもうひとつ。

”これだけは努々忘れるなかれ”と教えられたことがあります。

異性の主に仕える場合。それも身分の高い主に仕えるのであれば、使い捨てにされることも覚悟しなければならぬ。年若い娘は特に！と先生は常日頃から言っていました。

年若い娘をメイドとして雇いたいというのは大抵が特殊な場合です。貴族の令嬢にお仕えする場合か、あるいは貴族の道楽、愛玩用等々……”身の危険”が身近な場合が多いのだと教わりました。実際の話、一緒に教えを受けた方々はほとんどがある程度お歳を召してらっしゃいましたし、作業などもわたくしなんかよりずっと手際良くこなしておられました。曰く、「年季が違うのよ、お嬢ちゃん」と言って笑いながら、様々なことを教えていただきました。…話が逸れましたけれど、つまりはわたくしたちを必要とするのは先ほども申し上げた特別な方々です。…実はわたくしも特別な例なのですけれどね。人里育ちのエルフ…そんな特異性は、わたくしにはとても悪い方向に作用しました。…それこそ、主のもとへ送り出すことができないほどに。

先生はとても強い信念と矜持を持ったお人でしたので、自分が大丈夫だと判断した人間にしか教え子を託すことをしませんでした。…そのお陰で今のわたくしがあるのですが、このご時世に”エルフの年若いメイド”などを連れ出せば大変なことになる、と先生は分かっていたらっしゃったのでしょう。どのような”酷い目”に遭わされるか、考えたくもない…そう吐き捨ててずっとわたくしを手元か

ら離しませんでした。ストラトおじさまから、声がかかるまでは。

先生はそれにもいい顔はしませんでした。身の危険はもとより、王宮などという魔窟に教え子を送り込むような愚かなまねはできないと反対しました。わたくしも最初は断ったのです。お仕える最初の主が国王陛下だなんて、恐れ多いにもほどがあるし、なによりあまりに突飛な話で怖くなってしまったのです。そんなわたくしに、ストラトおじさまは「あの方にはお前のような人がそばに必要なのだ」と頭を下げて「主として気に入らなければ、私が責任を持って返す」とまで言うてくれたのです。恩人でもあるストラトおじさまにそこまで頼まれて断り切れなかった部分もありますけれど、気になったのも確かでした。ストラトおじさまにここまでさせる国王陛下とは、いったいどんな人なのだろうか、と。

…結局、わたくしの心配は杞憂に終わりました。わたくしのご主人さまは、拍子抜けするほど普通のお方でした。その知謀は恐ろしいほどに切れるのに、どこまでも平凡で…親しみやすい人でした。…そして、とても臆病な人。

後宮に召し上げられた人間で、誰一人としてミノルさんと夜とを共にした人物はいないのです。数ヶ月間、とかいう期間ではなく召喚されて以来三年間　ただの一人も。

…強いていうのであれば、わたくしがそうですけれど、身体を求められたことはただの一度もありません。恐怖で気も狂わんばかりであった事件の直後ですら、快樂に逃避することがなかったのです。

…それはミノルさんの強さでしょうか。…わたくしは弱さだと思つたのです。その行動一つで何かが大きく変わってしまう…そんな変化をとても恐れている　それがミノルさんの一番近くにいたわたくしの印象です。

革命を指導しているのに変化が恐ろしい、などと言えば可笑しいと思われるかもしれませんが、ですが、間違っていないと思つたのです。この三年間、ミノルさんと後宮に召し上げられた人々の関係が変わったことは一度もないのです。

革命の教育者と教え子という関係が崩れたことはありません。ジルヴァさまやレヴェツカさまのように、信頼の度合いが違うことはあってもそれ以上ではないように思うのです。

あるいは、わたくしがそう感じているだけかもしれません。でも、わたくしにしてもストラトおじさまにしても従者と主の関係が崩れたことは一度もないのです。”極めて私的にお仕えしている”わたくしですら、そばにすることを望まれたことはあっても、それ以上を望まれることはありませんでした。

∴はじめは自分の身体の心配をしていたはずなのに、いつの間にか危なっかしくて仕方ないご主人様の心配ばかりしています。

不満とストレスを溜めこむばかりの生活ではないのでしょうか。

皆の手前、愚痴も弱音も吐けないのではないのでしょうか。

いっそ、この身でその苦しみを受け止めることができれば、と思ったことすらあります。”∴馬鹿なヒロイニズムに酔うんじゃない”と叱られてしまいましたけれど。それは本心でしょうか？わたくしの目に映る今にも泣き出しそうなあなたはわたくしの妄想でしょうか？

ねえ、ミノルさん。

あなたは。

きっと眠れない夜を過ごすのでしょうかね。

臆病で弱いあなたは。

もはや逃げ出すこともできないあなたは。

「この夜をどう過ごされるのでしょうか。」

話相手がほしいと思ってらっしゃいませんか。

僅かに光の漏れる寝室の扉を控えめに叩き

「ミノルさん。起きておられますか？」

声をかけた。

四十三話 革命前夜？（後書き）

2011/01/08

最後のほう ヒロイズム ヒロイニズム に変更しました。

四十四話 革命前夜？（前書き）

苦節三カ月。…の割には内容がアレですが。
今までの中では最長の一話になっています。

四十四話 革命前夜？

革命の手はずは整っている。僕が考えうる限りは、ほぼ万全に。すでに計画は僕の手から離れて全てはジルヴァやレヴェツカ…たくさんの人々の手にゆだねられている。…神様なんか、かけらほども信じていないけれど、文学的修辞を用いるのであれば”神のみぞ知る”といったところだ。それでも、不安に駆られて何度も何度も計画を見直してしまう。…その行為には何の意味もないというのに。

いや、意味はあるか。

革命までの時間をどう過ごすか…長い夜をどう明かすか。そのための暇つぶしだ。どうせ今晚は眠れそうにもないから。

明日。

いや、たぶん日付は変わってしまっているだろうから今日のことか。

今日で僕がこの世界に王として召喚されてちょうど三年になる。そのめでたい日を祝して、国中の主だった貴族を集めて大々的な祝賀会を行うことになっている。…いったい何がめでたいのかは置いておくとして。

この三年間続けてきた無能な王としての演技は少なからず意味があったのだろう。国をしつかりまとめられている貴族の皆への礼だと言えば、誰も反対はしなかった。僕としては、この祝賀会を実際に行くとどこまでこぎつけるのが一番困難な課題であると思っていたのだから、少し拍子抜けした感じですらあるのだけれど。まあ、なんでもかんでも壁にばっかりぶちあたらなくて大変結構なことだ

と思う。

そして、このめでたい日に。

この大変な記念日に。

この国は大きな変換期を迎える予定になっている。

明るい将来か、あるいは血みどろの混乱へか。この革命が成功すれば、前者。もし失敗すれば国民と貴族の間で壮絶な内戦へと発展するだろう。…どちらにしても、この国は変革を余儀なくされる。革命という手段が、自分たちの力で国家をひっくり返すことができるということを国民が知ってしまえば、今までのような抑圧的な手段をとることは難しくなるだろう。

曙による情報収集によれば、革命の動きが貴族側にはばれているというような兆候はないらしいが、仮に貴族連中の情報収集能力が曙を上回っており、革命が潰された場合には僕の命はもちろんない。ばれていなくても、革命が失敗した場合には首謀者の追及が進み、僕にまで間違いなく手が伸びるだろう。その先は言わずもがな。

三年前の僕なら逃げ出してもおかしくないような状況だけれど、もうすっかり”当たり前”のことになってしまっていて悲観するのさえ馬鹿馬鹿しい、無駄な労力に思えてしまう。

計画ではこの祝賀会を、王都に住む市民たちが襲撃し、参加している貴族たちを一齐に捕縛してしまうというもの。革命に協力的な貴族ももろともに、である。

一斉捕縛にはきちんと意味があるのだ。国民の間には貴族への不信不満が山よりも高くそびえたっている。今まではそのエネルギーは発散することも拡散することもなく蓄積されてきたわけだが、”革命”という方向性を与えられれば、濁流のごとき勢いで全てを飲み込んでしまうだろう。こうなってしまうえば、貴族側がいくら武力を以て抑えつけようとしても数がモノを言う。止められない流れとなる。革命の成否　僕の生死はともかくとしても、遠からずこの国はひっくり返るだろう。

しかし、そのエネルギーは負の属性を強く帯びている。つまり、憎悪や怨恨といったマイナス感情からくる暗い情熱だ。それらのエネルギーはとても強いが酷く扱いが難しい、攻撃的なものだ。無理に制約をかけようものなら革命の先導者である僕たちまで呑み込まれかねないほど危険なものなのだ。故にその濁流の如き力を一度受け流すために敢えて自分たちの身を危険に晒す必要があるのだ。事が成った暁には当然、その自由を回復するつもりだけれど。

もちろん、僕も貴族の一員であるから一度は縛につくことになっている。…どんな空恐ろしい目に遭わされることになるかは考えないでおこう。

しかし、革命を起こす上で必要な武力という要素が僕たちには欠如している。ジルヴァが中心となって地方貴族たちを口説き落とすことには成功したものの、元々中央―今権力を握っているレーベレヒト・マース伯を筆頭とした三貴族体制から弾き出された者たちばかりで、当然のように監視がついている。兵力を動員などしようものなら即座に事態が発覚してしまうという有様で、頼りにすることができなかつたのだ。これは今思えば当然のことなのだけど大変な誤算だつた。

国を挙げての祭りであるから、軍が警備に出張ってくるのは避けられないし、城に詰めている衛兵の数だけでもかなりの数になる。対する我々はいえ、せいぜい棍棒やら投石といったレベルで戦力とはとてもいえない。しかも、これでは仮に革命が成功したとしても、どれほどの犠牲がでるのか想像すらしたくない。

なので、搦め手でいくことにした。幸いなことに大陸から排斥されるほど危険視された暗躍組織「曙」はこの革命に全面協力してくれることになったからこそできる裏技だが。…後世からどれほどの批判を受けることに成るやら、という手段を執らせてもらうことにした。非道外道邪道…と三拍子そろつた禁じ手だからだ。現代風というならば都市一つを対象とした大規模無差別テロ。

正直、心が痛まないでもないが背に腹は代えられない。それに、

無差別に人々を巻き込むことにはなつてしまつが、最大限の配慮はしたつもりだ。”それ”のにあたっては。

そう、毒だ。

連綿と受け継がれてきた暗殺術の一角を担う薬物知識の大部分は肅正を経て尚ほとんどが失われておらず現存している。

極微量で獰猛な獣を即死させるような強烈なものから、注意力を散漫にさせる程度の軽微なものまで、おおよそ僕が必要としているものが揃っていた。

非致死性の遅効性麻痺毒。

およそ暗殺に用いるには不確実で、不向きなものであり価値を微塵も見出されることなく死蔵され、名前すらない毒だ。当然、効能実験以上の使用実績はなく暗殺に用いられたことは一度もない。まあ、それも当然なのだが。

暗殺とは基本的にいきなり起こせる性質のものではない。綿密にすぎる調査と計画の上に成り立つものだ。僕がこの身で体験したそれにしてもそうだ。対象にそれと悟られることなく即行・確実、一撃必殺を以て成されるのが暗殺術の神髄だ。毒にしても、実力行使にしてもだ。

僕が望んだ麻痺毒に関していえば、彼らの常識の対局にあるシロモノといえるだろう。

安全性については身を以て確かめた。不確定多数の人間を巻き込む後ろめたさを振り払おうとしてのことだったが、意外なことに試験に参加した人数は革命メンバーの過半数に上った。”実験データは多いほうが確実だろう”とか、”主にだけそんな目には会わせられない”とか。いろいろ理由はあつたけれど。…今思えば、僕が決めたことに反論こそでなかつたとはいえ、それなりに皆思うところがあつたに違いないのだ。革命の困難さに関して、くどいくらい

に言い聞かせたし自分たちの不利な立場も徹底的に叩きこんだ。だからこそ、反対意見は出なかったのだ。でも…心は別だ。無関係の人々を巻き込んでしまう危険性を許容するには、贖罪ともいえるべき行為が必要だったのだ。

ともあれ、僕たちが必要としていた情報は手に入った。安全性は極めて高く（毒に安全性云々という言葉を用いること自体がナンセンスだが…）、長期に渡って継続する後遺症の類も確認されなかった。相性の悪い者で数日手足にしびれが残る程度のものだそうだ。

製造に関してはエルフやフェザーフォルクたちが協力してくれたこともあって難なく調達できた。今頃は製造された毒を持って担当する地域でその時を待っていることだろう。衛兵の詰め所、王城各所の厨房、水汲み場、式典会場の給仕、それこそ列挙するのが困難なほど様々なところに協力者たちがいる。

全ては”来るべき時（革命）”のために。

ひとつ大きなため息をついて、かなりの厚みになった計画書を机に放り出した。

ばさつと音を立てて、机に着地したソレは僕にしか読むことのできない。翻訳魔術を以てしても、解読されることのない暗号だ。…といえは聞こえはいいが、要するに日本語で書いた僕のお手製というだけの話。翻訳魔術も人間同士の意思疎通を可能にさせるための魔術であって、それを通じて言語を習得する類のものではない。正確には通訳魔術であるらしい。ふとした思いつきから、実験してみたものの僕にグラーフ王国の文字は読めなかった。ストラトも同じように、僕の書いた文字の意味を読み取ることではできなかった。そんなこともあって、自分でつらつらと書いては修正してを繰り返した計画書はそれこそ思いつく限り全てのことを書きつけてある。改

善することのできた課題、最後までどうにもならなかった課題、不安要素、あまり考えたくない未来のことも…その全てを記録している。どうしようもない不安の捌け口として。

もうひとつ、大きなため息をつきそうになったその時。控えめなノックの音が聞こえてきた。

「ミノルさま。起きてらっしゃいますか？」

こんな時間に僕の部屋にやってくる人物は一人しかいない。この世界で最も僕のことをよく知っている女性。

「ああ、起きてるよ。入ってきて」

「…失礼します」

時間を考えてのことか、小さな声で断ってドアをくぐったのはリデイリシア・ロートリンゲン。僕に仕えてくれているメイドさんだ。

この三年、筋力のほかに成長らしいものがなにひとつなかった僕とは違って彼女は大きく成長したように思う。僕より頭一つ小さかった身長は今や僕と同じくらいにまで迫っているし、体つきも丸みを帯びてぐつと女らしくなった。ずっと近くにいたからこそ妙に意識したりせずに済んだが、外見とは裏腹に失われていない少女らしい素直さやあどけなさにドキリとさせられることが何度もあった。

僕はと言えば、ずっと同じ場所で足踏みしたままだ。

頻度こそ稀になったものの、未だに突如として不安に駆られて蹲ってしまつときがある。悪夢にうなされ、リディアに揺り起こされることがある。

そんな情けない自分とは別に、冷静な判断で革命計画を進めてこられたのは僥倖だと言えるだろう。

まあ、それも数日のうちに終わる。革命の成否はともかく、僕もこの国も大きな変化を迎える。リディアの成長を見るたびにちよつとした嫉妬を覚えずにいられなかった日々も終わる。なにもかも、全てが。

「で、どうしたんだ？こんな真夜中に」

僕は背後を振り返り、そばまでやってきていたリディアに静かに問いかける。

「…驚かれないのですね」

「まあね。僕のことをよく知っているリディアならこんな大事を控えた前日に、のうのうと寝ていられるはずがないと思っただんじやないのかな？」

「…大体、合ってます」

座っている僕と、立ったままのリディア。

自然、見上げる形になる僕からは前髪で隠れた目元を少しだけのぞき見ることができる。なんとなく、釈然としない複雑な表情を浮かべる彼女に得意げに言っただけ。

実際には結構残念な自己分析の結果だ。

ヘタレでチキンで根性無しの僕みたいな人間が、今日には自分が死ぬかもしれないという状況で眠れるはずなんかなくて、優しさや善性の塊みたいなりディアが僕を放っておくはずもなくて。そうすれば彼女が訪ねてくるのは極めて自然なこと。ただそれだけの単純な推測だ。

しかし、ほんの少し陰りを帯びた暗い反応が気かりだった。どこか覚えのある思いつめた感じ。

いつのことだったか、彼女がヒロイニズムに酔って身体を差し出してきたことがあった。自分のことばかりで頭がいつぱいで考えも及ばなかったのだが、革命準備のためとはいえ皆が相当なストレスを受ける状況にあったのだ。多かれ少なかれ、そのストレスを革命の準備に向けることで精神的に活動を行ってきた背景もあるが、それだけでは収まらないことのほうが多かったのも確かなのだ。リディアのことだってそう。僕という大変に厄介な人物の面倒をみななければならず、本来の仕事もあって忙殺されていたとはいえ、革命の及ぼす影響から無縁ではいらなかった。その真綿で首を絞めるかのような緩やかな重圧は、ただの少女でしかないリディアの精神を徐々に侵していったのだろう。その恐怖を、彼女は僕でごまかしていた。”自分よりももっと恐ろしい思いをしているミノルさんを差し置いて、自分が弱音を吐くわけにはいかない”と。いつの間にか、僕は彼女の中で悲劇の英雄のようになっていたのだ。ストレスからくる、思いこみ。そのときは一日中リディアと自分たちの在り方を話し合って事なきを得たのだった。…今度はそういうのとは違うようだけど。

「それで、夜も眠れないミノルさんは何をしていたのですか？」

「ん、ああ。落ち着かなくて、計画を確認していたんだ。今更、変更も利かないってのにね」

僕は机の上を指さしながら苦笑い。

さほど大きくない机、その真ん中に鎮座している分厚い計画書を指さす。

「…いよいよ、明日ですね」

「長かったような、短かったような。待ち遠しいような、いつまで

もやってきてほしくないような…複雑な感じだな」

式典まではもう丸一日も時間がない。

この国にやってきてから三年。今まで過ごしてきた時間からすればほんの短い時間でしかない。

「…意外と、落ち着かれていますね」

「ん？」

「もっと、緊張されているものだと思っていましたけど」

「緊張は、しているけどね。慌てても、嘆いてももうどうしようもないだろう？」

「…それは、あきらめですか？」

リディアの声音が硬くなる。俯きがちになり、下から見上げる僕にも表情はうかがえない。

…でも、彼女の気持ちは分からないでもない。彼女も恐れているのだろう。革命によって起きる決定的な変化を。僕の感じる不安とは違うだろうけれど、本質的には同じ恐怖。

僕が眠れないのと同じように、リディアもまた眠れないのかもしれない。

「思いつく限りの手は打った。だけど、それ以上に相手が上手だった場合は仕方ない、と考えているよ」

「それだけ、ですか？」

「…どういう意味だ？」

「本当に、それだけですか？」

ミノルさんが考えているのは、本当にそれだけですか？

…わたくしは、心配でたまりません」

小さく握られたリディアの拳が小さく震えている。スカートを強く握りこんで、必死に震えを抑え込んでいる。

…なんというか。彼女が心配しているのは自分ではなくて、僕のこと。革命の成否ではなくて僕のこと。一人の人間としてここまで心配されるのはとても嬉しいことだが、同時にとても心苦しいことだと思う。未だ二十歳にもならないような少女が、しなければならぬ心配ではないはずなのだ。そんな世界に彼女を連れ込んだのは間違いない僕だ。そのように仕向けたのも僕。…そう、僕には責任がある。

「正直、覚悟だけはしている。僕の手元に集まってきている情報が正しければ、革命は九割方成功する。

でもね、リディア。一割近い確率で失敗もするんだ。僕にとって十に一つは十分過ぎるくらいにありえる可能性なんだ。覚悟の一つくらいは、しておかないといけない。…できる限り考えないようにはしているけどね」

「ミノルさん…」

「怖いよ。」

革命が成功したって、全部が思い通りにいくはずもない。血が流れないなんてことはあり得ない。誰も死なないなんて都合のいい話はないんだ。ただ、多いか少ないかだけの話だ」

「ミノルさん」

「その責任は、全て僕にある。
流れる血の一滴、散る命の一片、新たに生まれる怨恨も憎悪も
全部僕の責任だ」

「ミノルさん」

「暴力性の否定も、争いの回避も、全部詭弁だ。全て、僕が負わなければならぬ責任を軽くするための方便だ」

「ミノルさん！」

「いいかい、リディア。よく覚えておきなさい。
王というのはそういうものなんだ。誰が何をして、結果的にどうなるかと全ては王（僕）の責任になる。全ての責任を取らなければならぬ存在だということだけは、忘れてはいけない。それが、僕の役割だ」

「それが、覚悟ですか」

「うん。二年かけて、やっとできた覚悟。」

まあ、僕のことだからアテにはならないけどね。多分、そんな場面に出くわしたらまた酷い姿をさらすことになるだろうけど」

そう、薄っぺらい覚悟だ。所詮は頭の中で”理解”しているだけでしかなくて、心も身体も拒絶反応を起こすことは間違いない。しかしまあ、そんなものはどうにでもなるだろう。今までだってどうにかやってきたのだから。

「やっと、分かったような気がします。ミノルさんは…自分をあきらめていらつしやるんですね？」

引き結ばれていた唇から零れおちた言葉は、驚くほどに静かだった。

「……バレたか」

「口ではいろんなことを言いながら、どこか他人事です。まるで遠い国のお話を聞いているようです。ミノルさんにとって、自分とはそこまで遠い存在なのですか？貴方の”考え”ではない、”心”はいったいどこにいるのですか」

いつになく強い意志の籠った言葉は、僕に対する静かな弾効だった。

「心は、確かにこの胸の内にあるよ。それを表に出すつもりはないけどね」

「どうして、ですか？」

リディアが一步、僕へと踏み出す。

「今は、失敗できない時だろう？感情的になっちゃったら、思考が乱れてしまったら、全てが終わってしまうかもしれない。僕の気持だけのために、今日までに築き上げてきた全てを危険にさらすことはできない」

「…それは、確かにそうです。でも、今はなにもしない。今、ミノルさんがどれだけ泣き叫んだとしても聞いているのはわたくしだ

け…それでも、心を隠さなければならぬのですか」

一步。

「それでも、だ。全てをさらけ出すわけにはいかない。今は、ね」

「今は、ですか」

「そう、今は、だ。正直、いろいろなことをぶちまけたんだよ、僕は。でも、今はそうするわけにはいかない、ということさ」

「今は聞くな、と。そうおっしゃりたいのですね？」

「うん。今は話せない。でもね、リディア。秘密を抱えているのはとても疲れることだから、早く楽になりたいと思っているよ。…これは本心から」

「その言葉は、信じてもいいのですか？」

「革命の結果がどうなるかは分からないけどね」

「確約は、していただけなのです」

また、一步。

「…どうにも、自信が持てなくてね」

どうしようもない、自己不信。

この三年、曲がりなりにも計画を牽引し実行寸前までなんとかこぎつけることができたのだから、少しくらいは自信を持ってもいい

だろうと自分でも思うのだが、どうにもいけない。苦笑するしかない、ひねくれた性格。

頭上でクスリ、と含み笑いが漏れる。すぐ傍までやってきていたリディアの笑い声。

「やっと、ミノルさんらしくなったように思います」

先ほどまでの問い詰めるような空気は消え去り、穏やかな口調でリディアは言った。

「なんだ、嫌味か？」

「いいえ、本心です。自信満々のミノルさんも、妙に落ち着いた感じのミノルさんも、不気味でなりません。…いつもどこか自信なさげで、心配そうにそわそわしているほうが、わたくしは落ち着きます」

「不気味で…そいつは、あまりにも酷い言い種じゃないか？」

「わたくしは」と申し上げましたよ？そのほうが、飾らないミノルさんの心が、身近な気がして、いいです」

「そうか…？」

「はい。わたくしの勝手な都合ですけどね」

「…リディアがそうなら、それでいいか」

「ミノルさんは、革命が無事に終わったらどうされますか？」

「正直、”たら””れば”の話はしたくないんだが…そうさなあ」

この国をどうするのか、ではなく。僕がどうしたいのか。本当のことを言えば、全く考えていない。革命の後始末も大変だろうし、そのあと国をまとめ上げるのもまた大変な作業になるだろうからだ。しかし、それでも…やってみたいことというのはある。

「王様らしいことをやってみる、とかいいかもな」

「王様らしいこと…って」

呆れたようにリディアが笑うが、僕は結構本気だったりする。

「無理難題を吹っ掛けて、みんなが右往左往しているところとか、見てみたくないか？我儘気ままな王様、やってみたいんだけどな」

「そうですね…。それは、とてもいいことかもしれませんね」

「だろうっ?」

「ですが」

「ん?」

「その前に、全部話してくださいね？抱えているもの、全て」

笑みを深くしていたリディアは、変わらぬ笑顔のままきっぱりと言いつつ放った。

僕は嘆息する。どうにも、逃げ切れそうにない。

「承知いたしました、マイ・マジエステイ女王陛下」

おどけて見せる僕に、リディアは笑顔で返答。

「よろしい。では、夢語りの続きとまいりましょうか」

「ああ、夜は長いからな。語り明かすでしょう」

夢現の物語を。

四十四話 革命前夜？（後書き）

どこかぐだぐだな感じがするのはどうにかならんものだろうか。
…
ごめんなさい、聞き逃してください。

次は革命本番！…何ヶ月後だろうなあ（遠い目）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6096j/>

あるいはこんな異世界で

2011年1月15日01時09分発行